

絢辻さんと、私と、『証  
明』と

#NkY

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

絢辻詞とオリ主の百合ssです。

(なんであんな化け物と一緒にのクラスになってしまったのだろうか……)

高校2年生の夢女子、橘純奈はなんでも出来る完璧なクラスメイトである絢辻詞に圧倒的な劣等感を持っていた。しかし、純奈は偶然の出来事から詞の仕事を手伝うことをきっかけに、急速に彼女に惹かれていき――。

全体的に糖分多めでお届けします。ちなみに純奈の性格は原作の純一とは全く違います。

# 目次

あの人物は、あまりにも完璧だった

1

日常の風景

4

補習の帰り、教室に点く電気

8

帰り道、私の隣には……

15

遠いようで、近いかも

22

苦手な身内

30

私を、見て

33

唯一無二の、私の幼馴染

40

もう一度、手繰り寄せて

47

頑固者同士

56

手帳がない……！

67

★180度

80

嘘と本当と

100

番外：17歳になる日

107

伝統の危機

131

不安に揺れて

142

嘘を割り、真実を並べる

152

アップサイドダウン

165

BADエピソード：逆転する立場

176

番外：委員長のお仕事

182

★証明

205

友達

227

生きる意味

241

創設祭、詞と一緒に

白と黒、光と影

今ここに、在るということ

エピローグ：わたしの隣に

322 296 279 260

# あの人物は、あまりにも完璧だった

11月。もはや秋の涼しさは消え、冬の寒さを感じつつある時期。

私は椅子の背もたれに体重を預け、先生の言葉を聞き流していた。

創設祭。毎年、学校創設者の誕生日であるクリスマスイブに行われる、輝日東高校の学校行事。全国的には学園祭と呼ばれるような行事で、地元TV局とかが取材に来ることもあるくらいの名物行事。

……正直私はあんまり興味ないから去年も行かなかつたし、今年もまず行かないのだから。

「創設祭実行委員に立候補してくれる人はいるかしら？」

担任の高橋先生が立候補を促すも、当然誰も手を挙げない。私、たちばなじゆんな橘純奈もその大勢のうちの一人だ。

当たり前だ。クリスマス直前にあんな時間が取られる役、誰が好き好んでやるんだろう。

しかも今年は市の協賛があるとのことだ。つまりそれは市が口出ししてくるということで、例年よりも色々と面倒なことになるのは明らかだ。

こんな面倒な役を受けるより、自分の時間を増やしたほうが明らかに得だ。

「はい。私がやります」

あと、この人がどうせやってくれるから。

透き通るような柔和な声の持ち主へ、クラス中の視線が注がれる。

黒く長い、しかしサラサラで美しく、私でも一度は指を通してみたいと思える髪の毛の持ち主である女子は、にこやかな微笑みをたたえながら堂々と起立している。

「あやっし絢辻さん、一応聞くのだけれど……今回の創設祭実行委員は今までの行事よりも大変な仕事だと思っわ。それでも大丈夫かしら？」

絢辻つかさ詞。2—Aのクラス委員かつ、ありとあらゆる行事の委員を引き受けている。もちろん文武両道で人当たりも良く、おまけに容姿端麗。

普通人の短所は長所より指摘できるものだが、彼女に関しては長所を10個挙げるほうが短所を1個挙げるよりも遥かに難易度が低い。それくらい完璧な人物。

この16年——あと1ヶ月もしないで17年目になるけれど——の人生で、周りの人より明らかに『出来ている』と感じる過去のクラスメイトはいるにはいた。

けれどもこの絢辻さんはそれらとは格が違いすぎた。『出来すぎている』人だ。彼女を視界に捉えるたび、彼女のよく通る声を聞くたび。ああ、私は何をやってきたのだろう、と後ろめたさを感じてしまうほどだ。

というか、なんでこんな化け物が同じ高校にいるのだろうか。今更だけど……。

　　「もちろん、大丈夫です。至らぬところもあると思いますが、一生懸命頑張ります」

　　そんな、私の理解の範疇を越えた恐ろしい人間は、負の感情を全く出さずにそう言い切った。

## 日常の風景

登校して、授業を受け、適当に購買で買ったパンを食べ、また授業を受けて、帰る。

その意味があるのか分からないルーチンを6日連続でこなさなければいけないことに、私は前々からずっと不満を募らせている。

なんで大人は揃って勉強しろ、と言うんだろう。人を作るのは学校の勉強だけじゃないというのを、私は分かりきっているのに。

けれど、私にはそんな行動を起こせるような力は当然ない。私にできることはその不満を心の奥底に隠して、決してクラスから浮かないように、けれど面倒事には巻き込まれないよう極力注意して過ごしていくだけ。

何より大事なのは自分の時間……漫画や小説から刺激を受け取って、その夢満載の世界に自分を投影する……そんな時間なのだから。

そう、私はいわゆる『夢女子』なのだ。学校内でも空き時間があれば、私は手帳に夢を書き連ねては満足感を得ている。

……と、まあ。確かに空き時間は私の世界に旅行に出かけ、その出来事を多少誇張しつつも忠実に記している私ではあるが、クラスの内情に疎いわけではない。



旅行に出かけている間も世間話には耳を傾けているし、知れる情報は知っておくようにアンテナを敏感に張っている。少しでも世間知らずが知れ渡ると、元々高くない私の地位がさらに下がってしまうから。

「絢辻さん、この場所、ちよつとよく分からないのだけど……」

「うん？　ちよつと見せてもらっていいかしら」

……あんな感じに私は人気じゃないし頭も良くないし。まったく、なんであんな化物と一緒にクラスになってしまったのだろう……。

「橘。手、止まってる止まってる」

「ふああ!？」

耳元で息混じりのからかうような声。思わず間の抜けた声が飛び出てしまった。あんな声を引き出しやがったもじやもじや天パの犯人は、私だけの繊細な夢空間に土足でがしがしと踏み込んでいった。くっ……よりによってこいつの襲来を察知できないなんて……。

「ふーむ、なるほどなるほど……」

「たなまち棚町やめろつて!」

「『お前つてき、おもしれー女だよな……』』」

「やめろおおお!!」

棚町薫は、土足で上がるどころか乙女のもろく儂い夢の一つを無理やり引き出し外にぶん投げやがった。みるみるうちに顔が燃え盛った私はとつきに奇声を上げることでも流出を防止し、上半身を倒して手帳を覆い隠すことでこれ以上の大惨事を回避するので精一杯だった。

……そう。こいつのせいで、私の夢女子っぷりはすでにクラス全員に知り渡っている。非常に遺憾だが。

「はあ、はあ……棚町い……!」

最大限に恨みを込めた睨みを、そのうぎつたいことこの上ない棚町の弧に歪ませた双眸にぶつける。

「戦場では油断が命取り。知らなかったかしら?」

「どこが戦場じゃい!!」

天才的に腹が立つ笑みを浮かべる棚町の、そのイカシミ焼きそばみたいな髪のとっぺんに夢密度10000%の手帳を思い切り叩きつける!

「ぐええ」

頭頂部にクリーンヒット。想像の10倍ほど清々しい快音が教室内に響き渡る。

「ふう。すつきり。許す」

腕から伝わる気持ちよさからくる満足感から、私は棚町のことを慈悲深く許してやる

ことにした。まだ頬に熱は感じるけれど……。

ちなみに、不本意ながらこのような柵町の悪ふざけは中学の時から日常茶飯事と化しているため、クラスメイトからは「またやってる」みたいな感じだったりする。別に奇特な目では見られていない。

……口が裂けても本人に言えないことだが、ここだけの話柵町の悪ふざけは学校が嫌いな私の唯一の救いだったりしている。あれ、何だかんだ嫌いじゃないし。今のやつだって、自分が嫌いになってたのを荒唐治療だけ一瞬で忘れさせてくれた。

しかし、柵町のことを親友と呼ぶなんてことは100万年たつてもありえないが。

「今度読ませてね、それ」

「……完結させたらね」

「あんた完結しないじゃん」

「まあね」

そんなこんなで授業を始める合図のチャイムが鳴る。

これが、6日連続でつまらないルーチンワークをこなす私たちの、たつた10分の休息時間の一例だ。

もちろん柵町の襲来がなく平和な休息時間もあるけれど……残念ながら、絢辻さんに劣等感を抱かない休息時間はない。

## 補習の帰り、教室に点く電気

「……はあ、時間の無駄遣いじゃんほんと……」

ある日。私は致命的なミスをやらかした。

何よりも自分の時間を確保することに全力な私が、あろうことか課題をすつぽかして見事に補習を食らったのだ。

それも、運悪くすつぽかしたのが補習が超長いと有名な先生の教科。すつかり外の日も落ち、普段私がいるのには絶対ありえないような時間になっていた。

そんな地獄の補習が終わり、私は気持ちしが地の底まで沈んでいた。周りの教室の電気はすべて落とされ、昼の喧騒が嘘のように廊下は静か。どこにいるのだろう、秋の虫の音が冷たく澄んだ空気を伝って聞こえるのみ。がらんとした学校の廊下でその音を聞くのは……心底虚しいものなんだと、私は感じた。

そんな中、ある一つの部屋だけは電気がついていて。2—A、つまり私達の教室。普段の私なら間違いなくスルーする。でも、今日は誰が残っているのか、なぜだか気になつてしまった。

そつと教室のドアを開く。窓際のみ電気がついてる教室。

「えっ？ あ……」

そこにいた人物を認識した瞬間、私の思考は止まって身体は硬直した。最悪だった。なぜなら、その蛍光灯に照らされた女子は私の苦手な――。

「橘さん？ 珍しいじゃない、あなたがこの時間までいるの」

絢辻詞。怖いくらいに完璧な、まるで機械のような優等生。そんな完璧な絢辻さんと私が、2人きり。

……今日の占い、最下位じゃないよね。沈みきっていた心にさらに追い打ちをかけるように、絢辻詞という人物が放つ空気が私を追い詰めて動けなくする。そんな沈んだ心をなんとかして、私は繕って……お世辞にも綺麗にとはとも言えない、突貫工事でほんとはなんとかして繕って。普段どおりという仮面をどうにかしてでっち上げて、会話を話す。

「私、今日課題忘れちゃったの知ってるでしょ。それで、あの先生の補習を食らっちゃって……」

「そういえばそうだったわね。お疲れ様」

絢辻さんが清楚な微笑みを私に向けながら、ねぎらいの言葉をかけてくる。

アニメをよく見るからなのだろうか、私は声フェチだ。私は声色によつてキュンときたり、癒やされたりという経験がかなりある。

……そして、彼女の柔らかな声質でかけられたその言葉は、不覚にも私の沈んだ心に染み渡って。私の粗末な付け焼き刃の仮面は、絢辻さんのたった一言、それも何の変哲もない言葉で……たやすく割れてしまった。

「ありがとう。ちよつと、救われたかも……」

「救われた？」

「あ……ううん、気にしないで」

こんなことが思わず口からこぼれたのは、多分心の底からそう思ったから。……なんだろう。普段意識的にあんなに避けていたのに……。

ふと、何かほのかな、掴みどころのないものが心の中に浮かぶ。これってなんだろう……私は少し、考える。

絢辻さんに甘えたい？ ……この？ ……私が？

でも、自覚した瞬間、それは急激に形を成し、またたく間に私の身体のすべてを支配した。

この沈みに沈みきった私を助けてくれるのは、絢辻さんしか、いない。そう信じて、私は狂って。……甘えたいという熱情が、劣等感を消し去ったのだ。

絢辻さんは教室の机を4つほどまとめてくつつけて、膨大な書類の山を築いていた。もしかして……いや、まさか。

「……これ、全部絢辻さんが？」

「ええ」

なんてヤツだ。たった一人で、こんな量の書類をこなすなんて。私はまだ高校生だからあんまりわからないけれど、でもこんなのは並の大人でも引くレベルの量じゃないだろうか。

「もしかして、毎日？」

「毎日書類作業をしてるわけじゃないし、仕事の量も変わるけれど……でも、創設祭実行委員になってからは、いつもこんな感じかな」

恐ろしい。なんでこんな仕事量を毎日こなして疲れているに違いないだろうに、普段通りの柔らかい絢辻さんのままでいられるんだ。もし私なら四方八方に愚痴を乱射するに違いない。

「うっわ……大変だね」

「でも、特に今年の創設祭は絶対に成功させたいから」

「特に……？」

「ほら、高橋先生も言ってたでしょ？ 今年は市の協力があるから規模も大きくなるし、当然来てくれる方も増えると思うのよ。だからそれに相応しい……ううん、来てくれる方々も驚くようなそれ以上のクオリティにして、みんなの思い出に残るような、そんな創設祭にしたいの」

何なんだこの模範解答。本心にしては出来すぎている。でも……あんな完璧な絢辻さんなんだから、本心なんだろうなきつと……。

「すごいね、絢辻さんって」

「そう？」

外でなんとか繕っても、膨らみ続ける劣等感。なんで絢辻さんに甘えたいなんて思ってしまったのだろう。沈んだ心の救いを求めた結果、結局正しさの刃に傷つけられているじゃん……。

「私、他の人のために、なんて考えたことないから……」

思わず、こんな弱音を吐いてしまった。傷ついた私の心は、傷つけた張本人でもいいから助けを求めているようだった。

「他の人に喜んでもらうのって、達成感があるし気持ちいいわよ。やらなきや分からないこと、かもしれないけれど」

「やらなきや分からない……か」



なんだろう。胸の奥底に、すつとおさまるような。

私は絢辻さんの言うことを、今は信じようと思った。あと、そのまま絢辻さんを置いて帰るのは、沈んでいたところを助けてくれた私の心が許さなかった……というのもあるのかもしれない。それに……どうせ今帰ったところで大した時間は残されていないだ、ならいつそ限界まで削ってしまおうというやけくそじみた気持ちもあった。

普段の、自分の時間を最優先に考える私は、こんな行動を取るはずがなかった。

「絢辻さん。仕事、手伝おうか？」

「えっ?」

面食らったかのような表情をする絢辻さん。

「そんな、橘さんも長い補習が終わったばかりで疲れてるでしょ? 慣れないことしないで、帰って身体を休めたほうがいいわよ」

しかし、すぐに『いつもの』顔に戻って私のことを気遣う絢辻さん。けれど、こういうときは変に頑固になる私に、絢辻さんの言うとおりにするという選択肢など今更なかった。

「どうせ今帰ったって自分の時間はそんなにないから。それに……『やらなきや分からない』、でしよ?」

「え……?」

今、私は絢辻さんを手玉に取っている。なんだか、優越感。

「手伝うの……迷惑？」

「そ、そんなことないわ。嬉しいわよ」

「じゃあ、手伝わせて。私、絢辻さんみたいには出来ないけど……やれるだけやってみる」

絢辻さん押し切って、私は絢辻さんの手伝いをする事になった。自分の時間を思い切り犠牲にするバカみたいな行動なのに、なぜだか私の心は満足感の入浴剤がたっぷり溶け込んだお風呂の中でくつろいでいた。

理由は分かる。変な言い方かもしれないけれど、私は絢辻さんに……

「……初めて勝てた、かも」

「勝てた……？」

「な、なんでもない。忘れて」

……独り言がこぼれる癖、治ってくれないかな……。

## 帰り道、私の隣には……

「これで、最後……つと」

仕事をくびびっていた。結局私は絢辻さんに助けられながら悪戦苦闘の末、なんとか書類作業を完遂した。

「よし、終わったああー！」

私は腕を広げて天井を仰ぎ、解放された喜びを全身で表現した。悪戦苦闘の後の達成感。一過性の快感だけれど、なんだか癖になりそうな快感。

「くすっ。お疲れ様、橘さん」

結局、絢辻さんに勝てた、なんていうのは幻に過ぎなかった。手伝うと言ったものの、要領の良さでは当然絢辻さんに勝てるはずもなく。それどころか逆に私の仕事を手伝ってもらって……端的に言えば、私はダサいとしか言いようがなかった。

達成感という一瞬の晴れ間は、すぐに分厚い罪悪感という重い灰色の雲に覆われた。

「絢辻さんありがとう。その……迷惑だったよね」

「ううん。いつもより数倍楽しかった」

「気を使わなくてもいいのに……」

「このあと、一緒に帰りましょう?」

「え?」

本当にいいの? と私は絢辻さんに聞く。きつと、間が抜けた顔をしているんだらう。

「本当に迷惑だったのなら、一緒に帰るなんて誘わないわよ。ね? いいでしょ?」

「う、うん。分かった」

今度は私が絢辻さんに押し切られてしまった。……絢辻さんって、そんなに積極的なイメージないんだけどなあ。

——※——

職員室の高橋先生に仕事の完遂を二人で知らせ（私がいることに先生は少し意外そうに思っていたが）、私と絢辻さんはすっかり暗くなつた昇降口を出た。

まばらにある街灯に照らされた薄暗い中庭。一年半以上通つた学校の、今まで見たことのない違った一面を目の当たりにして、私の心はなぜだか高揚していた。

「もうすっかり夜だね」

「そうね、思ったよりも仕事が多かつたのかもかもしれないかも」

空を見上げれば、乾燥した空気を通して、満月よりかはちよつと足りないくらい月の光が私達を照らしているのが見える。星も点々と見え、赤く点滅する動く光は……飛行機だろう。

深みのある漆黒の中、かすかな、しかし確実にある光。こんな光景を見るのも久しぶりなのに、まさか制服を着たまま、カバンを持ったまま。そして――。

「こんな時間に帰るのは初めてだよ」

「橘さんはそうかもしれないわね」

あんなに私が避けていた絢辻さんの隣で、見ることになるなんて。

月明かりと、白く冷たい街灯に照らされて浮かび上がる絢辻さんの、清廉潔白で整った横顔の輪郭。普段遠くでしか絢辻さんを見たことがないのも手伝って、私はそれが幻想的に見え、軽く心を両手で包まれるように優しく締め付けられるような……そんな心地よい苦しさがあった。

簡単に言えば、見とれていた。でも、なんとなく、簡単に、見とれていた、という一言で済ましたくないような……そんな、感じ……感じ、というのはなんかおかしいかなんだろ……と、とにかく、そういう複雑なあれ。

「絢辻さんは、こんな遅くに帰るのって結構あるの?」

「ええ、そんなに珍しくないわね。もっと遅くなる時だってあるし」

「もつと……う？」

どうして絢辻さんは、そんなに自分の時間を他の人のために捧げることができのだろうか。他の人が喜ぶという見返りがあると Saying いたけれど、それにしても釣りが取れないんじゃない？……

「……多分、今日も『もつと』の日になっていたかもしれないわ。ありがとう、あなたは心配なのだろうけれど、私はちゃんと助かっているから安心して」

「そ、そう？」

「ええ。それに、私いつも一人だから……あなたがいるだけで、ちよつと楽になった」

私がいて、良かったんだ。今までコンプレックスだった、正直一緒の空間にいてほしくなかった、私の苦手な完璧な人。その人に、私は今認められているんだ。

なんだろう……外の空気は確かに寒くて、私の耳を痛めつけてくる。でも、私の鼓膜から伝わる絢辻さんの言葉は……すつと、心に溶けて、身体の隅々に行き届いて……うん。すごく、心地いい。あつたかい……。

「……橘さん、どうしたの？」

「ふああああ!!」

いきなりぐいとびーんと身体が伸び切って硬直した。思考停止。時間が止まる。

「ひゃつ。突然大声出さないでよ、びっくりするじゃない」

「ご、ごめん。なんか……ぼーつとしてた……!」

「くすつ。変な橘さん」

絢辻さんに。あの絢辻さんにからかわれた。超恥ずかしい……顔から火が出そう、つていうのはこういうことなんだと思う……っ!

でも……変な橘さん、か。確かに今の私は……。

「……私でもちよつと変だなって」

「そうなの?」

「なんであんなこと思ったんだろ、つて……」

「あんなこと?」

絢辻さんの顔が私を覗き込む。あ……私つたら、また……!!

「……な、なんでもない! 忘れて!」

こんな、……もう、こんな……ううっ!

すっかり混乱しきつた私は考えるより前に、足が動いていた。逃げるように全力疾走。

「あ、橘さん!? 待って、夜は危な……」

「え……？」

ローファアの先端が地面の模様のくぼみにハマる。身体が重力から一瞬だけ解き放れたような、ふわりと浮く感覚。やってしまった。これは……転ぶ……！

さすがの絢辻さんも、そんな突拍子もない行動に出た私を助けることは出来なくて。まるでヘッドスライディングのような格好でびたん、と私は地面に身体をぶつけてしまった。

「いったたた……あ……」

嫌な予感がする。なんか……お尻がやけに……すーすーする……。

「みず……いろ……？」

思わぬ事態に絢辻さんも見たままをつぶやいてしまう。

……つまり……詳細は伏せるけれど……そういうこと……で……。



「ふああああああああああああああああああ!!」

私の絶叫は、深い黒のはてない空間へと吸い込まれていった。

## 遠いようで、近いかも

私と絢辻さんは河原の近くまで差し掛かっていた。河原まで特別遠いわけではないのだけれど、でも、今日はやけにそこまで着くのに時間がかかった気がする。

「……」

「……」

「気まずい。別に普段は2人きりの状況で無言でも全然気まずく思ったりしない私だが、今回ばかりはこうなるに至った過程が過程だから……」

「まあ……原因は勝手に舞い上がって勝手に混乱して自滅した私、なんだけれど。」

「……ね、ね。ちよつと、思いきって言いたいことがあるんだけど。いいかな？」

「え？」

「そんな空気の中、絢辻さんが口を開く。思い切って言いたいこと？ 絢辻さんの口調はほんといつもどおりの柔らかく透き通った感じで、とても怒っているようには思えないけれど……少し身体がこわばってしまう。」

「結構、可愛かったわよ？」

「はい？」

「その……あなたの、下着……」

私の足が歩き方を一瞬で忘れたかのように止まった。思考停止その2。

まさか、気を……使って……？ にしても、絢辻さんの口からそんな言葉が飛び出るだなんて……！

「……橘さん？ その、気を悪くさせちゃったらごめんね？」

「う、ううん。平気……！」

顔に熱が帯びるのをはつきりと感じて、ぎゅうう、っと私は目を閉じてうつむく。外気は確かに寒い、のに、のにつ……熱い……！

「そ、それにね、元は私が勝手に暴走しちやっただからそうなっちゃっただけ、だからね？ だから……その……ありがと……」

上ずって情けない声で私は絢辻さんを落ち込ませないように必死にフォローする。最後の『ありがと』は、多分……聞こえて、ない、よね。

「ふふっ。どういたしまして」

「ふえあああつー！」

ばつちり聞こえてたようで……！ 私はこのどうしようもない熱さを発散させようと、その場にかがみ込んで縮こまった。

「……意地悪」

「そうかも」

私は絢辻さんに完全に手玉に取られた。でも、それはそれで悪くないし、それに……。「私、絢辻さんつてもっとお堅い人だと思ってたけど、違うんだね」

「そうでしょ？ だって、今はあなたしかいないから、ちよつとだけ羽目を外せるの」  
私はすつと立ち上がり、絢辻さんとともに再び歩みを進める。川から伝わるひんやりとした湿った空気が、私の熱を帯びた身体を優しくクールダウンしてくれる。

「私しかいないと、変わるの？」

「うーん、なんだろう……私、橘さんのことを面白い人だなんて、思ってたね」

「面白い……？」

まるで夢小説のようなことを言われた。確かにいつか言われた言葉だけ……。まさか、本当に言われるなんて、しかも、あの絢辻さんに……。

「そう。あんな量の書類を見て、手伝うって言って聞かなかつたのは橘さんが初めてだし……」

「そうなの？ 意外」

「ええ。手伝うって言うてくれた人は他にもいるけれど、ほんとに手伝ったのは橘さんだけなの」

「そうなんだ……」

多分、手伝っても邪魔になるから、みたいな感じで遠慮しちゃうんだと思う。私もそう思ったし、実際作業の途中は邪魔になってそうなのがしたし……。

でも、さつき助かってるって言うてくれてたから、多分私は邪魔じゃなかったんだろ  
うな。

「それでね、橘さんって結構ドジなところあるでしょ？」

「ど、ドジ!？」

初めて言われたけどこれは言われたくない言葉だった。……でも……絢辻さんに、なら……。

「そう。今日帰るときだって、ね？」

「否定……できない……」

また思い出してきた！ 顔に熱がぶり返してきた……！

「だから、さつきみたいにならなと踏み込んで意地悪してもいいかなー、って気にさせてくれるの」

「意地悪ーっ……!」

熱をふくんだ頬を膨らませて、後ろで両手をぎゅううつと強く握り拳を作って楯突いてみる。

「くすっ。だって、意地悪してるんだもの。ごめんね？」

手を合わせて、ちよつとだけ眉をハの字にして謝る絢辻さん。絶対反省してない。

「ま、まあ……いいけど……」

でも許しちゃう。だって……

「それに……なんか、嬉しい。私、絢辻さんって遠い人だと勝手に思ってたから……」

絢辻さんを遠いと思っていた。ふと口を出してしまった本心に、私はすぐに気づいた。まずい。これは……言っちゃいけないことでは……!?

「あ、ごめんね！ つい……!」

「ううん、気にしてないわ。私、クラスの雰囲気はちゃんと——」

絢辻さんが言葉を紡ごうとしたその時だった。

「あ、詞ちゃん！ 今日遅くまでお疲れ様——」

混じり気のない、純粹を形にしたような女の人の声に、私と絢辻さんは呼び止められた。

その時見せた絢辻さんの表情は、きつと心の奥底にはびこるように住み着いて忘れられないものになると思つた。

なぜなら——いつも柔らかくて明るい絢辻さんの表情が、一瞬だけ、ほんの一瞬だけ

……むっとしたような、はつきりとした嫌悪の表情になったから。

「ごめんね、橘さん。先、帰るね」

「えっ……」

「帰り道、付き合ってくれてありがとう。楽しかったわ。あ……あと、さつきのこととこれは関係ないから。ホントだから、ね。……じゃあ、またね！」

「あっ……ま、また……ね……？」

私が呼び止める間もなく、絢辻さんは言葉をまくしたてると、そのままほのかな薫りを残して行ってしまった。

「あっ、待ってよー!! せっかく迎えに来てあげたのにー!!」

すたすたと早歩きで帰る絢辻さんを、追いかけるさつきの女の人……あれは、姉、なのだろうか。迎えに来た、と言っていたし、それに風貌もなんとなく似ている感じがする。今の夜空に深く溶け込みそうなほどに黒い、サラサラとした長い髪なんて絢辻さんとそっくりだ。

でも……まどついている雰囲気は全然違うような……。

とにかく、私と絢辻さんとの時間は、あの女の人の登場によつて意外な形で打ち切られてしまった。

「うう……もしかして、嫌われちゃったかな……」

失言にすぐに気づいて謝れたのは、一応よかった。まあ、もつとも失言しない方が数百万倍マシではあるんだけど……でも、そこはちゃんと私をフォローしてあげないと。絢辻さんのおかげで救われた心を、そうやってわざわざ私の心を私自身で沈ませるなんてことをするのは絢辻さんに失礼だから。それに……。

「関係ない、つて言ってくれてたから。大丈夫、だよね」

うん。きつとそうだ。きつと……そう。不安はあるけど、今は絢辻さんの言葉を信じるほかない。

それに……あの人が来た瞬間に、絢辻さんは帰ってしまったわけだし。つまり絢辻さんは……。

「あれ、案外私と同じ、なのかも」

こんなところで、共通点を見つけることができるなんて。私の勘違いかも、しれないのだけれど。

「でも……もうちょつと、絢辻さんのこと……知りたくなってきたかも」

絢辻さんは、遠いようで、実は近いのかもかもしれない。私の胸の中に、確かに浮かんだ小さな想い。その想いを確かめるように、私は胸のちようど真ん中に両手を置いた。

コート越しでも確かに感じる、私の鼓動。心地よさそうに、いつもより少し早く打っている。仕事の充実感と、疲れと、そして絢辻さんという新たな興味と。それがちよう



どよく混ざり合って、身体に染み渡って。

「明日お休みなのがちよつと残念かも。今の気持ちを忘れないうちに、絢辻さんに会いたかったのに……」

たった一日で、私は変わってしまった。変えられてしまった。でも……。

「悪くない、かな」

この先の帰り道、あの整った横顔を眺められないのは少し寂しい。あの、私を救ってくれた透き通る声を聞けないのはもつと寂しい。

けれど明日、夢の世界の知識を思い切り吸収してしまえば、きつとあつという間に時間は流れてくれるだろう。そして、あさって……。

「また、絢辻さんと仕事をして……」

……ふと、我にかえる。一体、どれくらいの独り言をこぼしてたんだろう、私……！  
「ああ、もう！ 私ったら、何なんだろう……!!」

これほどまでに熱が湧き上がる日なんて、そうそうない。私の足、動け、動け、早く、もつと早く、前に……!!

## 苦手な身内

月曜日。6日のつまらないルーチンワークを再びこなす日常が戻ってくる。でも、今までの、何が何でも全部6日間が嫌いだ、という私はもういない。

なぜなら……絢辻さんに、会えるから。

「ふふっ……」

あの一日で、私は絢辻さんにまるつきり作り変えられてしまった。あんなに憂鬱だった月曜日を、楽しみにする日が来るなんて思いもしなかった。

だから私は、今まで牢獄のように思うほど嫌だった校舎に向かって、軽い足取りでいつもより早く向かっているのかもしれない。

それに、いつもより早いせいかな、あいつも……。

「はあ、はあ……やっつと、追いついたぞねえね……!」

何で来るんだろう。ほんと。

平和な登校の時間は、だいたい彼女にぶち壊されるのが日常。知ってた、いくら私が早くに出ようたって……こいつは……。

「なんで置いてったのねえね! 一緒に行くこうよ!」

「嫌だ。そんなにベタベタしないで。もう高校生でしょ。あとねえねって言うな」

「そんなー、可愛い妹をぜんざいに扱うなんて、みやー信じられないよー」

「あーもう、うつとうしい。あとそれを言うならぜんざいだから」

いい年して甘えにくる妹の美也。高校一年生。私は正直、彼女が苦手だ。

「あ、逢ちゃんあひと紗江ちゃんさえだ！　おーい！」

そんなもつてああやつてすぐにどつかに行く。はあ……あんな人が身内じゃなければまだ良かったのに。

あんな人を振り回すのがとことん好きなくせして、彼女の人脈はかなりの広さを誇っている。さつき行つた一年生のクラスメイト2人だつて、一人は水泳部のホープだし、もう一人はなんと社長令嬢さくざうという噂を聞いている。

それだけでない。私の幼馴染、桜井梨穂子さくらいりほことも上手い具合に甘えていて可愛がられるし、さらに、一体どこからどういふ接点を持つたのか皆目検討もつかないが、輝日東高校きびとうこうの中で知らない人はいない超人気者、いわば学園のマドンナとでも言えはいいのだろうか。そんな普通の1年生などそうそうお近づきになれない3年生、森島もりしまはるか先輩にも気に入られしよつちゆう可愛がられている。

もちろんそれはほんの一部。私の知らない人脈が山程あるに違いない。それに、それなりの頻度で美也は男子から告白を受けていると、美也は家で話している。もつとも、

全部断っているらしいが……。

じゃあなんでそんな彼女が嫌いなのかというと。

確かにうつつとういしいしうざったいが、実は別に美也が悪いわけではない。悪いのは私。

そう、私は……架空の世界に思いを馳せる夢女子で、自分優先主義。他の人のために時間を割くなんてありえないと、そう思っていた。……もつとも、その信念は今では完全に崩壊したわけではあるけれど。

それに対して、美也はあんなふうに人のために喜んで時間を割くし、それであんなにも可愛がられる。人気もすごいし、モテる。あんな眩しい妹は……はつきり言つて、私のコンプレックスだ。

だから……無意識のうちに、きつと、遠ざけようとしてしまっている。絢辻さんだつてそうだった。あんな化け物、いなければ良かったのにと何度思ったことだろう……。

他の人に時間を割くなんてありえない。その考えが消えた今でも、私は美也を避けるのをやめることができない。

美也は悪くない。悪いのは、弱い私。

……すっかり、気が滅入っちゃったな。一人になった私は、冷たい朝の空気にまともりつかれながら。アスファルトにある白線のかすれを探しながら登校した。

## 私を、見て

数学は嫌いだ。結果も過程も、たった一つが答えだから。

これはこう解いて、こういう答えになる。そこに私の心とか、世界とか、夢とかが入る余地なんて、まったくない。

世界の法則なんて、私の考え一つで変わればいいのに。

……さっきのはさすがに冗談だけど。でも、やっぱり一つに括り付けられるのは苦手。

「じゃあこの問題。絢辻、前に出て解いてもらえないか？」

まだ若い数学の男の先生に促され、完璧な美少女は透き通るような黒い髪をたなびかせ、黒板に向かう。

絢辻詞。私の、憧れ。

先週の土曜日に一緒に委員の仕事を手伝ってから、私は絢辻さんのことを憧れの対象として、はつきりと自覚するようになった。その前までは、信じられないくらいに避けていたのに。

絢辻さんは数学のノートを手に持ち、そこに書かれているであろう自分の回答を見な

がら、黒板に、流麗で、華奢で、繊細な筆跡を残していく。

もしあの文字を指でつついたらすぐに崩れてしまう、そう思ってしまったほどに絢辻さんの文字は美しかった。先生の字が無骨な字だから、絢辻さんの字がより儂さを強調させる。

絢辻さんが残す黒板の文字にさえ、私は惚れ込んでしまっているのかもしれない――。

そう、私の脳裏によぎった直後。異変は起こった。

黒板にチョークをこすりつける音が少しずつ弱まっていく。文字を書くスピードが少しずつ遅くなっていく。嫌な予感を察知し、不穏にざわめき出す教室。

そして、絢辻さんの新雪のように白い手が、2という文字を黒板に記す最中。ぴたり、と手が止まったと思えば、まるで芯を突然失ったかのように、絢辻さんの身体がふらりと――。

「えっ……」

絢辻さんが、教壇で倒れた。



「ごめんね、橘さん。授業中なのに……」

「ううん。気にしないで」

保健室のベッドの上で申し訳なさそうに口を開く絢辻さんを、私は制する。息混じりで、少し辛そうな声色。あんなに完璧だと思っていた絢辻さんが、今私の目の前で弱り、無防備になっている。私はそんな絢辻さんを……

「守ってあげたいから……」

「えっ?」

「な、なんでもないなんでもない!!」

自分の顔の前でワイパーフル稼働。柵町の前でやらかすよりまだましだけど……。

「くすっ。ありがとう」

「うっ……なんでもないんだって……」

でも……絢辻さんの笑う顔が見れるのなら、私の変な癖も嫌いじゃない……かな。けれど、恥ずかしいものは恥ずかしいから、話題は逸らす。

「それよりそれより! 具合はどう、かな?」

「大丈夫よ、大したこと……」

言葉を続けようとするも辛そうなせきに遮られる絢辻さん。これは保健室で少し寝たくらいじゃ治らなさそう……それに。

「大したことあるじゃん。目にくまも出来てるし……ちゃんと寝れているの？」

「え……ええ。それは大丈夫、だから……」

ちよつと、表情が曇った？ ……気のせいかな。

でも、何度も大丈夫という絢辻さんは、なんだか……私のことを、避けているような……そんな、気がしてきちゃって。

避けてるんじゃないんだろけど、ほんとには私のことを気遣ってくれているんだろけど。でも。……そう、思ってしまう私があった。

昔の私なら、それが好都合だった。

でも、今の——絢辻さんのことをもつと知りたい、今の私は、そんなこと……！  
だから。

「私を、見て」

「えっ。……ど、どうしたの？ 突然……」

「あっ……」

気持ちが高ぶりすぎたのかも。私は身体を乗り出して……気がつけば、私の目の



前に絢辻さんの顔があった。

「ご、ごめんね絢辻さん。急に、近づいちゃって」

「う、ううん。気にしてないわ」

でも、今は……この気持ち、素直に伝えたい。

けれど、少し距離を取って冷静になつてから。私は溢れ出した想いをそのまま口にした。

「でも、何でもかんでも大丈夫って、言つてほしくない」

「え?」

「うん。だって……私も、いるから。絢辻さんの完全な代わりにはなれないし、多分頼りないけど。……でも、私も頼つて欲しい」

私は絢辻さんの目をしっかりと見た。絢辻さんも何かを感じ取ってくれたのだろう、私の想いを真剣な顔で聞いてくれた。

「……そこまで言われたのは、初めてよ」

「絢辻さん……」

「でも」

私ははつとした。その言葉の続きを、聞きたくなかった。

「……ほんとに、大丈夫だから。心配しないで」

そう言った絢辻さんの顔は、すごく優しく微笑んでいた。なぜだろう、私のお腹の辺りに、何か冷たくて、鋭いものが刺さったような、そんな苦しさを覚えた。

「橘ー、そろそろ授業に戻って先生が」

「あ、棚町……」

どうやら、授業をサボるのも時間切れみたいだ。保健室のドアから、棚町が呼んでいる。

「ごめんね、絢辻さん」

「ううん。むしろ、ありがとう」

「……元気になってね、それじゃあ」

絢辻さんに精一杯の明るさと笑顔を伝えて、私は保健室を出た。

……私にしては、いい演技が出来たと思う。

「橘、絢辻さんの様子どうだった？」

「えつと……重くはないけど軽くもないって感じだと思う。……多分早退になりそうかな」

2—Aの教室に戻る途中、柵町から絢辻さんの様子について聞かれた。

「なーるほどね。で……なんでアンタが元気ないのよ」

……さすがに、柵町の前では私は演技が出来ないみたい。

「もしかしてもう風邪がうつった？ としたら絢辻さんの病気、もしかしてパンデミックを引き起こすかも……」

「違う、違う。それにもしそうだとしたら柵町も危険でしょ」

「あ……うー！ げほっげほっ！ 急に具合があー。これはもしかすると、超危険な病気かもしれないぞー」

「……あはは」

私……なんだかんだ救われてるんだよなあ、柵町に。

## 唯一無二の、私の幼馴染

「一番最後の時間の体育は、中々こたえるものがあるなあ……」

放課後。普段の私なら真っ直ぐ帰るに限る。今日みたいな疲れている日ならなおさら。

……なのだが、今日はそうしないことにしている。お昼前に早退した、絢辻さんのお見舞いにでも行こうかと考えているからだ。

大丈夫だ、つて言われて。距離が遠ざかるような気がして。

でも、あの一言でせっかく近づき始めた絢辻さんとの距離が遠ざかるのは、どうしても嫌で。

保健室から教室に戻る最中、迷惑を覚悟で私は心に決めたんだ。あんなことで大人しく一步下がったら絶対にダメ。怖がらないで、ただひたすら押していけ、純奈。

実は私と絢辻さんの家はそこまで遠くない。ほんの少しだけ帰り道からそれるだけで、絢辻さんの家には着く。

なんで場所を知っているのかというと、まあ……偶然遠目に絢辻さんが家に帰るところを見たから、としか。ほとんど帰宅ルートが同じだから、帰るタイミングが被るとそ

ういうことが起こるわけで。

ちなみに絢辻さん側が私の家を知っているかどうかは分からない。

一回風邪を引けば分かるかもしれないけれど……あ、でも絢辻さんはどうせ委員の仕事とかで私のお見舞いどころじゃないだろうし、それにお見舞いに来てくれるのは……。

「純ちゃん、だくれだ！」

「梨穂子」

「ええ〜っ!? 即答にもほどがあるよ〜……」

桜井梨穂子。少し淡い茶色がかった髪をして、ほんのちよつとぼっちやりしている（私目線だと全然気にならない程度）の、私の幼稚園時代からの幼馴染。最近はクラスも違おうし、茶道部の活動もあつてか今までよりかは話す機会が少なくなつてきているけども、それでも私の大切な友人なのは変わらない。

というか、ほぼ梨穂子ただ一人、つて言つていいような存在なのかも。私と梨穂子が離れ離れになる未来なんて想像できないし……。

「だつて純ちゃんつて呼ぶのは梨穂子くらいしかいないし」

「あれ〜、じゃあ橘さんつて呼んだらバレなかつたかな」

「そもそも今更、梨穂子の声なんて間違えるはずないし？」

「えへへ、純ちゃんって耳が良いんだね」

「うーん、それってちよつと違う気がするんだけど……」

梨穂子は見ているの通り、ちよつと間が抜けているというか、まあ……端的に言えば超癒し系のいい子。梨穂子と話すと、私はいつも元気になる。

柵町には渋々救われているのを認めざるを得ない、みたいな感じなのだが、梨穂子に聞してはむしろ感謝を思い切り伝えたいって感じ。何回かちゃんと口に出して、ありがとうって梨穂子に伝えているのだが、梨穂子はそのたびに私にもありがとうって言うってくれる。

……ほんつつつとに、梨穂子と幼馴染で良かった。梨穂子がいなかったら、私、学校に通えていたかどうかってレベルまで行っていたことがあつたし。

ちよつと気がかりなのは梨穂子にもらったものを私はちゃんと返せているか、釣り合っているかってところなのだが……。

「えくつと……そうだ。純ちゃんって今から帰るところなの？」

「うん。あ、でも……」

「でもっ？」

うーん、しかし梨穂子と久しぶりに帰れるチャンスと被るのはちよつとツイてないかも。……でも、絢辻さんに会いたいし……。

「クラスメイトのお見舞いに行こうかなって思ってた」

まあ、梨穂子には悪いけれどこつちを優先させようかな。どうせ途中まで梨穂子と一緒に帰れるし。

「クラスメイト？ それって誰なのかな？」

「絢辻さん。多分、名前は知ってると思うけど」

「うん。なんか色々やってる、すごい人だよな」

「当たり前。その認識であってる」

さすがにあんな完璧で活動的な人物はクラスが違っても知れ渡っている。ひよつとしたら学年を飛び越えて、全校レベルでも結構知っている人がいるかも。

「そんな人でも風邪を引いちやうんだね。頑張りすぎちゃったのかな？」

理由はさすがに誰にでも推測出来ると思う。でも、梨穂子が純粹すぎて眩しい。

「多分そうなんだと思う。私この前に仕事手伝ったんだけど、帰る時にはもう真っ暗だったんだ。それがここ最近毎日続いていたんだと思うから……」

「そうなんだ。でも……絢辻さんと私って全然接点ないから、お見舞いに行きたいのは山々だけど、迷惑になりそうだから止めておいた方がいいよね」

接点のない絢辻さんにも、梨穂子はお見舞いに行きたがっている。

梨穂子は優しい。ほんとに優しい。私は何度、この優しさに包まれて救われたのだろ

う。私とは正反対で、私には持っていない純粹な優しさを梨穂子は持っている。

……でも、私は梨穂子にコンプレックスを抱いて、遠ざけるということは絶対にしな  
いと思う。なんだろう、その……おひさまの光みたいな優しさに、甘えられる場所を私  
が求め続けているから、なのかな。

端的に言えば、私は、梨穂子なしでは生きられない。

「うーん、それならそうだろうね。でも、絢辻さんならなんだかんだ気にしないと思うけ  
どね、絢辻さんもすごくいい人だから」

「そうなの？ でも、やっぱりやめておくよ。ちよつと怖いし」  
「ん、分かった」

私はちよつと残念そうな梨穂子の頭の上に軽く手を置いた。梨穂子はそれに嫌がる  
様子もなく、えへへ、と満足そうにニコニコした。

幼馴染の頃からずっと、私と梨穂子はこんな感じ。そういうスキンシップは、もうい  
つものこと。

でも、身体が大人になっていくにつれて、梨穂子が私に触れたり、私が梨穂子に触れ  
るときに、何かあたたかくて、ぽかぽかするものが、身体の中から生まれて幸せな気持  
ちになるような、そんな感覚を覚えるようになっていく。

まあ、でも……その感覚は、それ以上でもそれ以下でもなくて、別に恋とか、そんな



ものでもないと思う。……恋したことないからわかんないし、そもそも女の子同士だし。というか私に女の子が好きという趣味はないし。

もつと私の心から言葉にしたいことがあるから、ちよつと脱線するけど続ける。梨穂子に限って女の子の恋に発展するなんてことは、尚更ありえない。もし、本当にも、梨穂子との今の関係が更に進展するんだとしたら……それは恋とも友情とも違う、もつと別の、誰も名前をつけることが出来ないような、そんな関係だと私は思う。

「じゃあ、途中までだね。一緒に帰れるのは」

「うん。……久しぶり、だね」

「そうだね、茶道部の活動があったり、そもそもクラスが別だから会える頻度が減っちゃったからね……」

去年、すなわち私と梨穂子が高校一年生のときは同じクラスだったから、話す機会はまだあった。別のクラスとなった今年に入って、そういう機会が一気に減ったのだから、やっぱりクラスは同じのほうがいい。

もし棚町まで別のクラスになってたら、私どうなってたんだろ。

「だね。……寂しい?」

「……ちよつとだけ」

「ふふ。梨穂子はかわいいなあ」

反射的に私は梨穂子がかわいいと言ってしまふ。だっていかにも寂しそうに眉をハの字にして、親指と人差し指でまるで小石を持つかのように『ちよつとだけ』のジエスチャーをして、しまいには小さくって甘えたいって声で『ちよつとだけ』って。

そんなの。かわいいに。決まってる。

さて、私にかわいいと言われた梨穂子はあつという間に頬がほのかに赤く染まった。照れてる照れてる。かわいい。

「純ちゃんもかわいいよ〜っ!」

梨穂子の反撃。かわいいって言いながら、照れ隠しのまんまぎゆうってされた。

「うっ……やばい、今のわりと効いたかも……」

……いくら梨穂子に恋をしないとはいえ、可愛いものは可愛いし効くものは効くのだ。

「……純ちゃん? おくい」

「あつうん! 大丈夫、なんでもないなんでもない!」

意識飛びかけてた。危うく、梨穂子の可愛さに殺されるところだった。

お見舞いにいきまーすって言った直後にお葬式だなんて冗談じゃない。

……梨穂子には、勝てそうでいて結局大逆転負けを喫するのが私なのだ。

## もう一度、手繰り寄せて

久しぶりの梨穂子との家路は、元々の距離自体が普段より短いこともあるけれど、それでもずいぶん短く感じた。寄り道もしたのに、それでも短いと思った。

「えっと、この辺で別の道かな」

「そうなの？」

「うん。それじゃあ、またね」

「また一緒に帰ろうね。ばいばい」

ニコニコと小さく手を振る梨穂子に手を振り返し、私は絢辻さんの家に向かって歩き出す。絢辻さんの家に突然行くのはちよつとだけ不安だったけれど、梨穂子と一緒に帰ったおかげでだいぶ和らいだような、そんな気がする。

「ありがと、梨穂子」

この独り言が漏れちゃうのは、もう仕方ないよね。

さて、絢辻さんの家という帰りを外れて本当にすぐにある。軽く脇道を眺めたら偶然帰る瞬間を目撃するくらいだから、本当にすぐだった。

梨穂子のぬくもりが、私の不安を優しく包んでくれた。そのぬくもりがほどけない

ちに、私は絢辻さんの家のインターホンを押す。お見舞いに来た、と伝えると、程なくして玄関のドアが開かれる。

「詞ちゃんにそんな友達がいたなんて、私、嬉しくなっちゃう」

なんて、出てきた絢辻さんのお姉さんに言われながら、すんなりと絢辻さんの部屋に案内してもらった。

前に絢辻さんと帰ったときに会った女の人って、この人だったのかな。なんか、梨穂子以上の天然って感じがする……。

友達にこういう人がいるんだったらまだいいんだけど、お姉さんとかにこういう人を持つのは私は嫌かなあ……美也という存在がいるし……。

「お邪魔しまーす……」

梨穂子以外の友達——絢辻さんに関してはまだ友達と言っていいのかどうかさえ怪しいけれど——のお部屋にあがるのは滅多にないことだった。というか、ほぼほぼ初めてと言ってもいいんじゃないかも。

そんな絢辻さんのお部屋はすごく綺麗に片付いていた。なんだか私と同年の部屋じゃないような、そんな気がした。

本棚には学校の教科書の他に参考書や受験生がよく使っているのを見る赤本。小難しそうな文豪の小説や、自己啓発本。……それに混じって、結構最近の話題になってい

る小説もあつて、ああ、ちゃんと女子高生なんだってちよつとだけ安心はしたけれど。

あと、絢辻さんのお部屋にはCDプレイヤーもあつた。どんな音楽を聴くのかな、つて思つてCDラックを眺めたけれど、どうやら絢辻さんは本当に何でも聴くらしい。絢辻さんがいかにも聴きそうなクラシックの他にもジャズだったり洋楽だったり、意外にも私達の間で流行つていたポップスの曲も十分にあつた。心なしか、クリスマスに関連する曲が多いような気がする。

で、そんな絢辻さんは……ベッドで寝ていた。さすがに起こすのもあれだし、寝顔を見るのも、ちよつと気が引ける。

というか絢辻さんの寝顔を目撃したら、悶え転がって私は霊柩車に直行すると思う。

「ん……誰か、いるの?」

「あ……」

ベッドで身体が起きる音が聞こえる。どきり、と心臓が跳ねる。もうここに来ちゃつたからには、覚悟を決めなくては。

「起こしちゃつた、かな。ごめん」

私は絢辻さんの寝ているベッドのそばに、そつと近づいた。絢辻さんの匂いが鼻をかすめて、ほんの一瞬、くらり、と来そうになつた。

「えっ!? あ……」

驚かないはずがない。私だって梨穂子が突然お見舞いに来たら驚くんだ、ほんの最近まで全く話す機会のなかった私が突然、絢辻さんのお部屋にいるんだから……。

いくら私が絢辻さんの心配をしても、この行動はさすがにまずかったかな。また、『大丈夫』って言われて突き放されるんじゃないかな……。

「う、ううん、いいの。もしかしてだと思っただけ……お見舞いだったり、するのかな」  
絢辻さんはすぐに、学校で見る『いつもの』柔らかくて清廉な表情になった。それでも緊張で、私の鼓動は落ち着きを忘れたかのように加速度的に早くなっていく。

「う、うん！ そのつもりで来たんだ」

「ほんとに？」

「ほんとだって。絢辻さんは大丈夫って言っていたけど、それでも……」  
身体が震えているのが分かる。息が、私の吐き出す空気が、芯を失ってブレるのが分かる。

でも……私はできるだけ、心のままに、必死に言葉を紡いでいく。

ここで引いたら、もう二度と絢辻さんと話せないかもしれない。だから……立ち向かって行くんだ。

「……それでも。私は絢辻さんのことが心配で、絢辻さんの頑張っている姿がとても好きで……何か、出来ないかなって思っただけ。私、あの後も絢辻さんのことで頭がいっぱい

だったの。嫌われたかな、とか、また前の関係に戻っちゃうかな、とか……思っちゃって……」

途中から私は、何を言っているのかよくわかんなくなってきた。けれど、絢辻さんは何も言わずに私の言葉を聞いてくれた。

「だから……だから。いきなり家に来ちゃうような、不器用な私だけ……私は、絢辻さんのために……私は……えっと……」

……ダメだ。頭が真っ白になって、次につなぐ言葉がなんにも出てこない。視界には、ぎゅつと組み込んだ私の両手。焦りと不安が私の精神をぐうつと締め付ける。どうしよう、どうしよう。どうしよう……

「……ありがとう。すごく、嬉しい」

「……ふえっ？」

絢辻さんの柔らかな言葉に私は顔を上げた。あつけにとられて、多分間抜けな顔を晒していると思う。でも……それをすぐに取り繕うような余裕は私には全くなかった。

「あなたの気持ち、伝わったから。本物、なんだね」

心底救われた。私は間違ってたんだ。

熱のせいなのか、ほんのり上気した絢辻さんの顔。私はその絢辻さんの顔を見て、一息ついて安堵した。頬の筋肉がすつと、緩んだ。

「良かった……突然押しかけて迷惑かけるかもって思うと不安だったんだ」

「ううん。あなたの気持ちは嬉しいわ」

「絢辻さん……ああ、だめだ、嬉しくてにやけちゃう」

「ふふっ、変な橘さん」

「変かも」

安堵か、それとも絢辻さんと話が出来ていることに対してなのか。……あれ、私、絢辻さんに元気をもらってる。おかしいけれど、もしかして私の心はそれを望んでいたのかも知れない。

「ごめんなさいね、お茶も出せなくて」

……絢辻さん、なんて真面目なんだろう。

「そんな、風邪引いているのにそれは逆に悪いよ。……ちよつと待つてて」

「ん？ 何か、あるの？」

「えっと、これ。帰りに友達と選んで買ってきたんだ。絢辻さんの好みかどうかは分からないけど……」

多分、この定番のチョコチップクッキーなら間違いないよね。私は帰りに梨穂子と選んだそれが入っている箱を、絢辻さんに渡す。

「え、いいの？ ……ありがとう。甘い物は心が落ち着くから、とても嬉しい」



絢辻さんは驚きを隠せない様子で、素直に受け取ってくれた。内心すごく不安だったけれど……。

「良かった。絢辻さんの好みが分からないから、無難なものになっちゃったけれど」  
「ううん。そういうのって、気持ちが大切なのよ」

絢辻さんは私があげたチョコチップクッキーの外箱を眺めながら、そう言った。

「だって、いくら高くても美味しいものでも、気持ちが悪くないものは嫌でしょ？」  
「確かに。高いものあげとけば喜ぶでしょ、みたいなのは嫌だなあ」

「もしかすると、自分の権力だとか財力だとかそういうのを見せびらかす、なんて目的もあるかもよ？」

「あー……言われてみれば」

こういう目的でプレゼントする人いたら、ほんとに嫌になる。とはいえ、その本心は私は見破れないと思うし……なんだかんだ、喜んでしまおうと思うし……。

「……ちよつと話が逸れちゃったね。とにかく、あなた達のお見舞いのプレゼント、ちゃんと私を想って選んでくれたんだって、私は感じたの」

……絢辻さんの言葉はありきたりで無難な優等生って感じなんだけど、でも私にはそれが絢辻さんの本心なんだ、としか思えなかつた。

絢辻さんの瞳には、何も混じっていない。思い込みかもしれないけれど、私はそう

思ったんだ。

「うん。焼き芋だとか、アイスだとか、あとケーキがいいとか……その子が食べたいのも混じってた気がするんだけど……まあでも、帰りに二人でスーパ―に寄って、あーだこーだ言いながら選んだのは違うじゃないよ」

結局梨穂子はお見舞いのクッキー以外にも我慢できずにお菓子を買ってたし。

「そっか。ほんとに、仲がいいんだね」

少し羨ましそうに絢辻さんは言ってくれた。そういえば、絢辻さんには深い友人関係の噂を全く聞かない。だとすると私は、絢辻さんに悪い話をしてしまったのかも……。

でも、ここでもし仮に『それほどでもない』なんて謙遜してしまつたら、それは梨穂子に悪い。

「……うん。それは胸を張って言わないと、その子に失礼だから」

だから、私は……こんな感じのかつこつたこと言つて、自分の株を高めることで絢辻さんへのダメージを回避しつつ、梨穂子にも配慮した。ちよつと私が性格が悪い人みただけで、仕方ないし……事実私の性格って悪い方だと思ふし。

「ふふっ、そっか」

絢辻さんはくすりと笑つた。その笑顔が、私の心を見透かされているような感じがして……少し、背筋がぞくりとした。

でも……この感覚、嫌いじゃない、かも……あはは、私ったらほんとに変だ。

## 頑固者同士

翌日。絢辻さんはすっかり元気になった様子で、学校に来ていた。

「ちゃんとお礼したいから、お弁当持ってきたの。お昼休み、もしよかったら食べてくれないかな？」

……なんて、言われたら嬉しくないわけがない。約束通り、お昼休みに絢辻さんと一緒に食堂に向かう。

高校二年生だが、実は初めて食堂を利用する私。まあちよつとぐらい遅れても大丈夫だろう、とたかをくくっていたけど、現実はそのなにごくなかった。すでに食堂内の席はあらかじめ埋まっており、あとは屋外のテラスしか空いてなかった。

「うーん……ちようどいいところないね。やっぱり人が多いんだ」

「しようがないから、テラスで食べよつか」

「寒いのは嫌だけど……分かった。絢辻さん」

11月下旬のこの時期、屋外はやっぱり寒い。手がかじかんでくるけれど、中は空いてないから仕方がない。

私は絢辻さんに連れられ、テラスに出た。ぽつぽつと空きのあるテラスのテーブルの

1つに、私達は陣取った。

「うー、やっぱり寒い。少しでも出遅れるとこうなっちゃうんだね……」

「ええ……私、実は初めて食堂に来るからどんな感じなのかなって思っていたけれど、やっぱり賑わうんだね」

ちよつと意外に思った。絢辻さんなら食堂使ったことがある、って思ってた。

「絢辻さんもそうなの？ 私もそうなんだけど、絢辻さんが来たことないというのはちよつと意外かも」

「そうよ。だいたい自分の持つてくるもので事足りるし、あとこういう人が多いところよりも静かなところで食べたいかなって」

「私も同じかも。まあ、私は購買なんだけど……でも、静かなところの方がいいっていうのは一緒」

食堂はどうも落ち着かないし、そもそも一人で行ったところで……いや、一人で食堂使っている生徒もいるっちゃいるんだけど。

とにかく、絢辻さんとの共通点をまた一つ。すごくすごく遠い人だと思っていたのは、実は勝手な私の先入観だったのかな。

「橘さんは購買なんだ」

「うん。お弁当を作ってくれるわけじゃないし、自分で作る時間は正直他に回したいし」

「小説?」

絢辻さんがドストレート投げてきて私はたじろいだ。実際合ってるし。

「……そ、そう。朝早く起きてそれ書いてる。あはは……絢辻さんが知らないわけないよね、クラス中知れ渡ってるんだもの」

「ええ。クラス委員として、みんなのことを把握するのは大切なことだから」  
身体が急激に熱くなってくる。最近の私は、落ち着きというものを特に忘れてい  
うな……。

「そ、そうだよね、あはは……うう、恥ずかしいものは恥ずかしいんだけど」

「そうかしら? 感じたままに自己表現するのって、素敵なことだと思うのだけれど」

フオローありがとうございませう絢辻さん……うっ……。

「あ、ありがとう……でも、やっぱり自分の中で完結してるものだから、見せるのは恥ずかしいんだよね……」

「んー……なんとなく分かる、かも。小説書いたことないのだけれど」

「分かってくれる?」

「部分的には、ね?」

「部分的にでもありがたいです……」

目を思わず時計の方にそらす。恥ずかしいから、何でも良いからなんか気がそれるも

のが欲しかった。

ちなみに時間は全然進んでいなかった。

「橘さん、そろそろ食べないかしら」

「うん。楽しみ」

絢辻さんはカバンから大きなお弁当箱を取り出し、中を開けてみせる。

「はい。これが橘さんの分」

「……………え？」

絢辻さんの持ってきたお弁当に、私は思わず言葉を失った。

こんなのもらっていいの!? とにかくすごい。すごい量だしすごい豪華。すごい。

もうほんとすごい。

その中身はというと……………日の丸ご飯! 唐揚げ! ミニハンバーグ! ウインナー

にベーコンが巻いてあるやつ! そして気持ち程度の野菜!

……………あれ? お肉多くない?

「もしかして、全部……………」

「ええ。全部、食べていいわよ」

「な、なんか、私のしてきたことが釣り合っていない気がするんだけど……………」

お手伝いと言えるかどうかさえ怪しい手伝いに、ちよつとしたお見舞いしか私はして

きていない。なのに、こんなお弁当もらっていいのだろうか……。

「ううん。それに、あの人……私の姉が、これを持って行ってあげてって言って聞かなかったから……」

「お姉さん？ ああ、昨日私を絢辻さんの部屋に案内してしてくれた……」

「ああ、それもやっぱりあの人だったんだ」

「ん……？」

あの人、という言い方。私はなんとなく引つかかった。そういえばこの前、初めて絢辻さんと帰ったときも、お姉さんの声を聞いた瞬間に明らかに嫌な顔をしていたよう  
な。

「……ううん、なんでもないわ」

「そっか」

……ああ、やっぱり私と同じみたいだ。気持ちを分かっている以上、私はお姉さんの話を広げることとはしなかった。

「ごめんね、私の作ったお弁当じゃなくなつて。私、料理とかはあまりしたことがなくて……ほんのちよつとだけ手伝ったのだけでも」

「ううん、気にしないよ。こういうのって、気持ちが大切なんですよ？」

絢辻さんのお見舞いのおときに言われた言葉を返してみる。



「橘さんって私の言葉、よく覚えてるんだね」

「絢辻さんのお話って結構心に残りやすくて。印象深かったりする言葉が多いから」

「嬉しいけれど、なんだか照れちゃう」

絢辻さんの頬が心なしか、ちよつとだけ紅くなつたような。外が寒いせいもあるかもだし、見間違いという線もあるけど。

「……じゃ、じゃあ遠慮なく食べちゃっていいんだね？」

「ええ、どうぞ。私はこれを食べるわ」

昼食と言つて、絢辻さんが取り出したのは……。

「え？ ……おにぎり一個だけ？」

「私、少食だから、これで足りちゃうのよ」

私がこんなお弁当もらつて、絢辻さんはおにぎり一個。それじゃあ、いくらなんでも悪い気がする……。

「この中から食べてもいいけど……」

「ううん。平気よ」

「うーん……」

私はちよつと、納得ができなかった。私が豪華なお弁当を食べるのに、絢辻さんがお

にぎり一個しか食べないということに。

それに、絢辻さんが少食といえど、たったのおにぎり一個じゃあこの後乗り切れないのでは……？

放課後になってすぐ帰るのならまだしも、絢辻さんのことだ。当然のように今日の放課後も遅くまで残って作業するだろう、それならもつと食べたほうがいい。また体調を崩して寝込んだら、目も当てられない。

そのように考えたのはほんの一瞬のことで、その考えは即座に私の身体を動かした。

「絢辻さん。ちよつと席外すね」

「え？」

「購買行ってくる。どうせ今日も残るんでしょ？ おにぎり一個じゃ持つはずないし、そもそも野菜食べなきゃ」

「あ、ちよつと、私は大丈夫だつて」

「だめ。一回体調崩したんだからここは私に従つて。それじゃ」

止める絢辻さんを振り切り、私は席を立ち上がった。絢辻さんはほんとに、自分を少しくらいはいたわったほうがいい。あんな仕事量をこなし、クラスメイトはもちろん、先生にも頼られる存在である絢辻さんなのだから。

……何でだろ。何で、私は絢辻さんにここまで出来るんだろう。

梨穂子にも同じことが出来るかという……もしかしたら、答えはNOかもしれない。

とにかく私は、購買で適当に小さめのシーザーサラダを買ってきた。とりあえず、今の絢辻さんに必要なのは野菜だと思う。少食だと言っていた絢辻さんでもこれなら食べられるだろう。

「ただいま。はい、これ。食べないという選択肢はないから」

絢辻さんは若干困惑の顔を浮かべながらも、素直に受け取ってくれた。もし私が絢辻さんでも普通に困惑する。

でも、私が絢辻さんにそうしたかったから。……なんて、かつこつたこと考えてみたり。

「ありがと……橘さんって、変なところで頑固だよね」

「そうかも。結構私、信念は固いほうだと思う」

「そうなの？ 少し意外かも」

「うん。私は常に、自分の好きなことに時間を割きたいって思っているから」

これは、私が中学生頃になってからずっとブレなかった信条。一生ずっと貫き通すつ

て、つい最近までそう思っていたんだけども。

「え？ ……私の手伝いしてくれたり、お見舞い来てくれたりっていうのは……」

絢辻さんの当然とも言える疑問に、私は少しいたずらな笑みを浮かべながら、人差し指を口元に当てて。

「秘密」

……夢小説でしかやらないだろうと思っていたことを、まさかやるとは。

「もう……でも、嬉しい」

絢辻さんはその綺麗な笑顔を、私だけに向けてくれた。

正直、なんで絢辻さんにたくさん時間を捧げているのか私でもよく分かってないんだけど……でも、絢辻さんがこうやって私を見つけて、私だけに嬉しいと言ってくれているということが、私に確かな充実感をもたらしてくれる。

「橘さん、そういうえばサラダっていくらだった？」

「えっと、150円だよ？ ……なんで？」

「分かった。……じゃあ、これ」

そう言うのと、絢辻さんは私に200円を渡してきた。

「ううん、いいって。これはおごりにさせて」

「ダメ。ここは私に払わせて。今回は私が嫌なの」

今度は絢辻さんが強引に私の手にお金を置いて、それを握らせる。普段から書類作成や勉強でシャーペンを握っている機会が多いからだろうか、絢辻さんの手はすごくしつかりしていて、それでもやっぱり女の子の手で……芯の通った強さが中にあるんだけど、繊細で何かあつたら折れてしまいそうな脆さがあるような……。

ただ一つ言えることは、絢辻さんの手はすごく綺麗だった。絢辻さんの手に触れられることは、私の中に確かなあたたかさを残してくれるんだけど、できれば並ばれたいいな、だってまた嫉妬しちゃうから……なんて思ってしまう。

「……お互い、頑固だね」

「そうね、ふふっ。あ、お釣りはもらわないから」

「分かった。どうせ受け取ってもらえないだろうし」

「ええ、そのつもりよ」

絢辻さんは機械的で完璧な優等生だと思っていたけれど、そうじゃないということをもっと最近たくさん知りつつある。

お茶目なところもたくさんあるし、それに……柔軟に全部受け入れる人じゃなくって、絶対に譲れないものというのをちゃんと持っている。

そういうところを知っていくたびに、私は絢辻さんという人間に惹かれていつてしま

……でも、多分、恋じやあない……よね。私、女の子だし。言うなれば、絢辻さんは私のちよつとした憧れ、みたいなの？

手帳がない……！

オレンジ色に染まる教室。私、橘純奈は相当に焦っていた。

「手帳が……ない」

クラス中に夢女子がバレても、柵町に世界の一部を強引に引っ張り出されても、私は夢小説をしたためている手帳を誰にも見せたことはない。

単純に恥ずかしい以上の理由はないけれど、だからこそ私は厳重に管理していた。絶対に落としたり失くしたりするはずはない。私は夢世界の管理に関しては、とても自信があった。

あ、ちなみに確か前柵町に完結させたら見せるって言ったと思うんだけど、どうせ完結しないから見せない。

しかし、今起こっている事態は何だ？ まさか私が、こんなことをやらかすだなんて……。

私は必死に自分の記憶をたどる。今までどこに行っていた？ どこを通っていた？  
そして、どこで違和感を感じた？

……そうだ。確か今日の私は、ちよつとイライラしていたんだ。それで、お昼休みに

人気の少ない屋上で、冬晴れの冷たい風に当たりながら、今まで作ってきた夢の世界の思い出を思い返すことでクールダウンしようと思っただけ。

そういう時間であつたという間に過ぎるもので、気がつけば予鈴が鳴つて……次が移動教室だつてことに気がついて、私は大慌てで教室に戻つて……。

そうだ！ 屋上だ。間違いない！ よく思い出せたぞ、私！

生死がかかっているんだ。結論を出したその瞬間から、私は廊下に飛び出し階段を一段飛ばしで駆け上がる。スカートが軽くめくれ、内太ももが冷たい空気に触れてぞくぞくするけれど……そんなの、構ってられない。

これは私の危機なんだ。紛うことなき、私の危機。もし、知らない人に渡っていたら……私は、喜んで死を選ぶ！

3階……4階……あつた、屋上への扉！ 思い切り私はドアを開放する。放課後の夕日が目に飛び込んできて眩しい。人は……いない！

間に合つた！ 私は屋上で手帳を探す。機能性に富んだ黒い手帳、私が小学生の時、夢の世界に目覚めた時から愛用している黒い手帳。見間違えるはずがなかった。

周囲を見渡す。あ、あれは……あつた！ 柵の近くに佇む、女子の手の中に！

……ん？ 女子の手の中？



それはつまり……もう、見られているということ……。――

バレないよう、隠れて撤退するという選択肢もあった。しかし、何年もかけて作り上げてきた私だけの夢の世界……今日みたいに、時々思い返すことで私の居場所になる、そんな世界を、私は簡単に手放せない……！

どうしようか考えていたところに、私の手帳を持った女子が私を見つけて近づいてくる。まずい。冷静になろう、私。

えっと、まずその女子の姿は……黒髪で、色白で、背は平均的、顔立ちはすごく綺麗で、まるで優等生のような清楚感のある……。

「……絢辻さん!？」

これは、不幸中の幸い……でいいんだよね。もし柵町だったら私は死んでた。

「橘さん。これ、あなたのよね？」

「うっ。……は、はい、そうですありがとうございます」

クラスのことを把握していると言っていた絢辻さんだもの。そりゃ分からないわけ

ないし逃げ切れるわけもない。絢辻さんに私の手帳が渡った時点で、私の選択肢は素直に認めて受け取る、ただ一択に絞られていた。

私は絢辻さんの手から、手帳を半ば奪うように受け取る。そして、少し驚いた様子の絢辻さんに恐る恐る聞き出してみる。

「あ、あの……見た？」

「ごめんなさい。ちよつと興味が湧いてきちゃって……」

絢辻さんは伏し目がちに答えた。私はひどく後悔したけれど……絢辻さんで良かった、とも思った。

でも……これを見られたら、絢辻さんに嫌われるかも。それじゃあ、絢辻さんで全く良くないじゃん……!! むしろ柵町に拾われたほうが幾分かマシ……いや、どうだろう……!

「そ、そっか。幻滅した、よね……」

ただ一つ。超、落ち込んだ。

「そんなことないわよ。最初は中身を軽く確認して持ち主を割り出そうとしたんだけど……普通に続きが気になって、ついつい読み込んでしまった」

絢辻さんがこの一件で遠ざからないみたいなのは、本当に安心した。良かったんだけど……なんか、べた褒めつぽくて……もつと恥ずかしくなる……!

「そっか……そ、その、言わない？」

気恥ずかしさで絢辻さんの顔を直視できない。身体を左右に揺すっておかないと、どうにかなっっちゃいそう。

「ええ。私の心の中だけにとどめておくわ」

「あ……ありがとう、絢辻さん……」

絢辻さんなら信頼できる。……私は恥ずかしさの中、起こった幸運をどうにかして抱きしめようとした。

ほっとした、という言い方はちよつと違うんだけど、でも……なんか、それに近いような感じがする。

「……その、ね。私も手帳、あるの」

「え、もしかして絢辻さんも……？」

まさか、夢の世界を創造してるの？ でも、私の記憶が確かなら小説を書いたことはないって言っていたから……じゃあ、なんだろう、何の夢が……。

「そうじゃないわよ。普通にスケジュール帳だったり、今日あったことをメモしたり。自分の考えを書いたりしてるわ」

「で、ですよね……」

そんなわけなかった。別にそうじゃなくても、どんなことを書いてあるのかは気にな

るけれど。

「それでね。あなたも、私と同じ手帳使ってるんだなって」

「そうなの？ 確かにこの手帳、色んなことに使えて役に立ってるけど」

私もこの手帳を、単に夢を展開し記憶させる媒体としてだけでなく、普通にスケジュール帳だったり、ノートを忘れたときの代わりとして運用したり、結構色々使っている。

「ええ。だから、これが落ちていたとき……私もちよつとびっくりしちやつて。私にとつても、手帳はすごく大事なものだから」

……共通点、または発見かな。手帳を落としてないと、きつと見つからない共通点だったと思う。だとすると……いや、でも手帳を落としたということ自体は喜べないよね。

「そうなんだ……」

「ええ、私にとつての生命線と言つてもいいわ。特に最近は創設祭の仕事でスケジュールが増えているから」

そう言うのと絢辻さんは振り返って、柵の近くに移動する。私も絢辻さんの隣に来て、一緒になつて夕方の空を見る。夕日が私達を斜めから照らす。

橙色に照らされ、絢辻さんの綺麗な顔が浮かび上がった。光つて、人の違う一面を演

出するものだつてつくづく思う。絢辻さんはまるで希望に満ちているような、そんな表情に見えて……すぐく素敵だな、つて思った。

私もそういう表情、絢辻さんに見せられたらいいのに。

「ねえ、橘さん」

絢辻さんの声と、屋上を吹き抜ける秋風の音と、木々が秋風に吹かれこすれる音と、運動部の掛け声と、吹奏楽部の練習の音と、少し遠くから聞こえる往來の音。

全部が全部混じつて、空気を伝つて私の鼓膜を心地よく震わせる。

「ん……？」

私の声は……絢辻さんにとって、どんな印象になっているんだろう。私は……嫌じゃなかつたら、それでいいなとしか。

「あなたはこの場所、好きかしら？」

「屋上？ 私は……嫌い、かも」

「へえ、どうして？」

すつと口から出た答えは、嫌い、だった。意外そうに、興味がありそうに絢辻さんは聞いてくる。

確かにここは……私は結構来るんだけど。でも。

「確かに、すぐく居心地がいいの。人も少ないし、環境音が気持ちよく混ざり合つて。風

も気持ちいいから……気持ち切り替えるときは、いつもここ」

「でも、嫌いなんだ」

「うん。……嫌なことがあった時しか、ここに来ないから」

だから、嫌なことと屋上がちよつと結びついちゃっているところがあつたり。

「そっか……じゃあ、私もここが嫌いってことになるわね」

「絢辻さんは私に微笑みかけた。つまり、絢辻さんも嫌なことがあつたら……ということなのだろうか。」

「絢辻さんも?」

「ええ。きつと橘さんがこの場所に来る回数より、圧倒的に多いと思う」

「そうなんだ……」

「……最近、絢辻さんと接触する機会が増えたことで、完璧だと思っていた絢辻さんが完璧でなくなっていく。」

「絢辻さんだつて私みたいにちゃんと悩んだりするし、行き詰まる時だつてあるんだ。」

「……あれ? このことを知っているのつてもしかして私だけ……?」

「今もそうだったの。少し不安定になつちやつて……それで、あなたの手帳が落ちてたから思わず読み込んじゃつて」

「うっ」

「ごめんね、人には絶対に話さないから。……でも、その手帳のおかげで、今日は立ち直りが早かったのかも」

「え……？」

私の夢小説が、絢辻さんを救った……？

「気のせいかもしれないけれどね？　だけど、今の私の気分が幾分か楽なのは確かよ」

「そ、そうなんだ……あはは……」

喜ぶべき……なんだよね……？　頭でそう分かっているけど、私は乾いた笑いしか出てこない。

またしても身体が熱を帯びるのを感じて、嬉しさと、恥ずかしさと、なぜか分からないけれど……なんだろう、どうたとえればいいんだろ。嬉しさと混ぜたら真っ黒になるような感情、とでも言うっておこうかな……とにかくそんなよくわからない感情が、私の胸の奥で大きな糸くずのように複雑に絡み合っている。

その感情を外にどう上手く出せばいいのか私は知らなくて、すごく曖昧な態度をとってしまう。分からないなりに、多分私の頬は赤い。

「ごめんなさい、気分悪くしたかしら」

「う、ううん。恥ずかしさがどうしても勝っちゃって……でも、一応褒めてくれるんだよ

ね」

でも、ちゃんと絢辻さんの話は認識できて、ちゃんと答えられて。そこが、私の立ち位置をはつきりさせている、みたいな。

「もちろんよ?」

「そうだよね、絢辻さんに褒められてるんだもの。だから、喜ばなきゃいけないと思うけど……やっぱ恥ずかしいものは恥ずかしいし照れくさいものは照れくさいの!」

そうやって勢いで言葉にすると、すつと感情の混乱が解けて。よくわからない感情が消えたおかげで、恥ずかしいと照れくさいの2つだけになって。そして、それを自覚して……。

「ふふっ。橘さん可愛い」

「ふえああ……」

私はあまりの熱さに顔を覆ってしゃがみこんでしまった。

「あのね、橘さん。無理を承知で頼み事があるのだけれど……」

「ふえ……?」

絢辻さんの顔を見ることが出来ない。そのままの体勢でいると、絢辻さんがこちらにしゃがみこんできて、顔を覆う私の手を優しくはがした。

絢辻さんの手が、私に触れる。それだけで、私は力が抜けて……素直に、私の顔を絢



辻さんに晒してしまう。きつと夕日に照らされ、もつとはつきり見えているはず。

というか……顔が、近い……!! もともと熱かった身体がもつと熱くなって、心臓の音が身体中に響くくらいに大きく、早くなって……思わず私は後ろに尻もちをついて、体育座りのような格好になった。

恥ずかしい、照れくさい。その感情の種類は変わっていないんだけど……その感情の原因は、夢小説を見られたことから、絢辻さんと私の物理的な距離が急接近したことに置き換わっていた。

どぎまぎして、焦点が合わなくて。そんな私に対し、絢辻さんの柔らかかそうな唇が優しく言葉を発した。

「……また何かあったら、その手帳を見せてほしいなって」

「……ふええ？」

もはや私は言語を失ったような反応しかできない。……え？ というか今……手帳を……？

「もちろん、人気のないところではかお願いしないから。……いい、かな」

絢辻さんも絢辻さんで、結構思い切ったお願いであることを分かって言っているみたい。え……これって、つまり……気に入ってくれた……？

だとしたら。私は、断る理由なんて……たぶん、ないよね。それに……相手が、絢辻

さんだし。

私は一拍おいて、深呼吸して。震える足で、震える喉で。でも、精一杯、普通を装つて。

「……う、うん。絢辻さん、だけだからね」

装つたのは普通じゃなくてツンデレの方だった……! 私つてば、素直じゃないんだから……!

「いいの? ……ありがとう、嬉しいわ」

で、でも。今まで嚴重管理していた夢の世界を、私は絢辻さんにだけに立ち入りを許可できたわけで。

きつと……これは、大きな一歩なんじゃないかなつて。

「じゃあ……また、近い内にお願ひするかもしれないから……その時は、お願ひね?」  
「わ、分かった。……なんか、人に見せるつて決まったらちよつと気合入ったかも」

今まで自分だけで完結していた世界が、人の目に触れる。それがたつた一人だとしても……なんだろう、ちよつとモチベーションが出てきたような。

恥ずかしいし、照れくさいけれども……なんか、悪くないな。

「そっか。じゃあ、楽しみにしてる。……さて、いい感じになつたから仕事に戻ろうかしら」

絢辻さんは立ち上がって、ぐっと伸びをした。

「あ、私も手伝うよ。今日は何するの？」

「手伝わなくてもいい、って言ったってあなたは聞かないものね。そうね、今日は……」  
夢小説を書くモチベーションは上がったけれど、絢辻さんとともにいる時間もとても大切で。私は絢辻さんのために、喜んで私の時間を捧げるんだ。

結局この日も帰りは7時くらい。絢辻さんと一緒に下校して、色々とお話をして。

「あ……このシチュエーション、いいかも」

……なんて、一人になった帰り道。今日の出来事を反芻すると、新しいアイデアが思  
い浮かんできて。

人に時間を捧げるのも悪くないのかも、って思った一日だったり。

## ★180度

私の日常の1ページに絢辻さんが加わって、しばらく経つ。

依然として絢辻さんの仕事のできっぷりはすごくて、結果的にいつも仕事を手伝わしてもらうような立場になる私は、時たま……いいや、わりと頻繁に自己嫌悪に陥ることがあったけど。

「絢辻さん、ここはもつとこうして……まとめちゃった方が手間が省けていいと思うんだけど。どう?」

「へえ、そういう発想もあるのね。しかも、悪くないかも……ありがとう、後でちよつと先生に提案してみるわ」

絢辻さんにしか気づかないこともあれば、どうやら私にしか気づかないこともあるみたいで。それに、私の仕事のスピードもちよつとずつ上がっていつて。

「あら、もう終わりみたいね。まだ6時になつてないのに」

「え? あ……ほんとだ、作業に夢中で気づかなかつた」

気がつけば、1時間近く時間を巻くことに成功した。

「ありがとう。おかげで、図書室で勉強する時間が出来たわ」

「ううん。まだまだ私は絢辻さんには遠く及ばないよ」

「もう、私は中学時代からずっとこういう仕事をやってきたんだから。橘さんが私と同じ仕事のスピードになったら、プライドが傷ついちゃうわよ」

「ふふ……そっか。ありがと」

ちよつとした自己嫌悪も、そうやって絢辻さんに癒やしてもらって。思い返せば、つい最近まで私は絢辻さんのことが苦手で、意識的に避け続けてきたんだっけ。

ほんと、なんで絢辻さんを私はずっと避けてきたんだろう。人間関係って、ほんとに些細なきっかけで180度変わっちゃうものなんだなって思った。

「……ねえ、橘さん」

絢辻さんが深呼吸して、何か意を決するように話しかけてきた。ただならぬ何かを感じた私は、身が引き締まる感じがした。

「な、何？ どうしたの、絢辻さん」

「今日、図書室で勉強するのはやっぱなし。ちよつと、私についてきてもらえるかな？」

「うん、いいけど……別の仕事を思い出した、とか」

「そうじゃないわ、今日の仕事はさっきのでもう終わり。……個人的なこと、ね」

その時の絢辻さんは、なんだか絢辻さんじゃない気がした。私でも何でそう感じたの

か分からないけれど……でも、そう思っちゃったんだ。

けれども、今の私に絢辻さんの誘いを断る理由なんてどこにもなくて。むしろ、ちよつと嬉しくって。

「分かった。いいよ」

私は自然体に、その提案を喜んで受け入れた。

「良かった……じゃあ職員室に行って仕事を報告したら、行きましようか」  
「うん」

良かった、という言葉が私の心に引つかかった。……多分、なにか大事なことなんだろう。覚悟を決める必要があるのかもしれない。

その必要性を自覚した瞬間、この後絢辻さんが話すことが気になってしようがなくなってきた。

私は絢辻さんの隣にいる。一緒に職員室へ歩を進める。普段どおりのことなんだけれど、今日に限ってはなんだか無意識に身体に余計な力が入っているような、そんな感じがする。

隣を歩く絢辻さんをちらりと見やる。……なんだろう、気のせいなんだろうけど……  
絢辻さんも、緊張、してる……？



「(ハ)ハ(ハ)ハ」

「神社……?」

絢辻さんに連れられた場所は人気のない小さな神社だった。完全に忘れられている……というわけではないらしく、ひどく荒れているというわけではないのだが。

とりあえずこの中途半端な時期に、わざわざ他の人が用事で来るといふことはまずないような場所ではあった。

「ええ。私ともうどうにもならなくなった時には、ここに来ているの」

「どうにもならなくなった時……」

「私って、情緒不安定なところあるから」

「そ、そうなんだ」

情緒不安定……? このことを、私知って良いのだろうか。確かに前よりは距離は断然近づいたのだけれど、でも……私は、絢辻さんにとってそこまで知る資格がある人間なのだろうか?

……けれど、こうして人気のない神社で二人きり。絢辻さんは私に話があるという。……きつと、知ってほしい人間になってしまっているんだろう。自意識過剰かもしれない

いけれど……。

「……で。橘さんに、話したいことなただけど」

「うん」

「もし、嫌だったら帰ってもいいから」

「嫌、だったら……」

絢辻さんの様子が、やっぱりおかしい。なんだろう……すごく、私でもなんでこんなイメージが湧いたのか分からないけれど……絢辻さんが、辛うじて絢辻さんのキャラをギリギリ保っているような……そんな、不安定さをひしひしと感じ取っている。

「あなたに話すのは、そういうことだから」

……やっぱり、私は絢辻さんにとって大きな存在になってしまっている。絢辻さんを知ろうとして、近づいて、もっと知りたくて、絢辻さんのためになるようなことをすることで、絢辻さんと一緒にいる時間を増やして……。

ほんとは、全部私のエゴなのに。今まで私が知らず知らずのうちに封印してきた罪悪感が、全くといっていいほど自覚していなかった罪悪感が……ここに来て一気に身体の奥底から湧き上がってきた。

「……わ、分かった。覚悟は出来てるし、ちゃんと聞くよ」

……けれど、私は絢辻さんをもっと知りたい。奥底から間欠泉のように湧き上がる罪



悪感に、私は重い鋼鉄の蓋を乗せて、押し込んで、埋め込んで……最初から何もなかったことにした。

「大層なことじゃないの。でも……私にとっては、とても大きいこと。……言うわよ」  
「ん……」

今、私の中にあるのは絢辻さんへの興味。ただ、それだけ。そう……それだけなんだ。そう思い聞かせて、私は絢辻さんの言葉を受け取る準備を完全に整えた。何が来ても、すべて受け止める。そう、でつち上げた良心に誓った。

準備は万全だった。何が来ても大丈夫だった。……はずだった。

「私……私ね。今、あなたに話しかけている私は……本当の私じゃないの」

え？ 絢辻さんは、何を言ってるんだ……？

重い事実がストレートに飛んでくることを私は予想していたのに、私に浴びせられた言葉は重いのか軽いのかまったくもって意味不明の文脈でしかなかった。まるで、肩透かしを食らった気分。

「……え？ 言っていることが、分かんないんだけど……」

「ちよつと、待ってて。切り替えるから……嫌だったら、遠慮しないで言っ」

「あ、絢辻、さん……？」

不意をつかれて混乱する私をよそに、絢辻さんは少し私と距離を置いて深呼吸をし

た。そして……私は絢辻さんの言っていることの意味を少しずつ理解していった。

絢辻さんの後ろ姿から、まるで絢辻さんが少しずつ剥がれ落ちていくような……そんな雰囲気を感じ取ったのだ。

私の知っている絢辻さんが、消える。……私は恐怖した。

そして、完全に絢辻さんでなくなった絢辻さんは、意を決したように私の方を向く。

そこにいたのは、絢辻さんの身体をした全くの別人だった。

「お待ちせ、橘さん」

たった一言。なのに……声色から、態度から……温かさが微塵も感じられない。あるのは、氷のような冷たさ。ただひたすらに、透明で混じり気のない……純粋な、鋭い冷たさしかなかった。

私はあつけにとられて、何も言えなかった。こういうときに、言うべき言葉も、取るべき行動も、するべき表情も……私には全く分からなかった。

「……どうしたのよ。何か言いなさいよ」

「ね、ねえ」

「何？」

私は、一縷の望みにかける。確かに目の前で変貌したのを見たのだけれど……実は双子で、目にも留まらぬ速さで入れ替わっていたんじゃないか……なんて、そういう奇跡にすぎないように、私は絢辻さんのような人に聞いてみた。

「ほんとに……絢辻さん？」

けれど……いや、当然のことだけれど。返ってきた回答は、こうだった。

「ええ。今あなたの目の前にいるのは、紛うことなき絢辻詞よ」

絢辻さんのような人なんかじゃない。絢辻詞、本人だったのだ。

シヨックつて、こういうことを言うんだろう。私がずっと追いかけてきた憧れの存在が、実は虚構だったというオチ。私の憧れていた絢辻さんは、実はどこにもいなかったんだ。

「……そっか」

「嫌なら、どうぞ遠慮なくお帰りください」

柔らかな声も、清楚な表情も、すべてを受け入れる優しさも……そんなもの、最初からどこにもなくなつて。

今、目の前にいる絢辻さんが、本当の絢辻さんで、表情は挑戦的ですが、すべてを見下しているかのようで、声色ははっきりと自分自身が一番だと高らかに宣言しているような。そこに人を思いやる優しさとか、そういう綺麗なものはまるで最初から持ち合わせてなかったんだと……まるで傲慢するかのような、絢辻さんの雰囲気。

それが本当の絢辻詞。絢辻さんと会えるから、退屈な学校の日常も悪くない——そう考え方が変わった矢先に、突きつけられた冷たい真実。

でも……何でだろう。そんな絢辻さんを、私は今更嫌いになんてなれなかった。うん、何でだろうとかじゃない。答えは最初から出てたんだ。

そう、私は絢辻さんを嫌いになっちゃいけないんだ。

だって……絢辻さんのことをもっと知りたくて近づいたのは、他でもないこの私なのだから。知るために近づいて、そして……今、私は絢辻さんの核にまで知ることが出来たのだ。

もつともその核は、絢辻さんへの見方を180度変えるような……そういう、ものだったのだけれど。

でも、もう一度何かのきっかけで、またしても見方が180度変わったら？

「……ううん。私は、帰らないよ」

私は、望みを捨てない。そうしなければ、いけないんだ。

「意外ね。あなた、嫌な顔をしたのだけれど」

絢辻さんの言葉は、冷たい。純粋な氷だ。痛い。

けれど……今の遠慮がない絢辻さんなら、私だつてもう遠慮はいらなと思った。

なんだろう。本心をぶつけても、絢辻さんに嫌われない。そういう確信に近い、何かがあつた。

「正直なことを言うね。……今の絢辻さん、私は苦手」

「……」

何も言葉は返つてこない。それどころか、絢辻さんの顔は何一つ変わらない。予想通りだつたのだろうか。

……でも、私はそれを好都合と捉える。絢辻さんに遠慮はいらな分りきつていいる。だから……もう、私も被つていた仮面——絢辻さんのそれと比べると、ずさんで子供の遊びみたいなものだけ——を、叩き割つてしまおうと思つた。

2人きりのこの状況。もはや失うものは何もないし、そもそも既に『絢辻さんの幻想』という大きなものを失っているんだ。

もし仮に、それ以上のものを更に失うとしたら、それは……邪な気持ちで絢辻さんに近づいた、私への天罰だと思って受け入れよう。

私は絢辻さんへの想いを、外側に出し始める。フィルターにもかけずに、汚れきった心の感じるままに……ただ、吐き出す。

「……でも、前の絢辻さんも、苦手だったの。避けてたんだよ、私」

「なんとなくあたしも感じていたのだけれど、あれはやっぱりそうだったのね」

「うん。……私、他の人と自分を比較しちゃうんだ。ほら、よくテレビとかで天才小学生とか紹介されたりするでしょ？」

「……あたしはあまりテレビを見ないからわからないわ」

「そっか……じゃあ、TVドラマとかで見る子役、だったらイメージが湧くかな」

「ええ。それならあたしにも分かるわね」

「うん。とにかく、そういう同い年や年下で、私が何一つ勝てつこないような人を知るとね、自分が惨めになって、嫌になって。……絢辻さんも、私にとってそういう人だった

の」

「……」

絢辻さんは、私の話を聞いてくれている。表情は良くもないが、明らかに悪くもなかった。まだ、掴みどころが分からないけれど……けれど、遠慮したら絶対に良くない。

もはや、これを話している目的は絢辻さんのためじゃない。私を、私自身を納得させるためにほかならない。

それに、また新しいことに気がついた。私は絢辻さんを知りたいだけじゃなかった。私は、絢辻さんに、私自身のことを知ってほしいという欲求まであったのだ。

もう、気づいてしまったら……いや、気づいても気づかなくても、私は止まらない。私は自覚した欲求のまま、まるで服も、下着も、全て脱ぎ捨てるように……全てを、話す。「でも、あれはほんとにちよつとしたきっかけだった。……補習帰りに、どうせ私の時間なんてないんだから開き直って絢辻さんの手伝いをしようって思って。あと……気持ちちが沈んでいたから、もう誰でも良いから誰かと一緒にいたい、って気持ちもあったのかな」

「あのときは、そういうことだったのね。……それにしては、押しが強かったと思うのだけれど」

……そういえば何でだろう。何であの時の私は……少なくとも、あの時には絢辻さんを知りたいなんて思っていなかった私は、あんなにも頑固だったのだろう。

荒んだ私の心に問いかけても、何も返ってこない。ということは、つまりこういうことなんだろう。

「……あれは、私でもほんとに分かんないや。絢辻さんにもあるでしょ？ 自分のこと

なのに、自分の気持ちが見えぬ、なんて」

「それは……まあ、確かに否定できないわね。全部すつきり理由が見つかるのなら全然苦勞しないわ」

「でしょ。とりあえず……あのときのきっかけがあつて、私は絢辻さんに急接近出来て。……私、絢辻さんに価値観を一瞬にして壊されたんだよ。作り変えられたの」

「あたしが？」

絢辻さんの表情は、既に私には見えなかった。ただ、私が話したいから、話す。それだけ。

「うん。前に、絢辻さんにお弁当をもらったときに話したと思うんだけど……絢辻さんと話すようになる前はね、私、他の人に捧げる時間なんてありえないと思つてたんだ。全部、自分のために使うのを最優先にしてさ。部活も入らないし、友達の誘いも滅多なことじゃ乗らない。委員会なんでもつてのほかだった。ただ、孤立は避けたかったから評判と天秤にかけて調節はしてたつもりなんだけどね」

ずっと隠していたことが、なんであんなにつらつらと外に出てくるんだろう。きつと、今の絢辻さんの遠慮を捨てた雰囲気と、ここの神社のパワーもあるんだと思う。

「でも、今の私はこの通り。絢辻さんのためなら喜んで、時間を捧げるようになったの」「あたしの、ために？」



「そう。絢辻さんのために」

「ここまで話した私に、ブレーキなんてもうない。

「……ちよつと恥ずかしいけれど、この際全部言うね。私、絢辻さんのことを勝手に憧れの目で見てたの」

「そんなに珍しいことでもないわ。他にもあたしに憧れてる人を何人も見ているから」

「やつぱり、そうだよ。絢辻さんは、そういう人なんだもの」

「でも……こうやってあたしが真実を話す決心をさせたくらいまで接近してきた人は、橘さんが初めてだった」

「そうなの……?」

「ええ。ついでにこのあたしを知っているのも、家族以外はあなただけ」

私は……絢辻さんに、実際釣り合わない人。多分、釣り合う人の方が少ないけれど。

でも、私は釣り合わないなりに……私をそのまま、ダイレクトに伝える。

「……そう、なんだ。けれどごめんね、私はそこまでいい人じゃないから……今はどうしても、豹変した絢辻さんを受け入れることが出来ないんだ」

「……」

私の身体の奥から、『この人は危険だ、関わるな』という信号が伝わってくる。抱きたくない嫌悪感が、勝手に生まれてくる。

けれども、私はその危険信号を強い意志をもって無視して、これからもずっと関わっていくんだ。

そうすれば、いつか、また……180度、変わるから。

「でも、前の私が避けていた、今までの絢辻さんもちよつとしたきつかけでこんなにも距離が変わったから。……今、私の前にいる絢辻さんも、何かのきつかけがあれば変わるのかなって。ちよつと、信じてみたいの」

私は一番伝えたいことを、全て言い切った。やれば出来るじゃん、私。

「……橘さんって、すごく純粋なのね」

「ううん。やってることは、全部自分のためにしかなくてないよ。少なくとも……絢辻さんに行っていることは全て」

「それも含めて、よ」

絢辻さんは笑みを浮かべた。その笑みが何を意味しているのか、私には全く分からなかったけれど……少なくとも、この一件で絢辻さんとの距離が離れるということはないみたいだった。

「……あたしも、少しあなたを見習って全部言おうかしら」

「絢辻さん……？」

「あのね。今のあたしが苦手って言われたときは……正直、怖かった」

私は何も言えなかった。

「橘さん、あなたも感じ取っていると思う。あなたの存在が、あたしにとつてすごく大きな影響を及ぼしているということ」

「私の、存在が」

「ええ。もつとも、橘さんなら今のあたしを受け入れてくれるだろうって思っていたのだけれど……がっかりしたわね」

「がっかりして……」

「橘さんはもつと面白い人だと思っていたわ。けれど、それはあたしの思い過ごしだったようね」

絢辻さんが私を傷つけたように……私も、絢辻さんを傷つけている。

……でも、絢辻さんと私に、遠慮なんていらぬ。憧れだった人を傷つけるなんて、どうかしているかもしれないけれど……だけれど、不思議と罪悪感はそのままでなかった。だ。

「でも、別の面白さをあなたから見つけたの」

「別の?」

「そう。あたしがさっき言った、純粹さよ。嫌いなあたしでも、何かきつかけがあれば変わるかもしれないって信じた、なんて……あたし、そういう考え方は一切合切持ち合わせていなかったもの」

今の絢辻さんは苦手だ。あんなことを言われても、それは変わらない。

けれども、前の絢辻さんよりも……その話の内容に、混じり気はない気がする。

「信じれば裏切られる。だから、信じることは無駄。それが世の中の真理だと、あたしは思うの。そんなあたしの考えを、橘さんは真つ向から否定するようなことを言ってきたのよ」

……一体、絢辻さんはどんな人生を歩んできたんだろう。少なくとも、私が想像できるものよりも遥かに過酷なものだったんだろうと私は思う。

「一応、あなたの考えに、前のあたしに接近して見方が変わったという、体験に基づいた根拠はある。けど……それには、希望的観測が多分に含まれていて、根拠としてはあまりにも脆弱で信用が出来ないものよね」

まるで、その言葉は正論をひたすらに並べて私を攻撃するかのようで。

絢辻さんは、何がしたいんだろう。私を繋ぎ留めておきたいの? それとも、私を追い込みたいの?

まさか……試してる？ 本心は……分からない。

「……それでも、橘さんはそれを信じるのかしら」  
けど。

「信じるよ」

私は、即答した。

「……私は、私のために信じる」

「そっか」

絢辻さんは否定も肯定もせず、私の答えをただ受け入れた。  
そして。

「……ありがとう」

今まで聞いたことのない、か弱い声。

絢辻さんの本心を、私は確かに聞いたんだ。

その時に、言葉にならない衝動が私を突き動かした。

「……………」

まるで、誰かに背中を蹴られたかのように。

私は何も言わず、突然、倒れ込むように絢辻さんを抱きしめた。絢辻さんは嫌がることなく、しかし、驚くこともなく……ただ、私の突拍子もない行動を受け入れるだけだった。

絢辻さんの身体は細かった。下手したら、折れてしまうかもしれないというぐらいに細かった。

けれど、外がひんやりしているからだろうか、それとも私が舞い上がっているだけなのか……初めて身体全体で感じる絢辻さんは、熱かった。

聞こえる音は、互いの息の音と、自分の心臓の音と、時折こすれる制服の音。外の空気の音すら、私には聞こえない。

私が絢辻さんを抱きしめているまま、無言が続く。お互い、何も言わない。ただ、私  
が絢辻さんを抱きしめ、絢辻さんは何もしなだけ。

けれども、確かにこの時間の間に、私の中に何かとても強固な、形のないものが生まれ、気がしたんだ。

——相当長かったと思う。2、3分は経ったかもしれない。

何も言わず、私は絢辻さんから離れた。絢辻さんも、何も言わずにただ私を見つめた。絢辻さんは意外と分かりやすいらしい。白い肌にはつきりと赤色が混じっていて、息も心なしに少し上がっていた。瞳は少し、焦点が合わない。そんな絢辻さんが私には少し艶かしく思った。私をもっと野生に近かったなら、多分絢辻さんを押し倒していた。ただ、そんな表情をしているのは絢辻さんだけじゃなくて、私もきつとそう。

「……帰りましょうか」  
「うん」

私と絢辻さんは、そのまま一緒に家路についた。終始無言だったが、気まずくはなかった。

むしろ、何かまどろみの中にいて、心地いいような……そんな錯覚さえ、私は感じた。

## 嘘と本当と

本当の絢辻さんを知った私。

あの時以来、二人きりのときに限り絢辻さんは本当の素顔を私に晒すようになった。けれども、私はあの時の第一印象が中々拭えずに、心のどこかで絢辻さんに苦手意識を持っていた。

でも、何かきっかけがあれば変わるかもと思つて、絢辻さんの仕事を手伝うことはやめなかった。しかし、苦手意識は固くこびりついたままだった。

ただ、絢辻さんとの距離感は明らかに近くなった。苦手だけれど、いや、苦手だからこそ……私は絢辻さんに遠慮をしなくなった気がする。多分、本当の絢辻さんが全く遠慮してこないのもあるのだろうけれども。

前より苦手になったのに、距離は近くなった。ねじれているけれど、本当のこと。

「あー、もうめんどくさいわね……!」

「どうしたの?」

「書類が足りないのよ。あの先生、本来なら向こうがやる仕事を頼んでおいてこれとかふざけてるのかしら」



「うつわ……」

「何？ 引いた？」

「ううん。それは酷いなって」

「勘違いするようなややこしいリアクションしないで」

「仕方ないじゃん、私も私で飾ってないんだし」

「……あなたたつてあたしが怖くないの？」

「怖いというか、苦手だけど」

「あっそ……」

まあ、なんかこんな調子で会話しながら仕事をやっている。私ながら到底仲がいいなんて思えないような、そんなやり取り。

「……私が職員室行つて取つてくる。絢辻さんの方が仕事出来るし、先生の顔見たくないぞ」

「悪いわね、頼むわ」

「はいはい」

ただ、本当の絢辻さんのこの態度は、本人が望んでこうなったのではないのは確信している。私はあの時の、小声の「ありがとう」を忘れるはずがない。

私は不足している書類を取りに、職員室へ向かった。その時、私の手帳が廊下の端に

落ちていたのを見かけた。

「つい最近屋上に落としたばかりなのに、何やってんだろ私……!」

管理には自信があつたのも、もはや昔の話かもしれない。ただ、今回は誰にも拾われずに済んだようだった。

二度も落としたことに非常に落ち込みながらも、念のため私は手帳を軽くパラパラとめくる。

「……あれ?」

違和感。私のスケジュールは、あんなにぎつしり詰まつてない。一旦パラパラめくるのを止めて、あるスケジュールの1ページを見る。

来月、つまり12月のスケジュール。きれいな文字が、所狭しとひしめき合う。全てシャーペンで書かれていて、色付きのペンで書かれた場所は皆無だった。

内容はというと、ほとんどが創設祭実行委員の仕事予定だった。そして、24日の欄には大きく「創設祭当日」と書かれている。そして――。

『全ての人に、等しく幸せを』

……私はこのスケジュールの内容から、絢辻さんのものであることを感じ取った。そういえば絢辻さんも私と同じ種類の手帳を持っていて、何でも絢辻さんにとって手帳は生命線だと言っていたのを覚えている。

にしても、まさかこんなことを心から思っているだなんて。つくづく、絢辻さんの過去が気になってくる。

私は、職員室から追加の書類を持っていくついでに、絢辻さんに手帳を渡した。絢辻さんは心底驚いた様子で、その手帳を奪い取った。まるで、私が手帳を落として絢辻さんが拾ってくれたときのよう。

「はあ……あたしとしたことが何やってんのよ。まあ……拾ってくれたのが橘さんで本当に良かったわ」

「私で良かった、って?」

「え? あなた、中身見てないの?」

「自分のかどうか確かめるために、軽くパラパラとめくって。それで、12月のスケジュールのそこだけじっくり見ちゃった」

「そういえばあなたも同じ手帳だったわね。ま、いいわ。あたしも勝手に見ちゃったわけだし」

絢辻さんは手帳を大事そうに自分のカバンにしまおうとする。私は、心に引つかかった疑問をぶつけた。

当然、何も後ろめたい気持ちなどなかった。

「で……何で拾ったのが私で良かったの？」

「まあ……もうこの際だから、あなたになら見せるわ」

そう言うのと、絢辻さんはメモ欄のページを私に開いて見せてきた。

「……」

私は言葉を失った。

そこには、想像を絶する言葉するのもおぞましい文章……いや、文章にしては支離滅裂がすぎる。文字の羅列、とでも言うべきなのだろうか。とにかくそれが、スケジュール帳のきれいな字体とは正反対の、乱暴で攻撃的な筆跡で書かれていた。

「前にも言ったと思うんだけど、あたしって情緒不安定なのよ。……だから、時々こうでもしないと嘘を押し通せないの」

嘘を押し通すというのは、優等生を演じるということなのだろう。常に不安定さをはらんでいる自分をコントロールして、無理やり優等生を演じている絢辻さん。しかし、無理やり作り上げたものにしては……あの虚像は、完成度が高すぎる。

「……こうして見ると、あたしでもあたしが恐ろしく感じるわ」

絢辻さんが自嘲気味に言う。私の中で、この人は危険だと、叫ぶ本能がじわりと現れる。早く離れろ、ろくなことにならない、と。

私は、そんな私を見て見ぬ振りをする。絶対、絢辻さんは悪人なんかじゃない。そう、

信じているから。

「絢辻さん。ほんとに、私で良かったよ」

「ええ……心の底から、あなたで良かったと思ってる」

話題が落ち着いたところで、もう一つ。私は気になることを聞く。

「12月のスケジュールを眺めたってさっき言ったと思うけど……24日の創設祭当日に、『全ての人に、等しく幸せを』って書いてあったの」

「ああ、アレね……ちよつと恥ずかしいわね」

「それって、何を思っ書いて書いたのかなって」

「それは……」

絢辻さんは少し考えて、そして。

「……それは、創設祭の日まで内緒にしておこうかしら」

そうきたか。でも、私は絢辻さんのその選択に何となく納得してしまった。

「……分かった。楽しみにしてる」

私はうなずいた。絢辻さんの答えに、私は何の不満もなかった。

「ただ」

絢辻さんは自分の胸に手を当て、私をまっすぐ見つめた。その瞳には、絶対にこれだけは私に伝えておきたいという意志を感じた。

私はその意志を感じ取り、絢辻さんを真剣な眼差しで見つめ返す。

「一つだけ言っておくとするなら、それは嘘なんかじゃない。あたしの、本心」

極めて強い口調で、絢辻さんは断言した。私の心が強く揺さぶられるのを感じた。でも。

「そうだと思ってた」

私も私で、得意げな笑顔を作ってそう答えてみせた。

## 番外：17歳になる日

今日は、12月最初の日。そして……

「ねえね、ねえね！」

「朝からうるさい……」

「お誕生日おめでとう!!」

「あっ……」

私の、17歳の誕生日。

「そういえばそっか……今日、誕生日か」

私は寝巻き姿で軽く寝ぼけながら、自室のドアを勝手に全開にしやがっている、私の苦手な妹——美也を眺める。

何だろう、毎年自分の誕生日くらいはちゃんと把握出来ていたのに、今年は何か全く実感が無いというか……そのままさつと流れていくような、よくわからないけどそんな感じがする。

「にっしししし。最近ねえね忙しそうだったもんね」

「まあね……でも、もうこんな日か」

「あれ？ 何か他人事みたいだけど、もっと喜ばないの？」

「うーん……今年に限っては妙に実感が湧かないんだよね。あと、美也の誕生日と違って大してイベントがあるわけじゃないし」

美也の誕生日は彼女が友達を集めて結構にぎやかに盛大にやっているが、私の誕生日はわりと静かにささやかに行われている。

それでも私もちやんとプレゼントはもらえているし、ケーキもショートサイズだけじゃないとある。というか、それだけで十分。

「去年のねえねの誕生日は別の意味で驚いたけどね」

「あー、うん……疑問に思っただけならまさか、だよね……」

そう、それは去年の私の誕生日のこと。私が12月1日生まれなのに対し、美也がその約半年後の6月22日生まれ。いくら何でも生まれるのに間が空かなさすぎる。

それを両親に思い切っただけ聞いてみたら……何でも、私と彼女は血が繋がってないらしい。

両親は一回流産があつて以来、子供が出来なかった。それで、生まれて間もない孤児の私を養子として迎え入れたという。ちなみに私の実の両親は不慮の事故で逝去しているらしい。



そして……私を養子として迎え入れた直後に、妊娠が発覚して……そして生まれたのが彼女、美也だ。

ほとんど歳の離れていない養子と実子を同時に育てるのは難しい。愛情の注ぎ方にもどうしても偏りが出てしまい……両親の実子である彼女は愛情をたくさん注がれた結果、あのような天真爛漫でかなり社交的な性格になったという。

一方の私は……完全な育児放棄とまでは行かないものの、彼女と比べればそこまで両親には構ってもらえてなかった。もちろんそれだけが原因じゃないけれども……その結果出来たのが、人に中々興味を持ってない自分優先主義の私だった。

……まあ、誕生日の日にこんな重たい話題を思い返すのはあんまり良くないと思うんだけども。

「ねえね。ねえねは、美也のこと恨んでる？」

「……多少はね。でも、お母さんとお父さんの気持ちも分かるんだよ」

「ねえねって、大人だよね」

「あんたが子供すぎるだけ。というか高校生が他の人の部屋のドアをいきなり開けるなって……」

「えー、いいじゃんねえねだし」

「良くない」

……別にこんな事実を知ってもあんな人のことが苦手なのは変わらないけど。たまーに、ほんとにたまーに……美也に感謝したくなるときは、ある。大体迷惑被る側だけだ。

「……とりあえず、美也。ありがとう」

「にしししし。頭なでも良いんだよ？」

「なでない」

「じゃあ美也がねえねの頭を」

「なでさせないから。というか着替えるから出てって」

……感謝しなきゃよかった。

——※——

「よっ、橘」

学校に来て、教室に来て。最初に声を掛けてくる人といえば……まあ、もじゃ天パの棚町薫である。

「あ、柵町。今日もいい寝癖ついてるねぐはあっ!」

「寝癖じゃないわ!!」

「……女子に飛び蹴りはないでしょ……いつてて……」

「じゃあ女子に寝癖いいねって言う?」

「……てへ」

「あ?」

「ごめんなさい」

毎日だいたいこんな感じ。ここだけの話柵町の攻撃はいい目覚ましだったりする。

「あーあ。せっかくあんたのために持ってきてたのになー……」

「……え? 柵町が!」

意外だった。全く期待していなかったけれど、まさか……!

「何、あたしが持つてきちゃ悪いってわけ?」

「いや、だつて柵町からもらえるなんて思つてもいなかった」

「そりゃあ、前に桶からもらつたんだもの。そのへん、あたしはきつちりやんないと気が

済まないの」

そういえば私、柵町に誕生日プレゼント渡したつけ。中身は確かハンカチだった。

あ、これいいなつて思つて衝動買ひしたけれど、何か私には合わないなつて思つて。そ

れで誕生日プレゼントという名の物の押し付けをしたんだ。

……我ながら結構酷いことしてるなこれ。一応、柵町は結構喜んでくれた。

「夏休みの最中で渡せなかったから、一ヶ月遅れだったけどね」

ちなみに柵町の誕生日は8月1日。だから、私がハンカチを押し付けたのは学校が始まった9月になってから。

「それでも嬉しいって。夏休み中に誕生日があると、だいたい学校の友達からはもらえないからさー……」

「まあ、そりゃ、そうだろうね」

「だからお返し！ はい、これ。結構使えると思うわよ？」

柵町から手渡されたものは、シャーペンだった。しかも……。

「あ、これ……結構いいやつじゃん！ すごい！」

「あんた、よく手帳に書いてるし、それにほら、最近……絢辻さんの仕事、手伝っているらしいじゃない？」

「え？ 柵町にそんなこと言ってたっけ？」

「ううん。けど、もう結構噂になってるわよ？」

「一体どこの誰が……」

別に隠すつもりはなかったけれども、全くもってあまり目立たないだろうと思ってい

たのに。学校には、絶対将来週刊誌の記者になる人がいると思う。

「だから、何か書く仕事も多いだろうから……いいシャーペン、あつたらいいでしょ？  
ね？」

私は柵町から手渡されたシャーペンをじっと眺めて、見つめて……そして。

「……本気で嬉しい。私の需要にドストライクだよ、柵町」

「んふっ、あたしの目に狂いはなかった！」

「ありがとう。大切につか……ううん、めっちゃ酷使する」

「どーぞどーぞ、ご自由に何なりと！ ついでに使うときはあたしの顔を思い浮かべて  
おいてねー！」

「それは絶対に嫌です」

「ちよつと！ 絶対つて何よー！」

何だろう。すんなり流れていくはずの誕生日が、朝からいきなり柵町のプレゼント。  
……もしかして、今年の誕生日は……記憶に残りそう、かも……。

——※——

時間は流れて放課後。結局あまりイベントはなかった。でも……まあ、私はそんなに

交友関係が広いわけじゃないし、当然といえば当然かな。

「純ちゃん、いる〜?」

そんな感じで思いにふけていると、教室の外から私を呼ぶ声が。私を純ちゃんと呼ぶのは、ただ一人。

「いるよー、梨穂子」

扉の外を見ると、にこにこしながら梨穂子が私に手を振っていた。

「ね、和室一緒に行こう?」

「茶道部で使うんじゃないの?」

「いいのいいの。先輩にも許可取ってるし」

「許可をきつちり取っているなんて……本当に梨穂子?」

「梨穂子だよ! 桜井梨穂子! ひどいよ!」

かわいい。ほんとに元気が出る。これだから梨穂子をからかうのはやめられない。

「あはは、ごめんごめん。でも、ちよつと今日も用事が……」

用事というのは、もちろん絢辻さんの手伝い。お昼休みの時にちよつと話して、今日も手伝うことを約束した。

「いいわよ、橘さん」

「……絢辻さん、いいの?」

私と梨穂子の会話を聞いていたのか、横から絢辻さんが私に話しかけてきた。もちろん、周りに人がいるので虚構モード。

「うん。橘さんはあくまでも手伝いなんだから……それに、せつかくの友達の誘いなんだから、乗ってあげたらどうかしら？」

「……それもそうだね。ありがとう、絢辻さん」

「ううん。こちらこそ」

絢辻さんの心遣いが身に染みる。それじゃあ、遠慮なく。

「……というわけで、用事が無くなったから一緒にに行けることになりました」

「やった〜！ えへへ、それじゃあ行こう、純ちゃん！」

梨穂子は私の手を強めにぎゅつと握って引つ張ろうとした。急だったから私は思わずちよつと抵抗する。

「わっ、ちよつと……もう、急がなくてもいいじゃん」

でも……梨穂子といると、やっぱり楽しい。隣にいただけで楽しい。

「絢辻さん、またあとで戻ってくるね」

「分かった。多分、図書室にいるかな」

「了解」



「お邪魔しまーす」

「お邪魔しまーす」

「梨穂子は茶道部じゃん」

「あつ、そつか。えへへ、純ちゃんにつられちゃった」

「ふふつ、梨穂子が梨穂子してる」

「なにそれ〜……」

小学生の時、梨穂子の家に遊びに行つたときも同じことを梨穂子はしていた。10年経つても、梨穂子は相変わらず梨穂子だった。

「そういえば純ちゃんがここに来るのは結構久しぶりだね」

「うん。最近はちよつと忙しかったから」

実は高校に入つてから、ちよいちよい梨穂子に和室へと呼ばれている。茶道部の部員でもなく、なる気もないけれど。

「今日も絢辻さんの手伝いの予定だったの？」

「うん。絢辻さん、毎日たくさんの仕事をこなしてるから……」

「純ちゃんつて、優しいんだね〜」



「ううん、私がやりたくてやっているだけだから。優しくなんてないよ」

梨穂子の混じり気のない純粋な褒め言葉に、私は何か照れくさくなって、つい理屈をこねて否定してしまう。

「え、そうなのかな?」

「そうなのそうなの」

そんな近況報告もしつつ、私は何故か和室にあるこたつに入る。ちなみに冷蔵庫も完備である。梨穂子曰く、先輩が学校でいらなくなつた備品を借りてきているとのこと。

「あああああ……」

こたつに入った瞬間、冷えていた下半身が天国のような温もりに包まれて、私は思わず天井を見上げ声を上げる。この時期のこたつは本当に偉大。

「私ものはくいろ。……ふああ、生き返る」

「ね、ほんと生き返る……これは帰れないや」

二人でこたつの机部分? に上半身をぐでんと乗せる。梨穂子のだらしない顔が正面に来て、お互いちよつとおかしくて笑い合う。

すごく、平和な時間。先に身体を起こしたのは梨穂子だった。

「それじゃあ、そろそろ、本題に入りますか」

「お?」

本題というのは、もちろん……

「……純ちゃん、お誕生日おめでとう！」

満面の笑みを浮かべて、梨穂子が私を祝ってくれた。目で梨穂子の笑顔を見て、耳で梨穂子の声を聞く。身体でこたつの温もりに包まれる。そして、心で……梨穂子の純粹なお祝いを受け取る。

なんて、なんて私は幸せ者なんだろう……！

「梨穂子……ふふ、そうだと思っていたけど、嬉しい……！」

私は思わず梨穂子の隣にこたつに入ったまま移動して、思い切り抱きしめて押し倒した。

「うが〜！ 何するの純ちゃん〜！」

「全身を使った究極の感情表現っ！ ギゆうううう!!」

「も、も〜！」

あ、梨穂子を押し倒した、と言ってもその後何かアレとかコレとかには発展しないので。ご期待に沿うことはしないので。私は梨穂子にそういう感情を抱くことはないで。

………たまに胸は揉むけど。ここだけの話揉むたびに大きくなっている気がする。

「ふう。満足した」

「やつと解放された〜……」

しばし梨穂子に感情をぶつけ、私は元いた場所に戻る。

「こほんっ！ それじゃあ、改めて……」

梨穂子はスイッチを切り替える感じで一つ咳払いをして。

「……今日は純ちゃんのお誕生日祝い！ ここでお菓子パーティーするよ〜！」

……まあ、知ってた。

「……いつもと変わらないね？」

「ちや、ちゃんとプレゼントもあるから〜！」

「プレゼントは何？ もしかして梨穂子？」

「んなわけあるか〜！」

からかわれるとムキになる梨穂子かわいい。

「えつと〜……あつたあつた！ これ、純ちゃんにプレゼント」

梨穂子が私に手渡してきたものは……

「……あつ、これ。私が梨穂子に渡したのとお揃いのやつだ！」

「えへへ……」

『J』の文字に小さなクマが抱きついていているキーホルダー。実は私、4月の梨穂子の誕生日に『R』の文字に小さなクマが座っているキーホルダーを渡していた。

「まさか、探してきてプレゼントしてくれるなんて……結構探すの大変だったでしょ」

「純ちゃんと一緒にだと考えたら、大変でもなんでもなかったよ」

うっ……梨穂子の言葉と、行動と……あとちよつと照れが混じった嬉しそうな顔とふんわりとした声と純粹な心が……私の、心を……！

「梨穂子……あつ……やば……」

「純ちゃん？ ……えっ!? な、なんで?!」

目から勝手に、私の想いが溢れ出て……！

「ハンカチ！ ハンカチあるから！ はい！」

梨穂子から、可愛らしいパステルカラーのハンカチをもらって目元に当てる。

「ありがと……あはは、何かあの時みたい……」

「あの時……ああ、あの時かあ。もう今となつては懐かしいね」

あの時、とは。……まあ、これも誕生日の時に思い返すべき内容じゃあないと思うけど。

確か前に、私は梨穂子がいなかったら学校に通っていなかった、みたいなことをここで伝えていた気がする。この際だから、語ってしまおう。

あれは確か、中学1年生の時。あの時の私はやっぱり全くもって人に興味を持たず、そのせいでクラスからちよつと浮いてしまった。はじめには遭っていないけれど、それでも何となく居づらい雰囲気というのはあつて……まあ、行きづらくなつてしまった。

一応梨穂子は同じクラスだった。同じクラスだったんだけど……私が一方的に梨穂子を遠ざけてしまつてた。何だろう、幼馴染への反抗期、みたいな。私はもう、梨穂子なんていららないんだ、一人でこれからずっと生きていくんだ！　みたいな。

そんな私を梨穂子は受け入れて、私とちよつと離れた距離に常にいた感じ。

で……ある日。ずっと一人で生きていく！　って意気込んでながら、私はクラスで孤立していることにちよつと耐えきれなくなつて。学級活動の時間のレクリエーションの時に、参加しない！　って言つてカッコつけて教室から飛び出したことがあつて。

そこに来てくれたのが、梨穂子だった。当然、私は冷たくあしらおうとしたんだけど……梨穂子はいきなり、私を優しく抱きしめて。

『純ちゃんは、一人じゃないよ。辛かつたりしたら、私に甘えてもいいんだよ』

表面上では私はすごく嫌がった。嫌がつてただけど……それと裏腹に、勝手に、涙が出てきちゃつて。私でも気づけなかつた、『寂しい』って本心を梨穂子が見つけてくれた。

あれ以来私は、自分優先主義は変わらずとも、カッコつけて一人で生きる！　なんて

思わなくなつて。多分、その時梨穂子がいなかったら、私は不登校になっていたことも十分ありえた。

そして……梨穂子に依存みたいなのをするようになった。高校生になって周りが少しは見えるようになってから、だいぶ軽くはなったのだけど。

「……梨穂子」

「なあに、純ちゃん」

「大好き」

「えへへ、私も」

でも……多分これからも、梨穂子と私はずっと繋がっていると思う。

——※——

梨穂子とのお誕生日お菓子パーティーを終えて、私は絢辻さんが仕事をしているという図書室に向かう。

夕日が差し込んでオレンジ色に照らされている図書室には、人影が一つだけ見えた。当然、絢辻さんだ。

「絢辻さん、お待たせ」

「橘さん。どうだった、友達とのお茶会は」

絢辻さんはあらかた仕事を片付けてしまったようで、一人で自習をしている最中だった。

「久しぶりなのもあるけど、すつごく楽しかった」

「ふふつ。何だか、心から楽しかったって顔してるわよ?」

「えっ、そ、そう? ちょっと恥ずかしいんだけど」

「あたしは全部お見通しなの」

絢辻さんは得意げに笑う。2人きりの空間だから、多分、本当の絢辻さんに私に接していると思う。声のトーンもちよつと低いし。

「で……絢辻さん、一応聞くけど……仕事、全部終わってる?」

「ええ。あなたが楽しんでる間、あたしは一生懸命働いて……」

「うっ……」

「冗談よ。今日は珍しく実行委員の仕事がなかったから、量もすごく少なかったわ。あたし一人でもあつという間に終わっちゃった」

絢辻さんはこういう意地悪をしてくる。何だろう、表モードでもそういう感じの意地悪するし、裏なら尚更だし。元々絢辻さんは人をいじるのが好きなタイプなんだろう。

「あはは、そっか。……で、私を待ってくれてたの？」

「それも半分だし、単に家に帰りたくないっていうのも半分」

「あ、なるほどね……」

家に帰りたくない、というワードに私は引つかかった。

けれど、ここは察して引いておくべき場面だと思う。そういうのは多分、言いたい時に言ってくれるはず。絢辻さんのようなタイプなら、尚更。

「橘さん、今日誕生日だったんでしょ？」

「えっ？」

突然、絢辻さんからこのワードが出てくるとは思わなかった。私は驚いてしまう。

「何で知ってるの？ 確か、絢辻さんには伝えてないはず……」

「勘よ。たかが365分の1でしょ？」

「たかがのレベルじゃないって……」

絢辻さんはとどころ冗談なのか冗談じゃないのか分からない部分がある。というか、絢辻さんなら割と365分の1を勘で当ててきそうなのが怖い。

「だから……はい、これ。いつも手伝わってもらっているお礼も兼ねて、あなたへの誕生日プレゼント」

「え……？」



「聞こえなかったのかしら？ 誕生日プレゼント、よ」

絢辻さんからプレゼント……!? 本日最大のサプライズが、私を襲う。私は見事にそのサプライズに飲み込まれて、身体も思考もフリーズしてしまった。

「……何よ？ そんなに意外？」

「意外すぎるって。絢辻さん、そういうイメージないから……」

だって。だって……まさか、あの絢辻さんからプレゼントをもらうなんて、誰も考えられないでしょ。

「……あたしも、正直こういうことするのあたしのキャラじゃないなって思ったわ。けれど、橘さんにはお世話になっているし、それに……橘さんを手放したくないから」

「手放す……？」

絢辻さんは、時折意味深だったりする。私は……別に、プレゼントをもらえなかった程度で、絢辻さんへの興味を失うわけないけれど……。

「……深く考えなくてもいいわ。とにかく、そういうこと」

絢辻さんは若干照れ隠し気味に言った。誕生日の日に深く考え込んで難しい顔して帰るのは当然嫌なので、ここは絢辻さんの言うことにしたがっておく。

細かいことは気にするな、ってこと。で、手渡されたプレゼントなんだけど……

「これって……え？ 数学の参考書……？」

私でも分かる。およそ、誕生日にもらうものではない気がする。一応レベルは私に合わせてもらっているみたいだ。

「あたし、こうして人に物を選んであげるなんて初めてだから。……変、かもしれないけれど」

まあ、絢辻さんだもの。単に誕生日プレゼントと言ったら変かもしれないけど、絢辻さんのつて接頭語がつくと途端に納得してしまう。

「ちよつと中身見てもいい?」

「あつ、それはダメ」

「えっ?」

すると、絢辻さんは私が持っている手渡されたばかりの参考書を取り上げて。

「ダメだったらダメなの!」

……何か、これも照れ隠しな感じがする。頬、ちよつと赤いし。

「もう……取り上げなくても勝手に見ないのに」

「……家に帰ってからにして」

この一言で、何となく私は察してしまった。これはただの参考書じゃないってことを。

「……分かった。期待してる」

そう思うと、嫌いな参考書のはずなのに何だか嬉しくなってしまうて。勝手に口角が上がってしまう。

「でも……橘さんはこれで良かったのかしら。不安なのよね、ちよつと……」

絢辻さんも、やっぱり不安なものは不安なようだった。私は絢辻さんから再度参考書を受け取って、前に言われた言葉を思い出す。

「……こういうのは、気持ちが大それたこと。絢辻さん、言つてたよね」

プレゼントは、価値より、物の種類よりも、気持ち。私が絢辻さんのお見舞いの時に、チョコチップクッキーを手渡した時に言われたこと。

よく考えてみると、絢辻さんがこういう考えを持っているということは中々意外なことではないのだろうか。

「あなた、ほんとあたしの言葉覚えてるわよね」

「だって、印象に残ったから」

「そ、そうかしら？」

「そのとおりだよ。それに、何だかこの言葉……この後、すごく大切になつていくと思うから」

「この後、というのは……1日後かもしれないし、10年後かもしれない。」

「根拠のない推測を立てるのね」

「勘ってやつだよ。絢辻さんだって勘で私の誕生日当てたんでしょ？」

「あなたの勘とあたしの勘は質が違うの」

「何それ」

ちよつと絢辻さんの言葉がおかしくって思わず笑ってしまふ。釣られるように、絢辻さんも笑う。二人で笑い合う、ただそれだけなのに心の中が柔らかい光で満たされる。

「……ありがとう、絢辻さん。テスト前とかに大切にに使わせてもらうね」

「テスト前限定？」

「じゃあ、今日帰ったらー！」

「ふふっ。よろしい」

私は絢辻さんからもらった参考書をカバンにしまった。何となく、本当に何となくなんだけど……参考書に、絢辻さんの気持ちが入っていて、ちよつと重いような……そんな、何か幻想みたいな感覚があった。

※

夜。私はかつてない充実感を、自室で感じていた。

今日はなんと、棚町、梨穂子、絢辻さんの3人からそれぞれ心のこもった誕生日プレ

ゼントをもらった。梨穂子の『J』にクマが抱きついているキーホルダーを眺めつつ、柵町からもらったいいシャーペンを持って、絢辻さんからもらった参考書を開く。

「あ……」

ただの参考書じゃないってことは分かっていた。けれど……。

「人の誕生日プレゼントに、ここまでする……？」

柵町も、さすがの梨穂子も、絢辻さんのプレゼントには敵わないだろう。なぜなら手渡された参考書は、なんと絢辻さん直筆の解説入りだったからだ。

「これ、全部私のため……うん、そうだ。私が出来ているところはそんなに解説入ってないし、出来ないところはすごく親切に解説書かれているし」

というか、私の苦手を一体どこから知ったんだ？ それくらい、絢辻さんの解説量の差は的確だった。嬉しいけれど、ちよつと怖い。

「……これ、私は絢辻さんにどんなプレゼント渡せばいいんだろう」

これに釣り合う誕生日プレゼントは中々ない。すごく嬉しいけれど、絢辻さんの誕生日のときに私がそれに見合うプレゼントをちゃんと返せるか、私はちよつと心配になってきた。

それにしても。

「私って……愛されてるよね」

交友関係狭いし、絢辻さんと一緒に仕事する前はそんなに人付き合い良くなかった私。そんな私なのに、3人から心のこもった誕生日プレゼントをしっかりともらえて。……本当に私は、幸せ者だ。大切にしないと。

## 伝統の危機

絢辻さんの仕事を手伝う日が続いた。手伝う日が続いて、私は――。

私は1年生2人の用事を聞いていた。

「あ、あのっ！ その……えっと……」

「ゆっくりでいいから、話してみて」

「中多<sup>なかつた</sup>さん、やっぱり代わりに話す？」

「い、いいの逢<sup>あ</sup>ちゃん。これも、引っ込み思案を治すための特訓だから……」

「特訓中かあ、なるほど？」

気弱そうなツインテールの女の子と、ボーイッシュなショートヘアのちよつと日焼けした女子。どうやら気弱そうな女の子は、引っ込み思案を治すために友人の協力を得て奮闘しているらしい。

「そ、それで！ あの、創設祭で、私達のクラスは劇をやるんです！ それで……その練習に、えっと、えっと……」

「体育館だよ、中多さん」

「そう、それです！ 体育館、貸してほしいんです！」

劇、か。……多分、それも引つ込み思案を治すため？

「ふーむ、体育館ねえ……放課後は間違いないどこかの部活が使っているから、ダメね」

「そんなあ……」

「あ、でもお昼休みならまず大丈夫。あと……無理言つて日曜に借りるなんてことも出

来なくはないかも」

「え、そうなんですか？」

「普通は無理なんだけど、時期が時期だしね。特例で行けると思う。私に任せておいて」

「あ……ありがとうございます！」

何で私がそういう仕事が出来るか？ まあ、絢辻さんの隣にいれば覚えるんだつて。

「じゃあ、一応代表者2名ということで、名前教えてもらえないかな」

「あつ、はい！ えつと……I—B、中多紗江さえです」

「同じく、七咲逢ななさきです」

「了解。それじゃあ、名前だけ担当の先生に伝えておくね。日曜に借りるとなったら色々またクラスの方で相談とか必要になると思うから、予約はまだしないでおく」

「ありがとうございます、先輩。……ところで、先輩はどのクラスにいるんですか？」



「2—A。あ、名前教えないと呼び出せないよね。私は橘純奈」  
「え、橘ということとは……」

……美也の友人だったりする？ まあ、まだ彼女は苦手なだけ……嫌な顔するのをぐつとこらえておこう。

「あ、そつか。1—Bということは美也のクラスメイトか。妹の美也がお世話になっております」

「かつこいい……素敵なお姉さんですね」

「そ、そう？」

「……中多さん、もしかして一目惚れ？」

「あ、逢ちゃん!？」

——というわけで。私は気づけば創設祭実行委員にもなっていた。別に立候補とかではなく、ある日先生が提案して流されてしまったのだけだ。

そのため、私が絢辻さんの仕事だけを手伝うということはなく、創設祭全体の準備を表立ってすることになった。

『全ての人に、等しく幸せを』

絢辻さんの手帳に書いてあった文字を嘔み締めながら、私は自分の時間を削って準備をする。

本格的に創設祭に関わるようになると、仕事の内容も量も大変になってくる。ついでに創設祭に出し物を出す生徒から困ったらとりあえずなんか聞かれるのでそれも大変。ただ、絢辻さんの手伝いの経験値があるせいか、全くの未経験でやっている周りの人よりかはだいぶ要領がいい気がする。自分で言うのもあれだけど。

朝早くに学校に行き、出来る範囲の創設祭の準備を進める。授業を受け、昼休みも時間があれば準備。そして授業を受けて、放課後は準備に手続きに奔走。他の生徒が帰った後もだいたい絢辻さんは残っているのです、その仕事も手伝う。

帰る時間は毎日7時過ぎ。一日が飛ぶように過ぎていく。こんな生活をしていくとよく持つてるな、と私ながらにして思う。同時に、ほぼほぼ1年こんな生活を続けている絢辻さんの化け物ぶりを改めて認識する。

「まさか、あんたが実行委員になるなんてね……一番ありえないと思っただけだ」

なんか協力してくれてる棚町と一緒に、看板のペンキを塗る作業。もじゃ天パは作業

に邪魔なのだろうか、ちゃんと後ろに髪を縛っている。

「私にしては珍しく流されちゃった、って感じ」

「あんた、結構流されやすいタイプだと思うんだけど？」

「……そう見える？」

「そう見える」

ちらりと向こうの様子を見やる。柵町のペンキ塗りが妙に綺麗でなんかムカつく。

「たとえばどんなところか」

「んー……霧囲気」

「霧囲気!？」

「うん。橘なら大丈夫でしょ、みたいな感じする」

「舐められてるってこと!？」

「ぎつつらいと」

ぎつつらいと。じゃないっての……。

「なんか悔しいんだけど」

「まあまあ。でも、最近のあんた、霧囲気変わってきた気がする」

「ほんと？」

「ええ。なんというか、人当たりよくなったよね」

「そう？ 私はまだ、普通にしているだけなんだけど」

「普通、ねえ……」

棚町が作業を止めてじわりとにじり寄る。そして、私の顔をじーつと食い入るように。

「……棚町さん？」

「……」

「おい」

「……」

離れないので、すっ……とデコピンの構え。

「わかった、わかったから」

「……で？ 何がわかったの？」

「ふーむ。……何もわかんない」

「……」

まあ、確かに……前の私なら、こういうことに関わるなんて絶対にありえなかったし、関わっている人を軽蔑していたと思う。

でも、今の私は……こういう仕事が好きにはなれないけれど、大嫌いというわけでは

ない位には思える。

果たして、絢辻さんに接近して良かったのか、それとも悪かったのか。自分の時間を人に捧げることが私にとって正しいのか、正しくないのか。

答えは、分からないまま。絢辻さんに近づかなくても私には梨穂子や柵町がいたし、自分の時間を最優先にして生きることを続けていれば当然そういうことだけで得られる経験もある。

というか絢辻さんに関わらなきや死ぬわけでもないし、むしろ関わったからこそ死ぬということも……なくはない。多分ないけど。

まあ、だから……他人から見れば絢辻さんに出会って正解みたいなのを言われるだろうけど、私的にはそんなの分からない。

というか事情を全く知らない他人が私の主観を無視してあーだこーだ言うなって話なんだけど。

……で、実際そういう現象は起こってしまうわけで。

「はっ」

初めて高橋先生からそれを聞いた時、私は意味が分からなさすぎて面食らった。「ツリーを中止にしろって……一体なんですか？」

他の実行委員の男子生徒が、あからさまに不満そうに聞き返す。

創設祭の目玉である、巨大なクリスマスツリー。毎年、創設祭実行委員が中心となつて、生徒がデザインや発注から飾り付けを行つており、当然今年も同じように生徒のみで行なわれる予定だった。いわば、輝日東高校の伝統のようなもの。

それが、突然の中止通告。昔の私なら仕事が減つてラッキー、みたいなことを思つていただろう。

しかし、今の私はそんなこと言われたら黙つていられるはずがない。

「何でも向こうは、例年より作業が遅れているのが気になっているのよ。だから……生徒ではなく、市が仕事を肩代わりすると」

「そんなのって……何も分かつてない！」

「……そうね。向こうはこちらのことを何も分かつてないのよ」

突つかかる女子生徒をなだめるように、高橋先生は言った。……しかし、私には高橋先生がなんとか感情を押し殺しているようにも見えた。

「予定より発注が遅れている理由はちゃんとしているのよね？」 絢辻さん

「はい。委員全員で話し合つて、オーナメントをしつかりと選んだためです。なので、少し発注が遅れてはいますが……それも織り込み済みで、飾り付けは十分に間に合うはずですよ」

表の顔の絢辻さんが、深刻そうな顔をしながらもしつかりと理由を説明する。

ちなみに、委員になつた私もその話し合いに参加して……というか、委員になつて初めての仕事がそれだつたつ。ツリーのデザインを決める議論はかなり白熱して、3日かかつてようやく案がまとまつたのを覚えている。

そして、ツリーの材料の発注にも私は関わつた。まあ、それは絢辻さんがやつてたから手伝つただけなんだけど……予定より遅れはしたけれど、十分巻き返せるつてその時の絢辻さんが自信ありげに言つていた。

「ええ。確かに先方にも絢辻さんの言つている通りに伝えたわ。絢辻さんが作つたスケジュールもFAXで送つた。……けれど、『ツリーの仕事を肩代わりさせろ』の一点張りで」

「どうしてですか!」

「そんなの私が聞きたいくらいよ。……ごめんなさい、あなた達を守れなくて」

生徒の声に、悔しさをにじませる高橋先生。私はそんな先生の顔を初めて見た。誰もが言葉を失い、失意の沈黙が場を支配した。

しかし。それを、切り裂いたのは……やはり。

「……先生」

絢辻さんだ。絢辻さんが意を決したかのように、声を発した。

「……何かしら？」

「市の担当の方と、直接お話をさせていただきませんか？」

どんよりとした空気が一転したのを私ははつきりと感じた。

絢辻さんが、動く。それだけでどんなに心強いのか。

「私達としてはあまりにも納得が行きません。創設祭は代々、生徒主体で行なわれてきたはずですよ。ですから……生徒の代表として、しっかりと納得が出来るような話を先方としたいですよ」

絢辻さんは強く言い切った。優等生にしては、少しギリギリのラインを攻めているような行動。



虚構の絢辻詞だとしても、決して、全てを受け入れる大人しい優等生ではないのだ。「……分かったわ。他のみんなも、異論はないわね？」

みんながみんな、絢辻さんを信用している。もちろん、私もその一人。確かに苦手ではあるけれど、絢辻さんの実力は、多分私が一番知っている。

「では、学校の方で交渉をしておくわ。出来るだけ早く予定を組むようにするから……絢辻さん、頼んだわよ」

「はい。期待に応えてみせます」

絢辻さんはそう言うと、私にだけに仮面の下の素顔をちらりと見せた。

……一体、絢辻さんは何をしでかすのだろうか。楽しみと、不安と、半々だ。

## 不安に揺れて

クリスマスツリー中止の連絡があつた日の放課後。私は絢辻さんにあの時の神社に連れてこられていた。

いくら苦手意識を持つている私でも、珍しく余裕のなさそうな絢辻さんの様子を見たら断ることが出来るわけがない。というか……絢辻さんの誘いは基本的に断れない。

絢辻さんが怖いとかそういうのではなく、あの時、心に生まれた強固な何か、絢辻さんと私を固く結びつけて離さないような、そんな磁力に近い何かの力が働いているから。

まあ、この時期にここに連れられるということは、だいたいそういうことなのだろう。実際、私の予想は当たった。

絢辻さんは神社につくなり、周囲に人がいないか確認する素振りをしてから大きく深呼吸をした。

……そして、私に後ろを向いて。

「あーもう！ 最悪最悪最悪最悪、サイツツツアク!!」

絢辻さんの、声が裏返るくらい絶叫。私はまるで地縛りでもあったかのように、一歩すら踏み出すこともできない。

「知ってるわよ！ どうせ予定が間に合わないとか難癖つけてきて、実際は金と権力で飾り付けたツリーを見せびらかしたいんでしょよ！ 私達のプライドを、情熱を奪ってにおいて……意地汚い奴らの集まりよあんなの!!」

まくり立てるような勢いで怒りをぶちまける。情緒不安定とは聞かされていたが、実際それを目の当たりにするのは初めてで……見事に気圧されてしまった。

「ああもう許せない！ いくら私達が高校生だからといってそれは舐めすぎ！ 絶対に許せない!!」

そう言い切った絢辻さんは、肩で息をしていた。私が掛ける言葉はどこにも見当たらない。

普段絶対に表に出さない、心からの恨み、怒り、叫び。空気を伝って私の鼓膜に伝わったのは絢辻さんの声だけでなく、並々ならぬ思い、激情。

しばらく、水を打ったように静まり返る。ゆらりと、絢辻さんがこちらを向いて、静

かに言った。

「……悪かったわね、付き合ってもらって」

「大丈夫。私も、今日の話は心底腹が立ったから」

「そうね。……絶対に許せないわ」

絢辻さんは目元を拭った。心なしか目が赤く見える。泣いていたのだろうか……？

『全ての人に、等しく幸せを』。泣いていたにせよそうでないにせよ、あの手帳の言葉は紛れもなく本気だったのだと、私は噛み締めていた。

「スツキリした？」

「ちよつとだけだけど。それに、橘さんに聞いてもらっていつもよりスカツとした」

「そういうものなの？」

「そういうものよ」

「まあ……絢辻さんがそれでいいなら、いいんだけど」

何となく、絢辻さんが吹っ切れたような感じがした。私は発散に上手いように使われてしまったのだと思い、でもそれが嫌ではなく……とりあえず、苦笑いした。

「……それで、戦略はもう決まってるの？」

「ええ、あたしを見くびらないで」

戦略というのは、中止を通告した市の担当との話し合いの時の戦略。私は絢辻さんが

普通に話し合いで和解しようなんて到底思えなかったし、実際そうらしい。

学校外だから猫を被る必要もないし。

私にだけに見える絢辻さんの笑みは、大抵嫌な予感がする笑み。もつとも、今はそれが私に向けられていないのが幸いではあるが。

「……………けれど」

「けれど?」

「……………あなたにちよつとだけ、迷惑かけるかもしれないけれど」

たつた今私に向けられた。嫌な予感が背筋を駆け抜ける。

「……………ほんとにちよつとだけ?」

「……………」

今また口角が不気味に上がった! これは……………もう……………何が来るか怖いけれど……………。

「……………覚悟するよ、絢辻さんと一緒にいるって決めた私が悪いんだし」

「あなた、下手な男よりも肝すわってるわね。あたし、そういう人嫌いじゃないわ」

「はいはい……………」

絢辻さんはたまによくわからないことを言う。私はちよつと呆れた。

閑話休題な雰囲気。

「……ねえ」

すつかり落ち着いた絢辻さんが私を見つめ、こちらに近寄る。声は柔和で、甘えてい  
るようにも……いや、私の錯覚？

「……さん？」

「……ち」

絢辻さんはそつと、しかし強引に私の手をとって神社の縁側に向かう。やっぱり、絢  
辻さんの手は私のそれと比べて美しく、できれば並んでほしくない。

でも……今日の絢辻さんの手、なんだか熱い。

そして、絢辻さんに促されるままに、私は縁側に座った。絢辻さんも、その隣に座る。  
絢辻さんの突然の行動に、私は困惑した。

それに絢辻さんの雰囲気、なんだか……ふわりとしているような、そんな風にも感  
じられるような。

「絢辻さん……？」

「詞《つかさ》」

「えっ？」

「詞つて、呼んで」

……やっぱり、絢辻さんは分からない。急な提案に私は戸惑う。

「急に、どうして?」

「……深い意味はないわよ。ただ……絢辻という名字が、嫌いだから」

そう言うと、絢辻さん——ううん、詞は深く息を吐き出す。姉にコンプレックスがあるから、なのだろう。……いや、それ以上のものがある気がする。あんなにこじれた二面性を持っている、詞なのだから。

にしても、詞、か。……私は、この名前の響きが、何となく好きだ。

「分かった、詞」

「ありがと。えつと……」

「純奈。下の名前、覚えてなかったの?」

「そんなわけないじゃない。ただ、橘さんという印象が強すぎて、とつきに出てこなかっただけ……」

絢辻さん、橘さん。お互いに名字がの印象が強すぎて、みんな中々名前で呼んでくれない。もつとも、交友関係が狭めなものもあるのだろうけれど。私は特別仲がいい相手は梨穂子、あと仲がいいと認めるのはシャクだが……柵町。それくらいだし。

詞に至っては……思い浮かばない。

「……名前で呼び合うとき、なんだか特別に思えるの。特に、家族でも親戚でも何でもない……お互いの秘密を共有している、純奈のような」

だからこそ、そんな言葉が詞から出てくるのだろう。

「特に絢辻さんなんかは痛っ」

「詞」

「……叩くことないじゃん」

「あたし、手が出るのが早いから」

「全く……」

私はわざとらしく頬を膨らませる。詞は……なんだか楽しそうで何よりです。

じゃあ、私も楽しませてもらおっかな。

「詞」

「何？」

「呼んだだけ」

「……何それ」

「分かんない」



やっておいてなんだけど……すごく、照れくさいんだけど。

「純奈」

「何？」

「呼んだだけ」

「……なんか照れくさくならない？」

「……うん」

詞も同じよう。同じ感情を持つてるとなるとお照れくさくなって、思わず身体が揺れて足が動いてしまう。

……この感じ、嫌いじゃないけれど。

「……ねえ」

「うん？」

「純奈は、わたしとの関係がいつまで続くと思ってる？」

「……また、突然何を」

「創設祭が終わって、2年生が終わると……わたし達、受験生じゃない？ きつとそれも、すぐ過ぎてしまつて……大学、社会人、そして気がつけば……つて。最近、そういう妄想をするようになってきて。……不安で」

詞は、たまによくわからないけれど、たまに可愛いというか……すごく、弱くなる。私は詞のそういう一面は、素直に好きだ。

「……詞は、私との関係が続くことを望んでるってこと？」

「そう、ね。わがままは言わない。今より遠くなってもいいから……完全に切れる、ということだけは嫌なの」

……私は、知らず知らずのうちに詞にそういう思いを抱かせてしまったようだった。私は単に、詞のことを知りたいと思っただけなのに。

「だって……わたしにとって、初めての大切な人だから」

……不思議だった。詞の言葉に、人を包むような……いや、ちよつと違うか。包むというか、むしろ人に包ませるような吸引力……？ うーん、どうたとえればいいのか分からない……。

けれども、裏の詞が持つ攻撃的な雰囲気というのは完全に消え去っていたし、その言葉は私の奥深くに強烈に植え付けられた。

「……詞？」

詞が、私の身体に身を寄せる。私の問いかけに、詞は何も返さない。

「……」

無言には、無言をもって。私は何もせず、詞の温もりを受け入れた。詞は私に体重を預け、そして……小さく、すすり泣いていた。

詞の、揺れ動く気持ち。おそらくたくさん傷つけられて、歪な形になってしまった心の、その核からの叫び。……私には、多分それを受け止めるだけの器量はないんだけど。でも……私だから、受け止めてもらいたいんだろう。たとえば、私が受け止め切れなくても。

「……ありがとう」

詞は私からそっと離れた。そして、一呼吸置くと……まるで幻想だったかのように、柔らかな雰囲気は吹っ飛んでしまった。

「よし、切り替えたわ。もう大丈夫」

「ん」

「ツリーの件は絶対上手く行く。あたしを舐めないで」

詞は、黒い強気の笑みを浮かべた。

私の苦手な詞が帰ってきて、私は心底安心した。

## 嘘を割り、真実を並べる

クリスマスツリー中止の通告を受けた翌日。

「橘さん。……ちよつと、いい？」

休み時間、私はクラスの女子に呼び止められた。

創設祭実行委員になってからというもの、クラスの人に創設祭関連の頼まれごとをされるが増えた。……といっても、詞が教室にいないときに限るが。

多分、今回もそうなんだろう。極力自分の時間を確保したい私だが、実行委員になったからにはその責任というものをしっかりと負わなければならない。

じゃないと、実行委員全体の評価が落ち……結局の所、詞にも迷惑がかかる。

……しかし、これは頼み事という雰囲気じゃない気がしてきた。嫌な予感がする。

「……なるべく、手短にお願ひ」

少し、牽制を入れておこう。無意味かもしれないけれど。

「さつき、クリスマスツリーが中止になった、なんて話を聞いたんだけど」

嫌な予感というものは、なぜか当たるものだ。おまけに、いつの間にか私の机に女子が3人集まって囲んでいる。

「……なんで、私に聞く?」

「だってあなた創設祭の実行委員でしょ? それに……」

女子の一人が、他の女子にちらりと目を見やる。……私は確かに、その子の表情が意地汚い笑みに変わったのが見えた。

「それに、ツリーが中止になったのってあなたのせいらしいじゃない」

私は言葉を失った。……何で、こんな話になっている?

「……無言つてことは、凶星のようね」

「違う」

「嘘をついても無駄よ」

「慣れないことをするから、こうなるのよ」

「違うから」

「どうせ、内申目的なんでしょ?」

「違う!!」

私は机を両手で思い切りぶつ叩いて立ち上がる。勢い余って後ろに倒れる。休み時

間のクラスの喧騒が一気に静まり、私達が注目される。

「……何がどう転がってこういう話になってるか分からないけれど、全部違うから」  
「でも、クリスマスツリーは中止になるんでしょう？ ねえ、山崎さん」

「そうよ。私、見たもん」

「え、どこで見たの？」

「偶然、通りかかったの。高橋先生が実行委員を集めて、ツリーを中止にするって言っていたところを」

「なるほどー。山崎さんが言うなら、ホントのことだよね」

「ごちゃごちゃ下手な演技打って、私はますます苛立つてくる。」

「で、高橋先生が言うには、ツリーの予定が遅れてるからみたい」

「へー、そうなんだ。……じゃあ、遅れさせた人が悪いってことだよね」

「そうそう。で、その犯人はというと……そういう仕事に慣れてない人、ってことかな」

「あ、私知ってる。つい最近、見栄張って委員に入った人がいるんだよ」

「ああ、そういえばウチのクラスにそんなのいたね。えっと、誰だっけ……？」

「普段目立たないから名前忘れちゃうよね。私知ってるよ、橘純奈って人」

「あ、思い出した思い出した！ いつもいつも手帳に何か書いてる、気味悪い人？」

「……いい加減にして」

悪質すぎる。手が出そうになる。けれど、ここで手を出したら……間違はなく、一方的に私が悪人になる。彼女たちは、おそらくそういう責任転嫁に長けているから。

もし暴力などで私が騒ぎを大きくするようなことがあれば、それこそ取り返しのつかないことになる。絢辻さんの話し合いの機会が設けられる前に、本当にツリーが中止になるかもしれない。

……こういう考え方が出来るあたり、私はまだ冷静だった。

「それにしても、周りによく見られたいって立候補したのに、その結果こうやって大惨事を招いてるなんて」

「ほんと、笑えちゃうし。それに、伝統をこんな形で壊しちゃうなんて」

「許せないよね、全く。先生も先生で分かってたはずなのに、なんでこういう自己中な人を実行委員にしたんだろう」

「うんうん」

じゃあ、私はどうすればいい？ 何も行動せずに、この悪評を受け入れるだけ？

私が悪人になれば、創設祭は成功する？

……そんなこと、ありえない。

じゃあ、どうやって反論する？ こいつらを黙らせるだけのカードは、私は持っている？

……多分、ない。実物以外、こいつらは多分信用しない。  
つまり、この勝負は私では絶対に勝てない。私は悟った。

しかし……何も行動を起こさずに、負けを認めることだけはしてはいけない。一番こいつらが喜ぶのは、私が悪人のレッテルを受け入れること。だから……休み時間が終わるまで、のらりくらりとかわし続ける他、道はない。

「あのさ、あんた達はその話をどこで考えてきたの？」

「は？ 考えてきた？ 何言ってるの？」

「これは山崎さんが実際に見た話だから。ねー、山崎さん」

「通りかかりだけど、確かにこの目で、この耳でちゃんと現場を見たから」

まるで効いてない。……でも、時間は稼げている。

「そう。でも、あんた達は実行委員じゃないでしょ？」

「ええ。だから実行委員じゃない私達が、実行委員になったどこかの誰かさんの不甲斐なさを注意してあげているの」

事情も知らないのにあーだこーだ言うな、って言いたかったけれど、上手く話題をすり替えられた。

「実行委員同士だと、どうしてもそういうのって情が入って甘くなるからね」

「そうそう。クラスのみんなにも、分かって欲しいなー」



……しんと静まり返るクラス。これは多分、どう反応していいか分からないだけ。本心から私を悪く思っている人は、この3人含めても誰もいないんじゃないか？

「ね？ みんな、シヨックで何も言えないみたい」

何が『ね？』だよ。困惑してるだけだよ。

「まさか、こんな最低最悪の人間がこのクラスにいただなんてね」

「びつくりだよ。あーあ、なんで一緒のクラスになっちゃったかなー」

「ねえねえ。いい考えがあるんだけど」

「え？ なになに？」

……これ以上暴走させると相当まずいことになりそう。何か、手段は――。

「このクラスから、その最低最悪の人間って人をさ、追い出せばいいんじゃないかな」

手段は――。

「あ、それいいかも。もしその人が実行委員からいなくなつて、仕事がスムーズに行くようになったら……クリスマスツリーの中止が撤回されるかも！」

「そしたら私達、正義の味方！ って感じだよね」

手段は――！

「とういうわけで。みんな、協力して橘さんを――」

「あら、何の話をしているのかしら？」

女子3人の後ろから降りかかる声。はっとして、3人が振り返ると……。

「絢辻さん!? 先生の手伝いに行っていたはずなのに……!」

「手伝いの途中に『偶然』通りかかっただけよ。そうしたら、教室の様子が変だったから覗きに来たのよ」

「詞……」

私は心底、救われた。まだ私の悪評が晴れたわけではないのに、もう大丈夫なんて思ってしまう。

「……で? もしかして、私に聞かれるとまずい話だったりする?」

「……そ、そうよ絢辻さん! クリスマスツリー、橘さんのせいで中止になるんですよ!?!」

「橘さんのせいでスケジュールが遅れたって……!」

その瞬間。私は、感じた。この感覚は……間違いない、あの、神社の時と同じような。

「……っ」

「詞、ちよつと待って……!」

私は思わず制止する。けれど、詞の虚像の崩壊は急速に進んでいく。

「あはは……」

「……絢辻さん？」

「な、何がおかしいのよ」

ふらり、またふらりと、詞の身体が揺れて……仮面が、剥がれていく。

「落ち着いて詞、もっと上手いやり方がいくらでもあるはず……」

しかし、頑固な詞に、私の言葉は届くはずがなく。

「あはははははっ……！」

詞の虚像は、高笑いと共に完全に崩壊した。

「ちよ、ちよつと……絢辻さんが、変になった……」

「……逃げる？」

「今更逃げられないから、馬鹿……！」

「そうよ。もう、あたしからは逃げられない」

完全に仮面を割り尽くした詞は、教室中をかつてない威圧感で覆う。もはや誰も止められないどころか、一言すら……いや、一つの物音すら立てることが出来なかった。

「にしても、真実を知らないで正義の味方ぶるといふのは……本当に哀れね」

「な……何よ。何が哀れなの」

「これからあなた達は正義の味方から、ただの道化に成り下がるのよ。この、創設祭実行委員長……絢辻詞の手によって」

私はこんな人と一緒にいたんだ……やはり、相当危険な人であったことを再認識しつつ、逆にこの人を味方につけることが出来た幸運にも私は感謝した。

「……っ」

「悔しいかしら。見たところ、純奈と親しそうなあたしと柵町さんが教室からいなくなったところを狙っていたみたいだけれど……残念だったわね」

「う、うるさい！」

「負け犬の遠吠えね。あーあ、哀しい哀しい。あまりにも哀れで笑えてきちゃう。……まあ、あたしに哀れなあなた達を笑ってあげるような優しさなんて、どこにもないのだけど」

私を取り囲んだ女子3人は完全に硬直して、動かない。逃げることにすら、詞のオーラは許さなかった。

「では。あなた達がいかに見当違いな思い込みをしていたか、このあたしが直々に教えてあげるわ」

「そう言うと、どこから取り出したのか……詞は、話し合いのときに書紀が使っていたノートを見せつける。」

「まず、ツリーの予定が遅れた理由から。遅れた理由はね、実行委員の間でデザインの議論がかなり白熱したのよ。で、その時の記録がこれ」

そのノートには、実行委員の間から出てきた意見や、ツリーのデザイン原案。費用や期間、必要な人手などなど……それらの要素がぎつしりと、十数ページ以上にも渡って書かれていた。

「で、見て分かる通り、『橋』と書かれた意見もそれなりにあるの。つまり、純奈は内申の打算なんかで立候補し、適当に仕事をしているなんて噂はデマなのよ」

「で、でも！ そのノートが造り物だって可能性も……！」

「へえ。まだ、抵抗するんだ？ まだ、自分たちの名誉が大事？」

「っ……！」

「ちよつと、何やってるのよ磯前！」

3人のチームワークにも、どうやらヒビが入ってきたらしい。詞はそんな3人の様子に全く気に留めずに、ただ事実を並べるだけという攻撃の手を緩めない。

「何なら、このノートを持って高橋先生に聞いたらどうかしら。校長先生でもいいわ。」

……このノートの最後のページに、校長先生の確認のハンコが押されているのだけど

ね」

完全勝利とは、このことを言うのだろう。もはや3人組が反論すればするほど、傷が広がっていくだけ。

「……で、でも。確かに聞いたわよ。クリスマスツリーが中止になるってことは」

「いいえ、中止にはなりません」

「でも！ 私は確かに通りかかって……！」

「……通りかかった友達から聞いた、の間違いじゃないかしら？」

「っ……………」

山崎さんが、膝からがくりと崩れ落ちる。他の2人は、そんな山崎さんを庇おうともしなかった。

「あら、凶星かしら。……まあ、別に本当に通りかかったとしても、中止にはならないわ。あくまでも生徒の仕事を市が肩代わりするだけの話で、創設祭当日にはちゃんとクリスマスツリーは建つわ」

ここで、クリスマスツリーは生徒が作ると言わずに、しっかりと事実を述べる辺りが抜かりないところだった。

「で、その市の肩代わりもまだ確定したことではないの。この後市としっかり話し合つて、それで初めてツリーがどうなるかというのが分かるわ。もちろん、あたしはクリス

マストリーを従来通り生徒が作れるよう、努力するけれど」

……完璧だった。3人側に唯一残っていた対抗のカードすら、詞は真つ向から潰した。

「……何か言いたいことは？」

3人はうつむいて、一口も発さない。ただ、肩を震わせているだけ。

そして、授業開始を知らせるチャイムが鳴った。

「はい、時間切れ。授業が始まるから、席につきましょう。」

詞はそう言うのと、何事もなかったかのように自分の席に戻っていった。

「……………ごめんなさい」

そう、一人が謝って席に戻ると、残された2人もとぼとぼと自分の席に戻る。

私は結局、途中に割って入ることを許されずに一部始終を眺め続ける他なかった。教室の静寂は未だ続き、やはり物音一つ発することも許されないような……そんな空気が流れ続けていた。

にしても、詞はこれで本当に良かったのだろうか……？ 詞のことだから、何か考えはあると思うけれど……いや、詞だからこそ、感情的になつて後先考えてないなんてこともあるのかもしれないけれど。

まあ、詞なら上手くやれるか。私はそんなことを思い、なんとか納得させながら、次の時間の準備を急いで行った。



## アツプサイドダウン

詞が私を守るために、たかかってきた女子3人をコテンパンに論破した、その日の放課後。

あれ以来、詞の周りに誰も寄り付かなくなった。もし私が詞と親しくないならば、私もきつと同じことをしていると思う。

とはいえ……詞はどうやら本当に、クラスメイトとは表面上の付き合いしかしてない、もしくははされてないらしかった。みんながみんな、露骨に詞を避けていたから……。それでもって、実は私も詞に話しかけづらかった。みんな露骨に詞を避けるものだから、私が詞に話しかけると私もどういふ目で見られるのが怖かった。

それに……何となく、話しかけると『来ないで』と拒絶されそうな、そういう幻覚すら見えていた。やつぱり、あの詞は苦手なままだ。

で、その日の私はというと……詞が市の担当と話し合いをするとのことで、詞直々に委員長代理の役を任されてしまっていた。

当然私はこういう上に立って物事全体を見る立場に立ったことはない。それに私は、今まで自分優先主義的な考えを持っていたから、他人をしつかり見るなんてことはほと

んどなかった。

そんな私が、一時的とはいえ委員長代理を任される。詞のようにうまくいくはずもなく、私は大苦戦した。

しかし、見かねた他の実行委員の子が私を助けてくれたりして、結果から言えば何とかはなった。なったが……。

「今日一日しか、これ持たないな……」

慣れないことをしすぎて、まるで3日分の仕事の疲れがぎゅつと濃縮されて私の身体を攻め立てるような……そんな辛さを感じていた。

それに、詞より遥かに手際が悪く……ちよつと申し訳ない気持ちにもなつて、気持ちも沈み気味だったり。

『あなたにちよつとだけ、迷惑かけるかもしれないけれど』

あの時神社で言っていたことって、こういうことなのだろうか？

ちよつとどころじゃない迷惑だったってあとで……いや、まずはあの時の感謝をするのが先だよ。

「……純奈、お疲れ様」

私が最後の委員の子の仕事が終わって、その子が帰るのを見届けると同時だった。市の担当との話し合いを終えた詞が、教室に入ってきた。

その表情は、すごく清々しいように思えた。やりきったのだろう、そう感じた。でも……市の担当との話し合いの結果を聞くよりも、まずは感謝をするべきかな。

「詞もお疲れ。えっと、すごく言うの遅れちゃったけれど……あのときは、ありがとう」

「あのとき？ ああ……ううん、いいの。あたしがそうしたかっただけだから」

「そうしたかっただけ？」

「ええ。そうしないと、あたしの中だと満足出来なかったのよ」

多分、もつと平和的に解決する方法はいくらでもあったし、詞も当然知っているはず。けれど、詞は優等生のポジションを捨ててまで徹底的に論破する方法を取った。優等生のポジションを捨てるということは、当然詞にとってデメリットでしかない。

でも、詞はあえてそれを選んだんだ。……私のため、だけに。

「そっか……私、今すごく嬉しいかも」

「あたしの自己満足でやった行動なのには？」

「詞の自己満足だからこそ、だよ」

詞にとっての自己満足の対象が、私に向いているというだけで……私は、嬉しいんだ。

……詞の性格は確かに苦手なんだけど、詞という人間自体に私はもうべた惚れなのかもしれない。

「……純奈って、やっぱり変」

「詞も変だつて」

「ふふつ、言われてみれば……あたし以上の変人、中々見つからないわよね」

「うん。一生かけても、詞より変な人は見つからないと思う」

「ちよつと、それは酷くないかしら？」

「あはは……ごめんごめん……」

詞に対してこういう冗談を面と向かって言えるの、もはや私だけなんじゃないかな。

私の心の中にある形のない強固な何か、詞の心をしつかりと繋ぎ止めて離さない。

……詞と2人きりにいる時、私はそんな感じがしている。

「それで、話し合いはどうだった？」

「ええ。おかげさまで、手応えアリね」

「おかげさま？」

引つかかる言い方をする詞。おかげさま、つて？

「実はアレ、結構いい練習台になったのよね。あたしはこういうこと何回かしてきたけれど、今回はあただしだけの問題じゃなくて学校全体の問題だったから……不安がなかったわけじゃないの」

こういうことを何回かしてきたって……つくづく詞の過去が気になる。でも、本人からは直接聞けるわけがない。きつと壮絶だろうから。

「そ、そうなんだ」

「だから、アレでちよつと肩慣らし出来て。……純奈には悪い言い方かもしれないけれど」

「ううん、気にしてないし、それに……本当に悪いのはあの3人だし」

「ええ、その通りね」

詞は一つ息をつき、椅子を適当に出して座った。私は詞の前ではなく、隣に座る。だって、隣の方が距離が近いから。

「にしても、やっぱりあたしの思ったとおり。本当に意地汚い人だったわ」

「え？　つまり私達からツリーを取り上げた本当の目的って……」

「権力の誇示よ、結局。市が協賛していることをアピールする目的で、ツリーの企画を市の主導にし、あたし達には出来ないクオリティでツリーの飾り付けを行う予定だったらしいわ」

「そ、そうだったんだ……」

私が詞が過労で倒れたときに、お見舞いに行った時を思い出す。あの時梨穂子と選んだチョコチップクッキーを渡したときに、こういうものはお金とかじゃなくて気持ちだって、詞は言ってくれていた。

まさかその逆の具体例を目の当たりにするなんて、夢にも思わなかったけど。

「まあ、欲に駆られた人間は動かしやすいから、嵌めるのは楽だったのだけれど」

「な、何したの……?」

「それは……純奈には、こっそり教えてあげるわ」

詞は隣に座っていた私に耳打ちして、その手法を教えてくれた。……非常に鮮やかで、そして非常に恐ろしく思った。

しかも、こんなことまでやってのけるなんて……つくづく、この人は化け物だ。

「……やっぱり、詞は化け物だよ。ツリーの件を生徒主導に戻すだけじゃなく、担当の汚職まで暴くなんて」

「その人についてちよつと調べたら、大当たりを引いてしまつてね。せつかくだから、真正銘の正義の味方にもなつてあげようかなつて思つて」

「あはは……な、なるほど……」

正義の味方になるというのは、多分あの時の3人を皮肉つて言っているんだろう。私は乾いた笑いを返すのが精一杯だった。

本当に、詞が私の味方で良かった。

「でもね、全部が全部上手くいったわけではないの。不本意だけどね」

「え……?」

詞は、少し寂しそうな笑みを浮かべた。日没寸前の日の光が詞の顔を浮かび上がらせ

る。私はそれが綺麗だと思ったけれど、同時に……何か、物悲しさを感じてしまった。詞の唇が、小さく動く。

「あたし、委員長解任されちゃった」

「え!?! 何で……!?!」

もはや詞以外考えられないと思っていた創設祭実行委員長の、突然の解任。詞はちよつと笑って言っていたけれど、私が驚かないはずがない。

「ツリーの件を生徒主導に戻す過程で、どうしても校長先生をこちら側に引き込んで根回しさせることが必要だったのよ。で、それに必要な経費があたしの委員長解任だったってわけ」

「そ、そんな……もう少し上手くやれる方法は……」

「あればよかったのよね。でも……生徒主導に戻せるのであれば、あたしの犠牲くらい大したことないわ。それに……」

詞は私をじつと見つめた。私は何かを感じ、真剣になる。

「あたしの夢は、純奈なら引き継いでくれるって信じているから」

「え…………？」

何を…………言ってるんだ…………？ 突然の出来事が畳み掛けてきて、私は頭が真っ白になった。

夢を引き継ぐつてことは、つまり…………委員長をやつて、ということだよね？

「今日、委員長代理やつてくれたでしょ？」

「うん…………すごく大変だったけど…………」

「話し合いが終わつた後に高橋先生から、『絢辻さんがいないから予定が遅れることを覚悟していたけれど、橘さんがよく働いてくれたおかげで予定通りに仕事が進んでい』つて言つてたのよ」

てつきり、詞に比べて全くうまく行つてないものだから、他の人には申し訳ない気持ちもあつただけど…………まさか、先生がこうやつて評価してくれるなんて。

まあ、普段こういう役割をしない私にしては、みたいな感じではありそうだけれど。

「あ、あれは、その…………他の子も、私を手伝つてくれたおかげで」

「それが大事なの」

「え？ 他の子が手伝つたつて何が？」

何でも一人で出来てしまう詞と、助けてもらわないと出来ない私。どちらが仕事が出



来るかと言ったら火を見るより明らかだった。

けれど、詞はそれが委員長にとって大事だと言う。

「ええ。あたしは見ての通り何でも出来てしまうから、みんなあたしに頼ってしまう。でも、あたしだって人間なの。もしあたしが行き詰まるなんてことが万が一あったとしても……誰も助けてくれないわ、きつと」

「私は助けるよ」

「純奈は助けてくれると信じてるから安心して。でも、純奈以外は助けてくれない。それってやっぱり、組織として脆いと思うのよ」

「まあ、確かに……」

「それに今日の件で、他の人はあたしにますます近づきにくくなると思う。もし仮にこのまま委員長を続けていたとしても……あたしに怒られると何されるかたまったものじゃない、だから仕事を頑張ろう、みたいな思考になると思うの」

ああ、そうだ、そうなるだろうな。……詞が言っていることは確かに合っているだろうし、予想できることだけれど……でも、やっぱり、寂しいというか……悲しいというか。

詞が自分のポジションを的確に把握しているのが、何よりすごく私は苦しかった。

「創設祭は楽しい行事でしょ？　楽しい行事を作る原動力は、前向きでないといけない

と思う。だから、委員長にいるだけで後ろ向きの思考にさせるあたしは……ここで委員長を降りるべきなのよ」

「詞……」

詞は笑っていた。笑っていたけれど……その笑みには、憂いも含んでいて。私は胸の奥が、じわじわと締められるような、そんな痛みが湧いてくるような感じがした。

けれど……かけるべき言葉は、全く見当たらなかった。詞の言っていることに、反論なんて出来なかった。

「今の純奈なら、きつと出来る。もし、きつかったり、辛かったりしたらあたしが相談に乗る。この、絢辻詞がね」

なら……せめて、詞の願いを聞く。私は胸に手を当て、少し目を閉じて……詞の目を見て、覚悟を決めた。

「……分かった。委員長、引き受けるよ」

口に出した途端、私は責任という重荷を背負った。けれど……それが、辛く苦しいものではなく、むしろ意欲が湧いて……やってやる、という気持ちになった。

「ありがとう。純奈が引き継いでくれて、本当に良かった」

詞は心底ほつとしたような表情を私に向けた。こういう時、詞は表情豊かだ。捻じくられてひねくれている詞だけれど、本質はすごく真つ直ぐで嘘なんてつかない。

私はそんな詞に惹かれ続けている。全部を好きになるには、まだ時間がかかるかもしれないけれど。

「詞。サポート、よろしくね」

「ええ。スパルタ指導、してあげようかしら」

「それは勘弁かなー……」

「冗談よ。元々あたしの仕事だったのだから、気軽に相談しなさい？」

「分かった。頼りにさせてもらうね、詞」

「ふふつ。でも、委員長はもう純奈だから……頼りになる委員長になってちようだいね

？」

「……うん、頑張るよ」

確かに、場の雰囲気の流れに流されちゃったのかもしれない。詞に言葉巧みに誘導されてしまったかもしれない。けれど……もう、やるしかないんだ。

それに……私には詞が、あの絢辻詞がついているんだから……！

## BADエピソード：逆転する立場

詞が創設祭実行委員長を降り、代わりに私が実行委員長になった。その事実が伝わると、実行委員のみんなは最初こそ驚いていたけれど……私が少しずつ委員長の仕事に慣れていくにつれて、私のことを委員長として受け入れてくれるようになっていった。

当然、詞みたいは何でも出来る、完璧な委員長じゃない。けれど、私が委員長になったことを聞いた柵町や梨穂子が創設祭の準備を積極的に手伝うようになってくれたのが非常に大きくて。特に柵町は多くの友人たちを引っさげて協力してくれるので、結果的に人手が増え、創設祭の準備は詞が委員長の時よりも捗るようになった。

一方の詞は、まるで私とは対照的で……作業のやり方等を聞かれているのだろうか、他の実行委員の子にしばしば話しかけられはするのだけれど、一人で黙々と作業する姿が目立つようになっていった。

私はそんな詞の姿を見るたびに、胸が締め付けられるような感覚を覚えた。まるで私、詞の立ち位置を奪ってしまったかのような……そんな罪悪感が、私を襲う。

しかも、当の詞はというと……

「それでいいの。あたしは、本来あたしのいるべき位置に落ち着いただけよ」

……なんて、詞らしくない達観したセリフを吐いて。それに……虚構ではない、本当の詞なのに、なぜだか仮面を被っているような……そんな気がした。

委員長となり、周りに人が集まるようになった私。

委員長を降り、孤立するようになった詞。

……いつの間にか、立場は逆転して、詞との距離も広がっていく。

詞との時間も取りたいけれども、委員長の仕事忙しい上、増えた人間関係を維持するのにも時間を取られてしまう。もはや、私の時間など全く無いといっても良い状況。

それに詞は、もう今の状況を完全に受け入れてしまっていて。他の子に私が取られるのを、遠目でずっと見ているような……ずっと、そんな感じだった。

私はその子の誘いを断ればいいんだけど、もし断ったとして、空気が悪くなってしまうとしたら……そう考えてしまうと、実行委員長としてそうするわけにはいかなかった。

私って……一体、何のために委員長を引き受けたんだろう……。

そんなモヤモヤとした思いと裏腹に、創設祭の準備はすごくスムーズに進んでいて。

そして、気がつけば創設祭の当日を迎え——創設祭は、大成功を収めた。

たくさん仲間が出来て、たくさん称賛を浴びて。私は、実行委員長としての最高の役割を果たした。

今までの自分最優先の私から、人のために頑張る私へ。上がりすぎた名声は、私なんかじゃ逆らえない激流となつて……一般的には『成功』と呼ばれるルートへいざなつていく。

——※——

翌年。生徒会長になつた私は、毎日学校のために奔走している。

夢小説を書いていた手帳は、びっしり埋まつたスケジュール帳になつていて。

生徒、先生、多くの人に慕われ、頼られて……私は、期待という圧力に押しつぶされ

ながら優等生を必死で演じている。

けれど……私の隣にいた詞は、昨年クラスの中心だった詞は……もはや、ただのいち生徒でしかなくなつて。

詞の周りには誰も寄り付かず、誰も関わりとうとしない。私は詞のクラスとは別々になり、もはや二人の時間を作ることも難しくなつていった。

そんな——そんな、ある日。私は、廊下でぼつたりと詞に出くわす。やっと見つけた、詞との時間。しかし、詞は……

「あ……詞！ 会いたかった」

「橘さん」

……たちばな、さん……？ 私は、嫌な予感がした。

「……詞……？」

「ごめんなさい……あたしに近づかないで」

「……え……？」

「あたしに近寄ると、あなたの評価が下がるから」

そう言って、詞は私の横を通り過ぎていった。そして……。

「……橘さんが頑張っているのを遠くから見ているのが、あたしの幸せだから。それじゃあね」

……そんな一言と、かすかな薫りを残して……詞は、行ってしまった。私は、立ち尽くす他なかった。

「橘！ 悪い、頼み事があるんだけど……」

「……は、はいっ。何でしょう」

詞を呼び止める時間もなく、私は先生に呼び止められて学校のために働く。

きつとこの先……大学に行っても、社会人になっても……私は、人のために頑張りを続ける。

みんなの期待に、私はひたすら応え続けなければいけない。

だって私はもう、そういう生き方しか出来ないし、そうやって生きることしか残されていけないのだから。

そして、私の献身的な活躍が……世界のどこかにいる詞にとって、幸せであることを



信じて。

『橘さんが頑張っているのを遠くから見ているのが、あたしの幸せだから』

## 番外：委員長のお仕事

詞が創設祭実行委員長を降り、代わりに私が実行委員長に就任した初日。私はその日、創設祭関連の手続きの窓口にならなければならなかったため、特別教室に向かった。そこには……

「……詞って、委員辞めたんじゃないの？」

「辞めたけれど、ボランティアならいいでしょ？」

「いや、まあ勝手に思っていた詞が普通にいた。しかも、他に人がいるにもかかわらずどうやら私の苦手な方の詞だ。」

「どうやら、作業を裏で進めていたみたいだ。もちろん、一人で。」

「いや、まあそうだけど。……というか、もう隠さなくてもいいの？」

「今更でしょ。あたしはもう、何をどう取り繕っても一人ぼっちだから」

「それは……」

「ううん、あたしはもう一人だけ。まあ、一応まだ接する人によつてモードは変えるけど……ああほら、委員長さんに仕事が出来たみたいよ」

「そう言う、詞は教室の入り口を指す。そこには確かに人影があった。……私は詞に

対してもつと言いたいことがあつたけれども、仕事の方をこなさなければならぬ。  
「えつと、手続きしたいつて人は……」

私はその人影が見覚えのあるものだったことに少し安心感を覚えた。

「あ、梨穂子じゃん」

「あれ？ 純ちゃん……何でいるの？」

ぽかんとしている梨穂子。一応梨穂子も私が創設祭実行委員になつたことは伝えて  
いる。

けれど、当然委員長にまでなつたことは伝わってない。……ふふ、驚くはず。

「実は私、今日から委員長になりました」

「ええ〜っ!? ウソでしょ〜っ!?」

私が驚くだろうつて思つた言動を仕掛けると、梨穂子はちゃんと私のイメージ通りに  
驚いてくれる。つくづく、一緒にいて楽しいし、元気になる子。

「ホントのホント。だから、創設祭のことなら私にどうぞお任せを」

「う、う〜ん……純ちゃんにそんな仕事が出来るかなあ……」

「まっつて梨穂子それ何気に酷くない？」

「まあいいや」

「良くない」

……その後がイメージ通りになるとは限らないが。

「えつとね、茶道部の出し物で必要なものの書類を出したいんだけど……」

とはいえ、委員長になって一発目の仕事私がよく知っている梨穂子からの申請なら好都合だ。私は心底ほつとして……。

「備品の申請書かな……はい、これ」

「えつと、これどうやって書けばいいのかな」

ほつとして……。

「見せて？ ……ここに名前、団体名、企画名。あと、ここに使いたい備品を書いてくれれば大丈夫」

「……んー……」

ほつと……して……？

「……何がいるんだろう？」

「あつ……」

※

「何突つ伏してんの純奈、まだ書類を一つ受け付けただけよ？」

「詞……梨穂子に体力全部食われた……」

ほっとできませんでしたむしろ絶望でした。

梨穂子の理解力があまりにも壊滅している上、ド天然だから突拍子もないアイデアが突然出てきたりしてもう辛いなの。もし今の詞が梨穂子の対応をしてたら詞がブチ切れる未来が容易に想像出来る。

「あれ？ 何でねえねがそんなところいんの？」

そこに考えうる上で最悪の追い討ち。私の苦手な妹、美也も来るのは聞いてないよ。

「何でって……創設祭実行委員長になったから」

「えーっ!! 学校ぐるみでみゃーにドッキリ仕掛けてるの!？」

「仕掛けてるわけあるかって……で？ 用事は？」

「えっと、これ！ これ欲しいんだけど学校にある？」

備品の申請書。梨穂子と違ってちゃんと必要事項は書くべき場所に書いている。で、問題のその中身だけ……。

「……バニースーツなんて学校にあるわけあるかーっ!!」

—※—

「……………詞、私委員長辞める」

「馬鹿言つてんじゃないわよ、たった2つ書類を受けただけじゃない」

委員長つて、すごく大変なんですね……。

「じゃあ詞、さっきの2人の応対出来る？」

「それは……なるべく勘弁願いたいわね」

「でしょ」

と、うだつている間にまたしても来客が。

「えっと……ここでもいいのかしら？」

「ここでもいいですよー!!」

「あ……もしかして、森島先輩ですか？」

「ええ、そうよ」

「それと……何でまた美也がいるんだ」

「に……し……し……し……」

創設祭で行われるミスサンタコンテストを2連覇している、言わば学校のマドンナ、森島はるか先輩。私は初対面だけど、名前と外見は知っている。何となく、雰囲気からハーフっぽいなって私は感じている。目の色も碧眼だし、肌の色もどことなく赤っぽいし、背も高めでスタイルいいし……。

……と、それに見事に懐柔されている美也。

で、確か……森島先輩って、ド天然って噂が……

「えっと……それで、森島先輩。どういう用事で来たのですか？」

「わおー！ そうだったね」

そうだったね、って……前途多難だ……。

「えっとね。美也ちゃんが可愛いから、ミスサンタコンテストと一緒に出ようって言ってるんだけど……」

「絶対対嫌です」

「……見ての通り。だから、こう、最後の一押しをしてもらいたくなって！」

「えー……」

最悪だ……最悪だ……。非常に、非常に気乗りしない上に面倒臭いぞ……。

「ねえねが何を言ってもダメだからね。みゃー、ここだけは譲れないよ」

「別に私は美也のサンタ姿なんてどうでもいい……としかねえねと呼ぶな」

何で得意げにふんぞり返るんだ……。

「わお！ もしかしてキミ、美也ちゃんのお姉さん？」

あつ……森島先輩に食いつかれた。

「え、はい。美也の姉の橘純奈です。美也が迷惑かけてないといいんですけど」

先輩だし、初対面だし、表面だけでもちちゃんと挨拶はしておかないと。

「ううん、むしろ可愛くて可愛くて！」

「うにゃっ！」

森島先輩は美也を片手で抱き寄せた。美也がまるで動くぬいぐるみのような扱いを受けている……。

「なんというか、小動物って感じで！」

「さ、さいですか……あはは……」

美也を我が物にしてすごく楽しそうな森島先輩に私は呆れ笑いしか出てこない。

「で、どうすれば……詞？ これ、何？」

詞が横から何か、携帯ゲーム機？ を2つ、私に渡してきた。

「テトリスよ」

「え？ 何でテトリス？」

いやほんとに何でテトリスなの？ というか学校に持ってきて大丈夫な物なの？



しかも何で丁寧に対戦することを見越して2台あるの？

「これで妹さんに勝てば、きつと納得してもらえるから」

「一応私、多分美也には楽勝出来ると思うんだけど……果たしてそれで上手くいくものなのかな……」

「絢辻詞のアドバイスよ？ 信じられないかしら？」

「……まあ、やってみるよ」

さすがの詞アドバイスでもこれは内心全く信じてないですけど。とりあえず、本当にとりあえず、美也にテトリスのゲーム機を見せる。

一応、私は美也より圧倒的に強い……というか多分学校一強いと自負できるくらいの実力があるので、勝てるっちゃ勝てるのだけど……。

「美也。これ」

「えつと……え？ テトリス？ ……嫌だよ、ねえねには勝てないもしみやーが負けたらコンテストに出ろーってことでしょ！」

「何でもいいけどねえねって呼ぶな」

予想通りの反応でした。まあ、負けると分かっている勝負にわざわざ挑むわけないよね。しかも、勝っても自分に大したメリットないし。

「……詞。全力で拒否されたんだけど」

「何よ。まだ一人、いるじゃない」

「え？ ……え、もしかして森島先輩？ でも、あの子結構強いよ……う？」

「勝つても負けてもいいから納得させるのが先決でしょ」

「あ、そっか」

なるほど。森島先輩を使うのか、さすが詞。そして、詞が言った通りに、こちらが何か働きかけるまでもなく……。

「ねえ、美也ちゃん？」

「な、なんですか？ 森島先輩からお姉ちゃんと勝負しろーって言っても、私は嫌ですからね？」

「ううん。美也ちゃんと勝負するのは、この私よ？」

森島先輩は私からテトリスのゲーム機をひよいと取り上げて、ウインクして美也に挑戦状を叩きつけた。

「森島先輩がですか？ にしし、いいですよ。言っておきますけど、みゃーはお姉ちゃんに鍛えられているので結構強いですから」

「ほんと？ じゃあ正々堂々、勝負しましょう？」

「はい！ 手加減しませんよー！」

森島先輩に勝負を挑まれた美也は、ノリノリでテトリスの対戦を受けて立った。

「……ほらね？」

「さすが詞」

さすがだけど……そもそも何でテトリスのゲーム機2台持つてるんですか詞さん。

—※—

「テトリス！」

「みやっ!?　ちよ、ちよっとタンマンマッ！」

「ごめんね、私も負けられないの!　1列消して、開通させてから……もう一発、テトリス！」

「……うにやああああ!!　みゃーが負けるなんて……」

「私の勝ちね!　美也ちゃんのお邪魔ブロック、利用させてもらったわよ?」

数分後、決着がついた。私の予想に反して、勝ったのは森島先輩だった。

「え……森島先輩、強いんだ……」

「あたしも前に勝負したことあるんだけど、全然勝負にならなかったレベルで強かったわ」

「え?　そうなの?　もしかして、それを知って……?」

「ええ」

詞、一体どこで森島先輩と接触してたんだろ……しかも、テトリスと一緒にやるなんて、一体どういうシチュエーションでそうなるんだろう。

テトリスの謎はますます気になるけれど、細かいことは気にするなってやつなんだろ。うん。

「にしても、強かったですね……何でそんなに強いんですか？」

「うーんと……この前ゲーセンにひびきちちゃんと一緒に行ったときね？」

「ひびきちちゃん……あつ、水泳部の部長の塚原先輩ですね？」

「ざつつらいと！ それで、偶然見つけたテトリスのゲームに、お猿さんがいて。それが可愛くって、ひびきちちゃんと一緒にテトリスやりこんじやつたんだ」

「へー……それで強かったんですね」

「というか森島先輩もゲームセンター行くんだ。……まあ、森島先輩も女子高生だからむしろ普通か。」

「だけど……まさか、ゲーセンのテトリスの経験だけで、美也を倒してしまうなんて……もしかして森島先輩、かなりの実力者では。しかもやる動機がテトリスではなく、そのゲーム内演出の猿だというから驚き……。」

「……何か、この人あたし苦手かも」

「え？」

「あの人……私の姉と、同じ匂いがする」

「あー……言われてみれば、詞のお姉さんそんな感じだった気がする」

詞のお姉さん、本当に血が繋がってるのかってくらいに、詞と正反対の性格をしているもんなあ……超ド天然で、詞の思いにも全く気づいてないし言っただとしても気づかないままであるし。

「というわけで……美也ちゃん！ 約束は約束よ？ ミスサンタコンテスト、出場してね？」

「うっ……で、でも衣装は……あっ」

美也は何か思いついたようだ。その顔は……多分、人を巻き込もうとしている顔だ……。

「森島先輩！ いいこと思いついたので、ちよつと友達を呼びに行ってきます！」

「えっ？ ちよつと、美也ちゃん？ どこ行っちゃうの？」

「すぐに戻ってくるので！ それじゃ！」

そして、美也は嵐のように去っていった……。

「……何か、うちの妹がごめんなさい」

「ううん、全然いいわよ。あれが美也ちゃんの良いところの一つなんだから」

そっか。美也は愛されて育っているから、その愛を常時ずっと周りの人に振りまき続けているんだ。だから、あんなちよっと困ったところも、まるで愛嬌のある行動に思えてしまうんだろう。

「……純奈？ 難しい顔してどうしたの？」

「あつ、詞……うん。ちよっと、考え事」

「そっか。お互い、大変ね」

「ええ……そうね」

私も詞も、身内に劣等感を抱いている。詞の場合は家の事情がもつと重そうではあるのだけど。

——※——

「橘美也。ただ今戻りましたーっ！」

美也が帰ってくるのは本当にあつという間だった。しかも、2人連れて。

「あつ……」

私はこの2人、見覚えがある。

「あ……お久しぶりです、お姉さん」

「ひ、久しぶり、です……」

美也に振り回されているからだろう、苦笑いしながら挨拶するショートヘアの子。そして、おどおどしているツインテールの子。たしか……。

「久しぶり。えつと……七咲ななせさんと、中多なかたさん、だったっけ」

「はい。七咲逢あいです。美也のクラスメイトの」

「同じく、中多紗江さえ、です……」

それはともかく。

「でね、ねえねー！」

「ねえねと呼ぶな」

「こほんっ。……お姉ちゃん！ この2人と一緒にサンタコンテストに出る、って言うのは出来る？」

「えっ!？」

別に巻き込まなくてもいいのに……なんて思いながら、彼女に巻き込まれた二人に同情の目を向ける。まあ、美也に巻き込まれたら最後、あいつは竜巻のように捕まえて振り回して、かつ離さないからなあ……。

美也を説得することも考えたけど、面倒くさいことこの上ないので、とりあえず前委員長で昨年も創設祭に関わっている人物である詞に聞いてみる。

「……詞。それって、大丈夫なの？」

「もう委員長は純奈よ。純奈が考えて決めていいのよ？」

「あ、そっか……ん……ん……」

そういうええそうだった。私は委員長だから、強い権利を持っているんだった。とはいへ、いきなりそれを私だけで判断するのは中々に難しい。

「森島先輩」

「ん？ なあに？」

だから、ミスサンタコンテストをよく知るこの人の意見を聞いてみることにする。

「森島先輩は、ミスサンタコンテストにチームで出る、っていうのはどう思います？」

「それで可愛い子がたくさん見れるなら良し！」

返ってきたのは単純明快なものだった。……何だろう。すごく納得してしまった私  
がいる。

「……美也。委員長である私が許可する」

納得した結果、私は許可してしまった。森島先輩パワー恐るべし。

「やったー！ やったよ紗江ちゃん！ 一緒にミスサンタコンテスト出れるよ！」

「え、えええー……!!？」

「もちろん、逢ちゃんも一緒！」



「えっ、私も!？」

「だって、逢ちゃんだけ出ないのはおかしいでしょ？」

……彼女に巻き込まれた2人には申し訳ないけど。

「な、なんで私が出る前提になってるの……?」

「引つ込み思案を治す特訓だよ! 確かに劇も特訓の一環だけど、ミスサンタコンテス  
トとなれば学校中が注目する一大イベント! そこで皆の注目を浴びれば、きつと……  
!」

そういえば前に体育館を借りることをお願いされたときも、引つ込み思案を治す特訓  
だ、とか言ってたっけ。

なるほど、首謀者は美也か……納得した。

「う、うううう……私、変にならない、かな?」

とはいえ、今回の特訓はいくら何でもスケールが違う。当然中多さんは萎縮してい  
る。かわいそうに。

「ううん、そんなことないわ」

「えっ? 森島先輩……?」

そんな中多さんを見かねて、森島先輩が声を掛ける。中多さんは驚いた顔をして、森  
島先輩の方を見た。

「コンテストに出る子は、舞台に立った瞬間誰だってキラキラ輝くの。普段あんまり目立たない子も、コンテストに出たら『あれ、あの子あんなに可愛いんだ』ってみんな驚いていたわ。……だから、もしキミが舞台に立っても全然変じやないわよ？」

「そ、そうですか……？」

さすがミスサンタコンテストを2連覇した学園のマドンナ。説得力が段違い。しかもそれでいて、決して自分の成績をおごらない。

「うん！ それにキミ、普段も可愛いから自信持つて」

そう言うと、森島先輩は中多さんに向けてウインクした。

「は……はっ、はい！ 森島先輩、ありがとうございます……！」

中多さんはちよつと顔が赤くなっている気がする。……そりやそうだ、私も森島先輩にウインクされたらああなると思う……。

「にししし。良かったね、紗江ちゃん！」

「う、うん。嬉しかったし、ちよつとドキドキしちゃった……」

「森島先輩、綺麗だからね……」

すつかり縮こまってしまった中多さんを、美也と七咲さんがフォローする。

「というこど！ 紗江ちゃんと逢ちゃんと美也でサンタコンテスト出ることにしたから、書類お願い！」

「あ、やっぱり私も出るんだ……」

……どうやら美也はフォローではなく単に巻き込みただけだったようだ。私は一応、2人に改めて本当に出るのかどうかを聞いてみることにする。

「はいはい、じゃあ準備するけど……七咲さんに中多さん。2人とも、本当に大丈夫？」  
まずはじめに答えたのは七咲さん。

「私は、中多さんが出るのなら出ますけど……中多さん、無理しなくてもいいんだよ」

七咲さんは中多さん次第のようだ。それにしても、七咲さんは美也と同じ年とは思えないくらいに落ち着いたいい子だと思う。あいつも少しは見習って、落ち着きというものを覚えたらしいのに……。

「ううん、平気。せっかく森島先輩にあんなこと言われたんだもん……私は、森島先輩の言葉を信じてみたい」

中多さんは、どうやらミスサンタコンテストに出る意志を固めてしまったようだ。さすが森島先輩だ、と思ったのと同時に、中多さんも見た目はおどおどしているけれど……多分、やるときはやる芯のしつかりしたい子だと思う。

自分からミスサンタコンテストに出場する、って言う子が、私にはもう引つ込み思案には思えないんだけどな。

「そっか。じゃあ……私も、出ますね」

やれやれ、仕方ないな、って感じの苦笑を浮かべて、七咲さんも出場の意志を示した。  
……七咲さんが何だか保護者のように思えてきた。

私は2人の言葉に頷きながら、巻き込んだ元凶の方を見る。

「分かった。……美也」

「なあに、ねえね？」

「ねえねって言うな。……せつかく巻き込んだんだから、2人が後悔しないように全力で頑張って」

「……言われなくてもっ！」

……じゃないと、2人がかわいそうだからね。別に美也はどうでもいい。

——※——

「ふー……お疲れ様、詞。何だかんだでまだ、詞の力が必要かもしれない……」

その後も色々と手続きやら、書類整理やら、作業の手伝い及び進行状況の把握やら、とにかくたくさん働いた。もちろん、詞を始めとした友人たちに手伝ってもらいながら、  
だけど……。

「お疲れ様、純奈。初めての委員長にしては、中々悪くなかったわよ？」

「え……そう？　ありがとう」

何か色々言われるかもしれないと思っていたので、私はちよつと拍子抜けした。

「何よ。その顔、何か言われると思ってた顔でしょ」

「ま、まあ……だって、詞に比べたら全然働けていないし……」

「あたしはあたし、純奈は純奈よ。純奈が委員長に代わっても、皆の空気がいい感じみた

いだからそれでいいのよ」

「……そつか。ありがと」

詞は人のことをよく見ている。私には私の不器用なやり方があることも、詞は知って  
くれている。

私は小さな嬉しさを抱きしめながら、改めて今日もらった手続きの用紙を整理する。  
すると、美也が残したミスサンタコンテストの用紙に、何か違和感を感じた。

「ん？　これ、一枚重なってる……」

「純奈？　……え」

重なった用紙をずらして、2枚に分ける。1枚は美也達3人の応募用紙。そしてもう  
1枚は……。

「何で……何で私の分まで勝手に応募してるんだよおお!!」

勝手に私の名前が書かれていた。よし、帰ったらあいつの部屋に怒鳴り込みに行く。でも今は、とにかくこの用紙をなかったことにしなければならぬ。

「今すぐ、今すぐ破り……あれ？ 紙は？」

「(ト)よ？ ふふっ」

いつの間にか紙は詞の手元に渡っていた。上で用紙をひらひらとはためかせて見せつける詞。

「詞っ、もしかしてお前裏切るつもりか……！」

「だって、純奈のサンタ姿見たいから？」

「えええ……」

「もし応募用紙を破ったら、あたしの力であなたを学校にいられなくさせてあげる」

汚い、さすが詞汚い。私は諦めざるを得なかった。

「そりゃないよ詞あ……」

「いいじゃない。委員長自らミスサンタコンテストに出場するなんて」

勝ち誇ったような笑みを浮かべやがって。……こうなったら。

「……じゃあ私も勝手に書くね」

「え、あ、あたしは別に」

「委員長権限ってことで」

「ちよ、ちよっと!」

今、私は創設祭の実行委員長になって一番良かったと思える瞬間を味わっている。あの、絢辻詞を、ミスサンタコンテストに強制出場させることが出来るという、まるで夢のような特権を発動しているのだ。

……まあ、でもそれだとちよっと詞が不憫なので。

「それとも……2人で一緒に出る?」

サンタ衣装、二人でやれば怖くない。ってね。

「何であんた、いきなりノリノリになるのよ……」

「詞のサンタ姿見たいから?」

「あーもう……」

詞って、強そうに見えるけど実はそんなに強くない。こちらが押せば、案外折れてくれることもままある。

「まあ、あなただけやるっていうのは不平等だし……」

「おー、話が分かる」

ほらね?!

「特別よ特別! その、純奈に委員長を押し付けた借りもあるから……」

「それは大丈夫。委員長を引き受けるって言ったのは私だから」

詞はちよつと照れ隠し気味に言う。そういうところ、素直じゃないけれど……

「……それに、純奈と一緒に羽目を外して、忘れられない思い出を作るのも悪くない、かも」

……こういうところは、詞は素直なんだ。そんなこと言うのは、多分、私にだけ。

「いいね、それ。青春って感じする」

「ふふっ。あたし達……高校生だものね」

「あ、そっか」

「何を今更」

私と詞は顔を合わせて笑いあった。結局私は美也に上手いこと乗せられた、って感じになるんだけど……こういうきっかけをもらったって言う意味では悪くない、かな。

仕方ない、あいつの部屋に怒鳴り込みに行くのはやめてあげよう。面倒だし。



## ★証明

詞が創設祭実行委員長を降り、代わりに私が実行委員長になった。そのことはあつという間に全校に伝わって、衝撃を与えた。

「絢辻さんが降りるのも中々だけど、まさかその代わりがあんたとはねー……」

教室の休み時間、棚町が早速その話を伝える。私は一躍、時の人になったらしかった。「詞に頼まれたら断れないよ」

「そうそう。何であんたに頼んだんだろう」

「うん、よくよく考えると、他にいっぱい適任はいると思う」

例えば、梨穂子のクラスメイトの黒沢さんとか。何でも市議会議員の娘らしく、周りを引つ張る能力は十分すぎる。実際詞が委員長を降りた際に真っ先に候補に上がったのが黒沢さんだし。

それを詞は無視して、私を代理からの委員長に推薦した。身内びいき、なのかな……いや、でも詞は多分そういうことしないだろうし……。

「まあ……詞にしか分かんないと思う。詞にしか見えないものが、きっとあるんだと思う」

「それもそだね」

まあ、そんなことを気にしたって今更な感じするし。

「……ところでき、橘」

「ん？」

「委員長になったんでしょ？ だったら、あたしにも本格的に手伝わせてよ」

棚町がずいっとこちらに乗り出してきた。

「いいの棚町？ ファミレスのバイトもあるんでしょ？」

「もちろんシフトあるときはバイト優先するけどね。あんたが頑張ってるって、見てあげる」

「ありがとう……色々大変だったから、人が増えるっていうのは単純に助かるよ」

いくら中々素直になりにくい棚町だけど、今回は素直に感謝。委員長になることで皆との距離が遠くなるだけだと思っていたけれど、そんなことは全くなかったらしい。

※

棚町の援軍は中々心強い戦力だった。棚町は交流関係が非常に広く、男女関係なく仲が良い友達がたくさんいた。その友人達を引き連れて手伝いに来てくれたのだ、創設祭

の準備はよりスムーズに進むようになった。

また、地味に詞が作業する側に回ったのも大きい。相変わらず詞は孤立気味ではあるものの、その要領の良さはハッキリ言って異常だった。周りの人に、たった1人でも全く問題ないと言わんばかりの作業効率を見せてつけていた。

そして、委員長になった私はというと……作業の手伝いをしつつ、他の実行委員の話聞いて……しっかりと進行管理も行つて……はつきり言つて、すごく、すごく大変だ。でも、大変そうな私を見かねてサポートしてくれる委員の人もいるし、委員長が何でも出来る詞から何でもは出来ない私に代わつてから、『みんなで創設祭を作り上げる』という気持ちが強まっている……そんな、気がする。

結果からいえば、詞が委員長だった時よりも作業効率は上がっていた。上がったけれど……。

「橘さんすごいよ！ 順調だね」

「いやー、まさか橘にそういう才能があるなんて」

「あ、ありがとう……」

私が詞を、いとも簡単に超えてしまつていいのだろうか……？ 何となく、それが私は心に引つかかつて。でも、何となくのくせして……すごく、突つかかつて、苦しい。まるで、私が詞の全てを奪つてしまったかのような……思い上がりかもしれないけれど

ど、でも私は……そういう罪悪感が、湧き上がってきて。

しかも、そのことで苦しんでいるのが間違いない私だけで。きっと誰も分かってもらえない……。

「……純ちゃん？」

「あ……」

後ろから梨穂子が声を掛けてきた。というか、梨穂子も手伝ってくれていたのか。

「手伝ってくれてたの……？」

「うん。友達から誘われちゃって……あと、純ちゃんが委員長なんだから、私もちよつと頑張ってみようかなって思ってた」

「そっか、ありがと……」

何だろう。梨穂子に話しかけられただけで、私の心がちよつとだけ楽になった気がする。梨穂子には何か、特別な力があるんだと思ってる。

「……で、純ちゃん」

「ん？」

「ちよつと、元気ないみたいだけど……どうしたの？ 委員長のお仕事、大変？」

梨穂子は、こういう負の感情にすごく敏感だった。すぐ見抜いて、聞いてきてくれる。

「ううん、大丈夫。詞の仕事を手伝っていた分、少し慣れてたところがあつたから」

「……そっか」

「……でも、私は素直になりきれなくて隠してしまふ。それがすごく悪い方向に働くことは……『あの時』の1回を除いて、なかったけれど。」

「でも、無理しすぎないでね。純ちゃんも元々、そういう人じゃないでしょ？」

「ま、まあ……そうだけど。でも、頼まれて引き受けたことどもん、最後までやり通すよ」

「……分かった。あ、私このあと茶道部に顔出さないといけないから……」

「うん。創設祭の出し物の準備とか？」

「そうそう。色々先輩たちと決めることがまだあるから……それじゃあね！」

梨穂子はそのまま、茶道部の活動に行ってしまった。去り際に一回私の方を振り向いたけれど、その時の梨穂子の顔が何となく……どう言えばいいのか、分からないんだけど、やっぱり、心に引っかかった、って感じなのかな……。

「……疲れてるのかな、私」

委員長の仕事で疲れて、色々センチメンタルになっているのかもしれない。少し、気分転換に屋上に行つて、夢の世界に浸つてみよう。

私はそうやって、今まで気持ちを切り替えてたんだから。

「橘先輩、この後私達と一緒にお茶でもしませんか？」

「新しい委員長のこと、もっと知りたいって感じで！」

実行委員の後輩2人が私をお茶に誘ってくれた。こういう気分転換もありなのかもしれない。けども……。

「ありがとう。でも……また、今度にしてもらってもいいかな」

「えー、何ですか?」

「……まだ、お仕事が残ってて。ごめんね?」

「あ、そうなんですか……じゃあ、頑張って下さいね!」

「また今度、誘いますね!」

今の私は、何か、こう……もう少し、落ち着きたかった。

……空気を悪くしない断り方を覚えたのは、多分、詞と同じ場所に立って、視野が広くなったから……なのかもしれないかな。

——※——

「……詞?」

屋上に一人きり。そう思っていたけれど、既に先客がいた。冷たい冬の風に吹かれて、詞の黒いロングヘアが美しくたなびく。

私が詞を呼ぶと、少しの間があつてから……私の方を振り向いた。

「純奈。……嫌なこと、あったのかしら?」

詞の表情は……なんとも、言えないものだった。寂しそうにも見えるし、清々しいようにも見える。ごく普通と言われれば、そうとも見えてしまう。

誰にも分かってくれない思い。……この場所で、詞に可言えるかも。ううん、この場所と詞という人物が、私の思いをそのまま口に出させた、といった方が正しいかもしれない。

そもそも詞の前で遠慮なんていららないんだ。私は詞に向かって、心の中のモヤモヤした物を見せた。

「……分からないことがあって」

「委員長の仕事のこと?」

「半分そうで……半分違う、かな」

「曖昧ね……で? 話、聞くわよ? 委員長を頼んだのは、あたしだし」

詞は微笑んで、私の方を向いた。橙色に照らされて、詞の元々綺麗な顔がより綺麗に、儚く私の瞳に映る。

疲れ切った私には、気を抜いてしまうと涙が出てしまうような……そんな幻のような、決して手でつかめないような感覚さえ覚えた。

私は一旦肺の中のモヤモヤとした汚い空気を吐いて、新鮮な屋上の空気、ひんやりと

した冬の乾燥した空気を吸う。冷たさが全身を伝い、心の疲れを冷気がほんの少しだけ押し流す。ほんの少しだけでも、十分だった。

私はふっと、心のチャックを緩めた。そして、口から思いをこぼし始める。

「……今日の準備、すごく順調だったでしょ？」

「そうね。あたしが委員長の時よりも順調だったわね」

「そう。それなの、詞」

「それ……って？」

詞は多分、そこで私が引つかかっているなんて思ってたと思う。詞はちよつと意外そうな顔をして、私の顔をうかがう。

「私が詞以上に仕事が出来ているように見えていること……詞は、どう思ってる？」

まずは、私の気持ちを出す前に、詞の心境を聞いておこう。……詞も詞で、現状が心配だし。

「え？ ……そりゃあ、委員長の推薦が上手く行ったってわけだから、素直に嬉しいわよ？」

「そっか。そう、だよね」

まあ、そりゃそうだろう。黒沢さんというもう一人の有力候補がいた中で選んだ、詞の選択だったんだ。で、その選択が正解以上の大正解だったってことなのだから。



「……純奈は、それが嫌なのかしら」

「……うん」

多分私、表情とか声色に出ている。人を観察するのが得意な詞なら、それくらいすぐに伝わってしまうだろう……詞は私の心情を察してくれた。

「どうしてよ？」

「まるで、詞の居場所を私が奪ったみたいで……」

「大丈夫よ。多分そうなるだろうことも、予想はついていたから」

「詞……」

詞はもう、本当に何も気にしていないようだった。それに詞は私に隠し事はしなないと思ってる。裏の詞を見せたのもそう、手帳の中身を見せたのもそう……でも、隠し事をしないということは、その言葉や態度の裏もなんにもないというわけで。

「それに、あたしはあたしで、もうあたしに合った居場所を見つけているもの」  
「それって……」

「心配しないで。……案外今の立ち位置、あたしには居心地がいいみたいだから」  
今言っていることの全てが、詞の思っていることの全てで。

それ以上も、それ以下もなくって。

……だから、多分、今の詞を否定するのはやっちゃいけないんだと思う。

そんな寂しいこと言わないで、って言いたいけれど……でも、満足してるんだよね。知ってて、それを選んだんだよね……。

……ダメだ。話題を変えよう。詞のことを、もっと知ろう。

そうすれば……私が納得できるものが、ひよつとしたら出てくるかもしれない。

「……ねえ」

「ん？」

「今更な感じあるんだけど……何で詞って、クラス委員もやってるし、行事ごとの委員も積極的に手伝ってるの？」

確かにすぐく今更な質問だった。今まででも聞くタイミングはたくさんあった。けれど、今、それを聞きたいんだ。

もう、何でそれを聞いたのかは分からない。分からないけど……直感とか、そういうもの。

「それは簡単よ。目的があったの」

「目的？」

「そう。社会に認めてもらうっていう目的。……でも、もう今はそんなのどうでも良くなっちゃった」

詞はどこか、遠い空を眺めて寂しそうな笑みを浮かべた。そして、私の方を向いて

……私の目をしつかり見つめた。

「……詞？」

「だって、今のあたしには……純奈。あなたがいるから」

「え……？」

「純奈がいてさえくれれば、それでいい」

心臓の跳ねる音がした。真剣な眼差しで、詞はそう言ってくれた。

……私は、嬉しくもあつた。けれど……詞が壊れそうで、怖くもあつて、それで……。

「……でも」

一旦、拒否をした。

「ううん、あたしがいいと言ったらそれでいいの」

「でも！」

もつと強く、拒否をした。私が弱いからだろう、詞の言ってくれていることが……私には受け入れることができなかつた。

「……何よ」

詞が不満そうにこちらを見る。その続きの言葉は考えていなかったが……詞の今までの立場を思い浮かべたら、私は嫌な未来を見てしまった。

その未来の光景を、私は詞に話す。

「……私が委員長になって、しかも周りには詞より仕事が出来ているように映ってる。そうすると、多分前の詞みたい……人が寄ってくると思う」

「そうね」

「すると……詞と一緒にいられる時間が、消えてしまうかもしれない。詞と私が、離れ離れになるかもしれない」

「……その時は、あたしは素直に引くわ」

「え？」

詞の言葉に、私は耳を疑う。

「あたしは、純奈が活躍しているところが見ればもう、それでいい」

「……詞……？」

それって……。

「たとえ純奈が遠い存在になっても、あたしが社会からも愛されなくなっても……あたしは、それを望むわ」

怖いくらいに、綺麗な笑顔だった。まるで、仮面を被ったみたい……。。

でも……それって。

それって、結局離れ離れになるということ。。

詞を失うということ。。

本音でぶつかり合える、大切な存在を失うということだ。

そして……それを、詞は嫌がるどころか、悪くない、とまで思っている。

「……詞」

「何よ」

「それは、私が、良くない」

私は怒った。本気で怒った。今までにないくらい、本気で怒った。

今の詞の顔は、視界に入れたくない。

あんな綺麗な笑顔、嫌いだ。大嫌いだ。私の知っている詞じゃない。

そんなの……そんなの、私は望んでなんかいないんだ……！

心の中で巻き起こる激情を、しつかり抑えながら、冷静になつて……私は、言葉を一つ一つ選ぶ。部分の詞を肯定し、部分の詞を否定するんだ。

「詞が一人がいい、というのはまだ分かるよ。私だって、望んでそうしてて、実際それが

良かった時期があつたんだから」

「なら、どうして」

「……ごめん、詞。」

私、案外短気だったみたい。

「でも！ 何で私を見捨てるようなこと言うの！」

激情は抑えきれなかった。私は想いを叫んだ。吐き出した。ぶつけた。あつという間に、全部の詞が嫌いになった。

私を手放すのに何も思っていない、むしろそれに肯定的な詞のことが……私は……！  
「あたしは別に純奈を見捨ててなんか——！」

「違う。見捨てた。全部詞の独りよがりで、私の思いなんて何も考えてない！」

「……っ！」

私は……私は、詞のことが……！

「今の詞、私は大嫌いだよ!!」

……多分、校庭まで聞こえるような、そんな大声で……私は、詞を全力で嫌った。

前がぼやけて、詞の表情が見えない。頬に熱いものが伝う感覚がする。多分、私の顔は酷いことになっているだろう。

けれど、私は詞を全力で睨んだ。そうしないと、収まりそうにないから。詞に、私の想いは伝わらないと思つたから。

詞の様子は分からないけれど……少なくとも、ボロボロの私を笑うことはしなかつた。

しばしの沈黙が流れる。冷たい風に当たつて、私は少しずつ冷静になつた。そして、未だ残る衝動の中で、何とか言葉を紡ぐ余裕が出来た。

「詞。……私が委員長を引き受けた理由、分かる？」

「……」

さすがの詞も、言葉を失っているようだった。

詞の顔はまだ、見えない。だって、冷静になるために地面を見ていたから。

「一つ。詞のお願いだったから。もう一つ。詞の立つ場所を見てみたかったから」

……私は顔を上げた。詞の顔を、瞳をまっすぐ見た。

「最後。……詞のために、なりたかつたから」

それは、詞の心に直接、絶対に伝えたいことだったから。

「……だから。そんな、寂しいこと言わないで」

激情は、衝動は、まだ収まらない。私の両目から、とめどなく溢れる。

けれど、その中身はもう……がらりと変わっていて。

『嫌い』を吐き出し尽くしたら、最後に残るのは――

「私は、詞が大好きだから」

——『好き』しかないんだから。

「……」

詞は黙っていた。相変わらず、視界は涙で曇っていて……表情は分からない。

分からないけれど、少なくとも……怒っている、だとか、そういう表情じゃないと感じた。

「……純奈」

「詞……？」

詞はゆらりと、私の方に近寄る。その表情が段々と、はっきりしてきて……多分、詞



も泣いていたんじゃないかな、と思う。

接近してきた詞は、私の両肩に手を置いた。

「……あたしも。やつぱり、純奈を失いたくない……」

詞の声は、すごく弱かった。紛れもない本心からの言葉を、私は聞くことが出来た。「詞。……それを、詞の口から聞きたかった」

私は詞をそのまま抱きしめる。お互いの距離を、出来る限り近くする。

強く、強く。詞の身体が、折れてしまうほどに……強く。詞もそれに応えるように……いや、詞自身の意志で、私の身体を痛いほど強く抱きしめてくれた。

抱擁は、案外長く続かなかった。それでも、30秒くらいは抱きしめていたかもしれないけれど。

「……純奈」

詞は私の両肩に手を置いたまま。私は詞の腰に手を回したままで。至近距離で見ると詞の瞳は潤んでいて……もう、理性だとか、そういうものはどこにもないような感じだった。

無論……私も、だけれど。

詞の唇が動く。

「『証明』を、あたしに頂戴」

「詞……？ えっ、ええっ……!?」

すると、詞は目を閉じて、唇をほんの少しこちらに突き出してきた。

つまるところ……キスしてほしい、ということ。いくら恋愛に疎い私だって、詞の表情は絶対そうとしか見えなかった。

私には女の子に恋をするなんて趣味はない。私は戸惑い、少し身体を引いた。でも、詞の両手は私の肩をしっかりと掴んで離さない。

詞は私が戸惑っているのを感じると、キス待ちの顔をやめて、私を潤んだ瞳でまっすぐ見つめて……心の内を吐き出してくれた。

「あたしでも変だと思ってる！ すごく変なこと、あなたに要求してるんだと思ってる！ ……けれど……あたし、胸が押しつぶされそうで、苦しくて！」

紅色に染まった詞の頬に、涙がはつきりと伝う。夕日に反射して、キラリと光った。詞はもう、なりふり構わずに……私に言葉を、想いをぶつける。

「今、あたしが抱いている気持ち……あたしが知っている言葉だと到底説明出来ないの。でも、純奈に伝えたい。純奈に知ってほしい！ 純奈から、貰いたいもの！ だから……だから！」

詞の言葉の一つ一つが、私の心を揺り動かす。それは虚構でも何でも無い、心からの叫び声。真つ直ぐな欲望。詞の本心。

詞は大きく息を吸い、そして。

「……あたしの唇を奪って……お願い……」

詞は、再び目を閉じた。

私は……私の心の奥まで届いた、詞の叫びに突き動かされて。

「……詞。行くね」

「ん……」

その唇に、そっと口づけをした。

ただ唇と唇を合わせるだけのキス。詞の唇は柔らかくて、気持ちよくて……まるで、詞の本心にそっと触れているかのような、そんな錯覚を覚えて。

そして、私の心臓は……張り裂けそうなくらいに脈を打っていて。そのまま、本当の私が戻ってこないんじゃないか、なんて……そう思ってしまうくらい、おかしくなっていて。

けれど……私も、詞も……色々と異常だったってことは、確かだった。

「……………」

「あ………純奈………」

唇が離れた瞬間、私は思わずくらりと来てぺたんと座り込んでしまった。詞がしゃがんで、心配そうに顔を覗き込む。

「……大丈夫？」

「う、うん………多分、私………変に、なっちゃったのかな………」

私は心からの笑顔で詞に向けた。……何だろう。今の私はすごく開放的で、すごく詞

に甘えたくて、抱きつきたくて、触れ合いたくて……あはは、すっかりあてられちゃったな……。

「変になったのは、あたしもだから」

詞も同じ気持ちだったみたいで、私の隣に座り込んで……身体をびったりと寄せてきた。私は詞を自然な感じで肩を抱いて寄せると、詞は倒れ込んで……私で膝枕をするような格好になった。

ここまで無防備な詞を見るのは当然初めてで……唇の感触の余韻もあって、私の心臓は中々落ち着きそうになかった。

「詞」

「なーに、純奈」

私は詞の髪の毛に指を通し、優しくなでながら詞に話しかける。詞はすっかり甘えきった声で、返事を返してくれた。

……初めて詞の言動が本気で可愛いと思ったかもしれない。こみ上げてきた愛しさを、私は声に変えて。

「大好き」

「……あたしも」

私と詞は、二人にしかならない確かな幸せを感じながら、微笑みあった。

私は未だ、詞との関係が恋愛だとは思っていない。ただ、ちよつと行き過ぎた友情の延長線上にあるものだと、そう思っている。

けれど……今日やったことは、紛れもなく恋をしてないと出来ないことそのもので。

……まあ、恋だとか、友情だとか、そういうのは急いで定義しなくともいいか。

とりあえず、詞という存在が、私にとってすごく大きな存在になったということ。それだけ……しっかりと、心に刻んで。

忘れないようにしないと、ね。

## 友達

創設祭の準備も順調に進んで、私はすっかり実行委員長の仕事が板について。

「柵町さん、桜井さん、ありがとう。助かったわ」

「お安い御用よー！」

「いいえ〜」

唯一心配していた詞の立場も、柵町と梨穂子のおかげでそこまで孤立せずに済んでい  
る。……まあ、裏で私がちよつと頼んでおいた上で、きつかけも作っておいたんだだけ  
ね。

梨穂子も柵町も、私のお願いをすんなり聞いてくれた。こういう友人を持って、私は  
本当に恵まれている。

それに……柵町なんかは詞と結構相性いいんじゃないかと思ってる。勘だけどね。

「ね、ね。この後3人でどっか行かない？ せつかくだし」

「え？ あたしは、別にいいけれど……」

「私も行くよ〜」

……私を差し置いてなんかすごくいい雰囲気になってない？ 私はなんかモヤツと

した。

「ちよつと。私を仲間外れにしないでよ」

「あ、委員長さんお仕事お疲れ様っ」

わざと不機嫌に話してるのに、柵町は何も分かってない感じで普通に返事する。

「何？ あつ、もしかして嫉妬かしら？」

詞はもう仮面を被るのを完全にやめているようで、すごく意地悪な笑みを浮かべてきた。私も私で開き直るよ、もうっ。

「う……そ、そうだよそうですとも。ヤキモチ焼いちや悪い？」

「ふくん。絢辻さんと純ちゃんって、そういう関係なんだ……」

「えっ!？」

梨穂子が何か拗ねながら、本質をぶっこ抜いてきた。何で、何で妙に梨穂子は鋭いんだ……!

「ち、違うよつ、その……ちよつと仲が良いだけで。でしょ、詞っ」

「え、ええ。そうね……そう……!」

「この前のこと思い出してきたじゃん……頬が熱い……!」

「あんなたち、分かりやすいわねー」

「純ちゃん……む……」



棚町はすぐくニヤニヤしてるし、梨穂子はなぜか頬を膨らませて不満そうだし……!  
 「と、とにかく! 私、もうすぐ仕事終わるからまげてよ! いいでしょ!」  
 こういうときは強引に話題をぶった切るに限るっ!!

—※—

「……うわあ」

私は運ばれてきた『それ』に、言葉を失った。

「わく、すつごいね〜!」

せつかく4人でお茶をするのだからと、梨穂子の希望で最近噂の驚天動地風林火山きょうてんどうちパフェを食べることに。梨穂子と棚町が向かい側に座り、私の隣には詞。

まあ、名前からして分かるかもしれないけども……要するに、超超超大盛りのパフェである。1人で40分以内に完食出来たらタダらしいが、そんなの無理なので私達は最初から4人で一つを分け合う感じにした。

梨穂子の瞳はキラキラ輝いているけれど……。

「うわあ、見ただけで胸焼けがするわね……」

「これ4人でも食べきれないでしょ、もっと仲間連れてくれば良かったわ」

激しい表情を浮かべる詞に、激しく後悔している様子の柵町。

『せっかく女子高生の身分なんだから、たまには馬鹿なことやってみよう』って一体何が原因なのか分からないが明らかに頭のネジが軽く飛んでいる雰囲気。詞にみんな同意してしまつて、興味本位で頼んでみたものの……。

「ちよつと詞……これはいくらなんでも……」

梨穂子以外の私を含めた3人は、食べる前から既に半分敗北していた。パフェの大きさは私達の予想を軽く超えていて……バケツよりも大きい、と言つたらそのスケールが分かるだろうか。

とにかく、私達に手に負える代物ではなさそうだった。

「あたしだって予想外よ。その、多く見積もっても普通のパフェ5人分くらいだと思つていたから……」

「絢辻さんも、計算が外れることあるんだ」

「うるさいわね。こういうところ、行き慣れてないのよっ!」

「あ痛っ! 足踏むなつての!」

柵町相手に全く容赦ない詞。確か前に、モードを接する人によって切り替えるとか

言つてた気がするんだけど……何かもう、完全に吹っ切れてるよね、詞。

「じゃあ、いったきまゝす。……あれ？ みんな食べないの？」

「そ、そうね、食べましょう。ほら、棚町さんも」

「あ、あははは……」

「覚悟を決めるかあ……」

幸せを詰め込んだような表情をしながら食べ始める梨穂子を横目で見つつ、私達3人は渋々スプーンを持って小皿に少しづつ、パフェの山を切り分けた。

味は悪くない。パフェ特有の甘い物をごちやごちや混ぜたあの味、私はそんなに嫌いではない。でも、やっぱりその味が長く長く口の中で続くのは中々にキツイ。

「お〜いし〜……!」

梨穂子が幸せそうに食べる顔が、唯一の救いで清涼剤。

「……あー、もうダメ! あたし無理!」

「あれっ。もういいの？」

「あなたとは違うのよ……もう……」

詞が早々にダウンして突つ伏す。梨穂子が意外そうなりアクションを見せるけど、私達にとっては梨穂子が異常なんだって……。

「そういえば詞、少食だったっけ」

「ええ。それに、甘い物は別腹とは言うけれど、こんな大量にはいらなわよ……」

何か相当苦しそうな声。言い出しつぺは梨穂子だけど、それを後押ししてしまったのは詞だから……詞なりに責任を感じて、頑張ったのだろう。

「ちよつとあんた、無理しすぎてない?」

「大丈夫よ。帰る頃には多少楽になっていると思うから……」

「なら、いいけど」

柵町はまだ大丈夫そう。柵町は何だかんだで食べる方だろうし。

と、なると……次に脱落してしまうのは……

「はあ、はあ……やっぱり、私だよね……うっ」

私は詞の隣で机に突つ伏す。力なく机に投げ出したスプーンが虚しい金属音を奏でる。……胃が死んだ。

「純ちゃん!? ……まだ、パフェ結構残ってるよ?」

「え、嘘……」

ちらりと顔を上げると……まだ、3分の1も食べきってない様子だった。

「う……うう……」

私もどちらかといえば少食気味ではあるとは言え……あまりにも不甲斐ない戦績に絶望に打ちひしがれながら、力なく顔を落とした。

「あーあ。2人仲良く脱落しちゃったわね」

「ねー、もつたいないよー。……あ、この組み合わせ結構美味しいかも」

「え？ どれどれ？」

棚町と梨穂子が楽しげにパフエを食べ続けているのが聞こえる。

「よくそんなに食べられるわね、あなた達……」

机に突っ伏したまま、ぼそりと詞がつぶやく。まだ相変わらず苦しそうだ。

「甘い物は別腹。でしょ、桜井さん」

「うんうん！ はむっ……んー、天国だよー！」

梨穂子は何でそんなに楽しそうに食べ続けているんだ……。

「梨穂子……私達にとっては地獄なんだけど……」

「天国だとか、信じられないわ……」

「はああ……」

今の状況。片方のサイド、私と詞側は全滅して机に突っ伏している。もう片方のサイド、棚町と梨穂子側はまだピンピン。明暗はつきり分かれる。

「ふう、やつと半分、といったところかしら。さすがのあたしもちよつとキツくなってきたかな……」

「柵町のペースがここで落ち始める。スプーンが食器に当たる音の頻度が、明らかに減り始めた。」

「あとは任せて〜！」

なお梨穂子は全く落ちない模様。さすがというか、何というか……。それにしても。

「ほんと、梨穂子つて楽しそうに食べるよね……」

「そうね。あたし、桜井さんのことが羨ましいわ」

時間が経つて楽になり、机から起き上がった私と詞が梨穂子の様子を見て言う。

「えへへ、よく言われるんだ〜。……はむっ。ん〜……い！」

「パフェがどんどん梨穂子の中に消えていく。梨穂子は口元がクリームで汚れているのも気にせずに、ただただ食べるのを続けている。」

「ちらりと詞の横顔を見ると……頬が緩んで、表情が柔らかくなっていた。」

「ごめーん、あたしもギブアップ」

「ついに柵町もスプーンを置き、背もたれに思い切り寄りかかって天井を見上げた。」

「柵町さん、ありがとね〜！」

「お疲れ様、棚町さん。かなり助かったわ」

「棚町、お疲れー」

私達は棚町の健闘を称えて、残る梨穂子を応援する。

「棚町が頑張ってくれたけれど……まだ結構残ってるね」

残りほだいたい4分の1くらいだろうか。梨穂子も梨穂子でだいぶ食べているだろ

うし、さすがに……

「おいしー！」

……全然大丈夫みたいだった。

「あなたの幼馴染、少し鍛えれば将来大食いで活躍できそうね」

「うん。梨穂子の新たな才能を見れたかも」

なんて、詞と話してたりしながら、梨穂子の奮闘……？ を見守り。

「ごちそうさまでしたー！」

……ペースが最後まで落ちることなく、ついに完食してしまった。すると、どこからともなく拍手が上がり、店内が拍手で包まれる。私達もそれに乗っかるように、梨穂子に拍手を送った。

「あ、あれ？」

意外な展開に戸惑う梨穂子。どうやら私達が知らない間に、お客さんや店員さんから注目されていたようだった。

「えへへへへ……」

梨穂子は頭をかきながら照れ笑いした。私も拍手しておきながら、どことなく恥ずかしくて……どこに目を向ければいいのか困ってしまった。

——※——

日がギリギリ沈むか沈まないかという時間。この時間になると、辺りは加速度的に暗くなっていく。

「う……結構、無茶してたのかな、私……」

「あんた、大丈夫？ 少し休んどく？」

「柵町さん……ありがとう、歩けるから平気だよ……」

私は梨穂子に肩を貸しながら家路についていた。もちろん、柵町と詞も一緒。

実は、驚天動地風林火山パフェは私達のように最初から分けて食べるグループも多いらしいのだが、それでも完食するのはかなり珍しいことらしい。特に女子中学生く女子



大生グループの無茶な挑戦が多いとのこと。

そこで、何とお店の粋な計らいで完食祝いとして本来4000円のところを特別に半額の2000円にまけてもらった。つまり、4人で割り勘して1000円が500円になったということ。

「ほんと、梨穂子には感謝してもきれないよ」

「そうね。桜井さん、無茶な後押しをしましてしまってごめんなさい」

「ううん、元は私が言い出したんだから、むしろありがとうだよ」

私と詞の感謝の言葉に、苦しいだろうに笑顔で答えてくれる梨穂子。ほんと、梨穂子は純粹で……捻じくれた性格をしている私には、ちよつと眩しく感じてしまう。

「それに、棚町さんもありがとう」

「そっか、棚町も頑張ってくれたんだもんね」

「いいえー。おかげさまで馬鹿な思い出、作れたわよ」

棚町も予想以上の奮闘で支えてくれた。お礼の言葉に、棚町は右手の親指をぐいっと上げて笑った。

「はあ……にしてもあたし、不甲斐なかつたわ……」

「私もちよつとね。正直戦力にあんまりなれなくつて悔しい」

だいたい苦しさは無くなつたし、棚町の言う通り確かに楽しい思い出にはなつたけれど

……あまり食べることが出来なかった詞と私は、ちよつと落ち込んでいた。

「どうしたのよ、そんな暗い顔してっ!」

「ひゃっ!」

「ふえあっ!」

ばしん、と落ち込んでた私達の背中を思い切り叩かれた。棚町だ。

「あんたたち責任感じすぎよ。特に絢辻さん、だいぶはっちゃけてんなーって思ってたから結局お堅いんだから」

「だって、あたし……」

「もう、そういうのはナシ! 細かい貸し借りとか気にしなくたっていいのよ。ねー、

桜井さん」

「えっ! う、うん!」

棚町の急なフリに、大きく首を縦に振る梨穂子。そして……

「だって私達、もう友達……でしょ?」

「友達……?」

梨穂子は詞に、ニコリと純粋な笑顔を向けた。詞ははつとしたような顔を浮かべ、ぼーつと梨穂子の方を見る。

「うん、友達! そうだよ、棚町さん」

「そういうこと。あ、あたしのことは薫でいいよ?」

「じゃあ、薫ちゃん!」

「てんきゅ、梨穂子」

「えへへ……」

棚町と梨穂子の距離も、何だかぐつと近くなつて。

「じゃあ、今度は絢辻さん……ううん、詞の番」

「えへへ……詞ちゃん」

そして、今度は詞が2人に歩み寄る番。詞は大きく息を吸つて、そして……

「分かった。……薫に、梨穂子。あたしの、友達……として、認めてあげるわ」

……認めてあげる、つて……。暗くてよく見えないけど、詞の顔は多分真っ赤。

「あはは、『認めてあげる』つて何よそれ! あんたつて、ほんつと不器用ね!」

「でも、詞ちゃんらしいよね」

「うんうん。変なところで意地張つちやうところが詞だよね」

「な、何よもう、3人とも……!」

そうやって、私達はガヤガヤと笑い合いながら帰つていく。すつかり距離も縮まつて、私達4人の間に友達としての絆が生まれたような、そんな気がした。

今日という日は、色々と思いで出に残るような……女子高生の青春らしい、素晴らしい一日だった。

その思い出の中に詞がいるということ。私はそれが……すごく、すごく嬉しかった。

## 生きる意味

夕暮れ時。辺りがちよつと、暗くなりかけた頃。普段は、大半の実行委員やお手伝いは帰宅しているか、部活に参加している時間。

そんな時間に実行委員とお手伝いが大勢……いや、その他の生徒や先生も集合している。その目的は……ふふ、すぐ分かるんだけど、まだ秘密。

「それじゃあ、テスト行きます。カウントダウン！ 10から！ セーのっ！」

私はメガホンでそう言うと、周囲から興奮した様子でカウントダウンが始まる。無論、私もワクワクが止まらない。

数がどんどん減っていく。結果が見たくて、うずうずする。何となく、だんだんカウントダウンが早くなってる気がする。

そして、すぐにカウントは0に到達する。

「……3、2、1、0！」

0の掛け声と同時に、隣にいる詞がスイッチを押す。すると、クリスマスツリーの電飾は無事に光り出し、周りから歓声が上がった。

「クリスマスツリー、装飾完了！ みんな、お疲れ様ーっ!!」

私は嬉しさの衝動に突き動かされるままに、メガホンを通して思いっきり大声で叫んだ。湧き上がる歓声。手を取り合って、飛び跳ねる生徒達。ほっとしたように笑みを浮かべる先生達。

詞曰く、毎年恒例の光景らしいが……今年のこの瞬間は、特に特別なものだった。私は狂喜乱舞の光景を目に焼き付け、胸の奥でゆっくり、しみじみと噛みしめた。

「……詞、ありがとう」

「ううん。あたしこそ、ありがとう」

私のありがとうも、詞のありがとうも……たくさんの意味が入り混じった、ありがとう。

詞が委員長と優等生の地位を手放してまで意地で奪い返してきた、生徒主導のツリー装飾。いくら詞がああの後距離を置かれたり、孤立してしまっただけとはいえ……何だかんだで、実行委員のみんなは心のどこかで詞に感謝していた。

とはいえ、主なモチベーションは詞への感謝というよりかは、市に目にも見せてやろうという反骨心の方が圧倒的に大きいと思う。でも……詞への感謝がどこにもないわけではなかった。

その感謝の気持ちは、電飾テストの際にスイッチを押す人に詞が満場一致で選ばれたことに表れたのだった。

そして。

「絢辻さんありがとー!!」

「つかさーっ! てーんきゅー!!」

「あーやつじ! あーやつじ! ……」

誰が始めたのか、絢辻コール。詞は驚きを隠せない様子で、口元を覆った。

「詞。これ」

そんな詞に笑顔に向けた私は、手に持つメガホンを渡す。

「でも……」

「行つてきなよ。……みんな、詞を待ってる」

「……分かった」

詞は吹っ切れた笑みを浮かべる。被る仮面は既に無く、心からの満面の笑み。

そして、手拍子と絢辻コールと共に、詞は再び……表舞台に立った。出迎えるのは、万雷の拍手。もはや、孤独な詞はどこにもいない。

詞は、思い切り息を吸った。そして……

「みんなー！　ありがとーっ!!」

ありったけの感謝を思い切り叫んだのだった。

——※——

「……詞、泣いてた？」

「泣くわよそりゃあ……」

帰り道、詞と二人。まだあの瞬間の熱を感じながら、詞の横顔を見る。相変わらず整った顔立ちで、美人だ。だけど……最近の詞は、ちよつとだけ幼く見えるときが増えた気がする。なんというか、感情が豊かになったというか。

「……実は私も、ちよつとうるつときた」

「ふふっ、何で純奈が泣くのよ」

「だって、一人ぼっちだった時の詞を一番近くで見ていたの、私だよ？」

私が自信を持って言えるセリフだからすぐに言えた。詞は少し思索するように、オレンジから紫の綺麗なグラデーションの空を見上げた。



「……そうね。純奈しかいなかった」

もはや、詞が孤立していたことが既に懐かしい。飾らなくなった詞に梨穂子や棚町が接近してから、詞の周りに徐々に人が寄り始めるようになった。数こそ以前より減ったものの、一人ひとりの関係の深さはより深くなっている気がする。

「だから……感慨深くって」

「あたしの保護者面しない！」

「あ痛っ！ ……なにも叩かなくていいじゃん！」

「恥ずかしいでしょ、もう……」

照れ隠しに詞に叩かれるのも、もはや慣れてしまった。むしろ叩かれたときの衝撃が心地よかったり……さすがにそれは変態っぽいな。

「それにしても、詞……ほんとに変わったよね」

詞はクリスマスツリー関連の騒動を通して、雰囲気agaraりと変わった。私の前だけじゃなくて、みんなの前でも……詞は、大きく変わっていた。

「……あたしも思ってる。一回全部持っていたものを失くして、純奈と想いをぶつけ合ってから……何か目的とか、そういうのがちよつと馬鹿らしくなって」

「え、詞が……？」

「おかしいかしら？」

目的が馬鹿らしくなった。詞から、そんな言葉が出るなんて。

「おかしいというか、意外だなんて」

「まあ、そうよね。……確かに、生きるために目的とか、目標というのは必要なの。それは、あたしを見てれば分かるでしょ？」

詞は社会に認められるために、クラス委員や行事の委員に参加してきたと言っていた。多分、優等生の仮面を作っていたのもそのためなんだと思ってる。

「まあ、確かに……詞は今まで、目的のために生きてきて、それでこういう地位を得ていたんだもんね」

「ええ。過去形になっちゃったけど」

詞はくすりと笑う、自嘲するかのよう。でも、その自嘲には悲しさとかそういうのはなくって、もう吹っ切れたかのような、陰を感じさせないような……そんな笑い方だった。

でも、その自嘲、間違ってるよ。

「過去形じゃないんじゃない？ 多分、まだ詞は優等生のまんまだよ」

「そう？」

結局詞の成績は良いまんまだし、孤立してるときもちゃんと仕事をこなしていたし。

校則を破るなんてことも当然してないし。でも……。

「うん。お堅い優等生から、面白い優等生って違いはあるけど」

「え？ そうかしら？」

「そうそう」

詞の二面性が、詞という人物をより面白くしたのだ。それに最近の詞は結構ノリが良かったりするし。4人で驚天動地風林火山パフェを食べに行つたときの詞は、明らかに頭のネジが吹っ飛んでた。

「詞が自分のポジション把握出来てないのって珍しいね」

「……悪かったわね」

「ああ、もうすぐ機嫌損ねないで……」

「ふふっ。お願いに応えて元に戻ってあげる」

詞って私をからかうの好きだよ。私も嫌いじゃないというか、むしろ何か愛される感あつて好きなんだけだよ。

「……それで、話の続き。目的は大事だけど、でも、ずっとそういうのに縛られて生きるのって……人生、損してるかなって思うようになってきたのよ」

「詞が？」

「そう。このあたしが。自分でもびっくりだけど」

おそらく、目的というものは今まで詞が長い間信じ続けてきたものなんだと思う。詞

が言っていることは、それがこの短期間で革命的にひっくり返ってしまったということ。

「社会に認められるために、世間体を気にして楽しめることを楽しめなくさせてしまうのって……やっぱり、損をしているのよ。冷静に考えると」

そうやって語る詞は、まるでずっと縛り付けていたものから解放されたかのように、すごく爽やかで、晴れ晴れしてて。

「それに、あたしはまだ高校2年生だから。失敗したってやり直せるし、羽目外したって許してもらえる。だったら、今この時を楽しんで生きていこうって思ってる」

私、今の詞の表情が大好き。今手元にカメラがあれば迷わず撮って、落ち込んだ時に取り出して元気をもらいたい。

「あーあ。もうちよつと、こういうことに早く気付ければ良かったわ!」  
「痛っ!! 何で蹴る!?!」

……なんて思ってたら突然詞は謎にローキック繰り出してきた。痛いとは言っているけどほんとは、絶妙に痛くて気持ちいい。癖になりそう。……私、もしかして目覚めてる?」

「蹴りたかったから」

「酷くないそれ!?!」

「あたしが酷くないと思えば酷くないのよ」

「ええー……」

そうやって、ちよつとふぎけあうのつて楽しい。……一方的に私が弄ばれているような気も、しなくもないけれど。

「……さて。この後、純奈と行きたい場所があるのだけれど」

「行きたい場所？」

「ええ。いいかしら？」

「分かった。あんまり遠くとかダメだよ？」

「大丈夫。ほら、すぐそこ」

詞は向こうを指差す。……ああ、確かにここならすぐそこ、近くだ。

「……なるほど」

「行こつ。ね？」

詞は私の手をいきなりギュツと握ると、思い切り引つ張った。結構力強い……！

「わっ……っつ、詞っ!!」

「ふふっ。転ばないようにねーっ！」

私はなんとかバランスを取りつつも、ただ詞にぐいぐい引つ張られていった。



「で……何で、ここに？」

「純奈とあたしの、思い出の場所だから。そうでしょ？」

詞が私を連れてきたのは、詞が本性を私に見せた時に訪れた小さな神社だった。確かに野外なのだが、この神社の空間の中は普段いる世界と隔絶されたところにあるような気がして、不思議と落ち着く。

「ま、まあ、それはそうだけど……どうして？」

「ここで、もつと色々純奈に話したいことがあって」

「そっか。で、どんなこと？」

「目的のために生きるのが馬鹿らしくなっちゃったってこと」

そう言うと、詞は私の手を握ったまま縁側に座る。私も詞に動かされて、詞の隣に座る。手は握ったままで、腕と腕が触れ合うくらいの距離で。

神社の中にいると、なぜだか無意味に、詞と繋がっていきなくなる。神社というスポットが持つスピリチュアルな力のせいなのか、それともここが私と詞にとつて特別な意味を持つ場所だからなのか、はたまた別の原因があるのかは分からないけれど。

詞は薄暗い空を見上げながら、話し始める。既にオレンジ色は地平線からすぐ近くの

ところになしか残ってなく、紫色の空にはところどころ星が見える。

「あたしは社会に認められるために、今まで頑張って生きてきたって話はしたと思う」  
「うん」

「でも、その理由は話してなかったわよね」

「……話せるものなの？」

実際私も、意図的に聞くのを避けてきた話題。もちろん私は詞を知りたいし、この話題は詞を知る上でとても大事な話題だと思っている。けれど……私から聞き出すには、必要な覚悟が重すぎて無理だった。

「大丈夫よ。あたしが話すって決めたことだから」

詞はこちらを向いた。真剣な眼差しが私の眼を刺す。詞の瞳は、簡単に私に覚悟を背負わせた。

「分かった。聞くよ」

私は詞の目を見つめ返す。意識を詞の口元に、声に……集中させる。一言一句全てを、私の心で受け止める覚悟を決める。

私の想いを受け取ったのだろうか、詞は一呼吸置くと……ゆっくりと、話し始める。「一言で言うと、あたし、家族に恵まれてなかったの」

予想はしていた。詞の家庭は複雑なのだろうと、薄々感じていた。

「極端なエリート思考の父に、視野の狭い母。そんな両親からも愛される、天才肌の姉。……そして、あたし」

「……見向き、されなかったんだ」

「そう。姉に夢中だったのよ」

詞の境遇と、私の境遇を比較してみる。

私は両親から愛情を十分に注がれていなかったが、私を完全に見ていないわけではなかった。何だかんだで美也の姉としての立ち位置を期待されていたし、実際私は美也といる際に、姉としての立ち振舞をしてしまっている。

しかし、詞は……多分、最初から『いない』ものにされている位の扱いなのかもしれない。詞のほうが、よっぽど恵まれていないと思う。

「あたしはまず、そんな家族に認めてもらうために頑張った。小学生の頃、ね」

詞の努力は、小学生の頃から既に始まったものだという。私が小学生の頃は……まだ、何も考えてなかった気がする。この頃からやたら両親から気に入られる美也が嫌いではあったが。

「頑張って勉強して、自己管理も徹底して、先生達に気に入られるように振る舞った。その甲斐あって、やっとのことであたしは姉の成績を超えた。……それでも、両親の興味はずっと姉に向いたままだった」



詞は昔話を淡々と話す。まるで、自分のことではないように。

姉が天才肌と言うが、詞も詞で生まれ持ったポテンシャルは相当なものだ。というか、小学生の時点で自分だけの力で世渡りを覚える時点で、ひよつとしたら姉を超える天才なのではないかとも思う。むしろ何で両親はその才能を見抜けないんだろう。

「そこで、あたしは決断した。家族じゃなく、社会に愛されようと思ったの。世間の全ての人に、良いように映るように」

認められなかった天才が選んだ選択。家族を諦め、外の世界に愛を求めた。

「……その過程で、詞は二面性を持つようになったんだ」

「そうね。優等生だけでやって行けるなら、当然そうしてた。けれど、やつぱり……あたし無理してたんだと思う」

小さな身体と心には、いくら天才といえどあまりにも重い選択だったのだろう。

「優等生を演じる上で、どうしても嫌なことはたくさん出てくるの。特にあたしが嫌だと思ったのが、あたしより出来ない人に、自分にとつて都合の良いように言われたり使われたりすることだった。……生徒、先生関係なくね」

優等生は、多くの損をする代わりに一定の評価を得る、そんなポジション。社会的地位を得るための手段としては、結構遠回りで、労力がかかる選択だと思う。

それに、優等生は……反抗することを許されない。

「その嫌なことを吐き出すため。もつと言えば、あたしがあたしをどうにかして保つため。……裏の、最低なあたしが出来てしまった」

世間に愛されるという目的のため、世間に傷つけられる。ただ愛されたい、たつたそれだけなのに。

……だけど、最後の『最低なあたし』っていうのは、同意しないよ。

「最低なんかじゃないよ」

「え？」

こういう時、私は話の流れをぶつた切つてでも主張したくなる。私だって、変わったんだよ。

「前はその詞、苦手だったけど……今は、好きだよ」

……180度、変わったんだ。

「……無理してない？」

「無理してない。あの後も詞を色々知り続けて……いつの間にか、変わってた」

詞を知り続けて、詞に触れ続けて……私は、変わったんだよ。

「そっか。純奈が信じてたこと——何かのきっかけがあれば、見方が変わるってこと、だったわよね」

私が、本当の詞を初めて知ったときに言った言葉。……詞が覚えてくれている。

「……覚えてるんだね」

嬉しくて、感動して……思わず口元が緩んで、声が高くなる。私つたら、分かりやすい。

「純奈があたしの言葉をよく覚えてるのと同じで、あたしも純奈の言葉を覚えてるのよ」  
「そっか、ありがと……」

私が詞の言葉を覚えていた時の詞も、同じ気持ちだったならいいな……なんて、それは私の願望の押し付けなのかな。とにかく、それくらい私は浮かれていた。単純だな、私。  
「どういたしまして。……それで、純奈はそれを信じて、正解だったというわけか」  
「そういうこと」

私はにこりと笑う。詞を信じて、私を信じて……正解だった。でも……

「……あたしは、自分の信念を信じ続けても結局ダメだったわね」

「詞……?」

詞はため息をつきながら、少し寂しく笑う。私の心がひしりと痛む音がした。

「社会に広く愛されるっていう目的。……結局、あたしはどう頑張っても、他人にとつての憧れや、都合のいい人にしかならかった」

優等生というポジションは、得てしてそういうもの。特に詞のような、他の人に手が届かなくなるくらいまでに完璧な人は……特に距離が開いて、そうなってしまうんだろ

う。

「……それを知っていても、あたしはそうするしかなかったの。固まった地位は捨てられないし、それにあたしは上辺だけの付き合いしかしてきていかなかったから……分らなかったのよ、それ以外の方法が」

外の世界に広く愛を求めた詞には、結局上辺だけの愛しか返ってこなかった。そして、世界からより完璧な人であることを求められ……詞も、それに逆らうことは出来なかった。

「そんな、半ば諦めながら惰性で優等生を演じ続けているあたしに、純奈が現れたの」「私が……?」

突然私の名前が出てきたものだから、私は思わず反応してしまう。

「純奈も気づいてるでしょ、さすがに。純奈はあたしにとって、すごく意味のある人だつて」

「……ま、まあ」

確かに、詞にとって私は大切な人だと、私自身でも気がついている。けれど、それを口に出して認めるのは中々恥ずかしいというか、なんとというか。

だから、つい曖昧に返してしまう。

「……純奈は、今まで誰も踏み込んで来なかったあたしに踏み込んできて……しまいに

は、岩のように硬かったあたしの目的を壊して、すり替えてくれた」

「すり替えた……？」

「そう。他ならぬ純奈のため、という目的にね」

つい最近の、屋上で言い合いを思い出す。詞は、私のためなら詞と私が離れ離れになってもいい、という所まで行っていったっけ。

「純奈のためなら、地位を捨てることなんて簡単だったわ。……でも、その目的もまた、純奈によって壊されてしまう」

「えっ？」

「純奈のために生きるって決めてたあたしに、純奈は嫌だって言ってくれたの。それで、あたし……目が覚めたわ」

あの時の私は……理性で捉えて説明しようとするのは出来ない。もう、感情の塊で……とにかく、詞があんなこと言うのが嫌で嫌で仕方なかった。

「やつとあたし、気づけたのよ。あたしは目的に縛られすぎて……損してるって」

「詞……」

そう言った詞の笑顔は、やっぱりすごく清々しくって。元々綺麗な顔と相まって……

すごく、素敵だった。

「だから、あたし……これからは目的を頭の片隅に置く程度にとどめておいて、とにかく

今この瞬間を生きるってことにしようって。……そう、思えたのよ」

そう言うと、詞は私をそっと抱きしめた。私はただ、何もせずに詞の優しい抱擁を受け入れる。ふわりと優しい、詞の匂いが私を包み込んで……私は、目を閉じてその気持ちよさに浸ってしまう。

「これが、あなたに知ってもらいたかったこと。あたしの、全部」

抱きしめたまま、詞が耳元でささやく。詞の掠れた声色が、すごく心地いい。

「詞。……教えてくれて、ありがとう」

「ううん」

「私、詞のことを知るたびに、もっともつと……詞という人間に惹かれていく」

「純奈……」

詞の抱きしめる力が強くなる。私は甘えるように、詞に体重を掛ける。詞の体温が、柔らかさが、私の身体全体により強く伝わってくる。

「ふふ、気持ち悪いかな」

「うん。気持ち悪い」

「そこは否定するところでしょ、もう」

「くすつ。だって、そんなにあたしを知りたがる人間、いないんだもの」

「……そっか。じゃあ、私気持ち悪いね」

「ええ」

二人にしか聞こえないような、小さくて甘い声。限りなくゼロに近い距離で交わし合う言葉。私の心が、ぽかぽかとした温もりで満たされていく。

幸せって、きつとこういうことを言うんだと思う。私は詞に、優しく包まれ続けた。

## 創設祭、詞と一緒に

忙しい日々というのは、本当にあつという間に過ぎていくもの。今までこういうことに全く参加してこなかった私が、経験したことのない感覚。創設祭実行委員長に電撃就任して不安がられた私もどこへやら、すっかり私も委員長が板についた。

『明日はいよいよ、創設祭当日です。来てくれる人たち、そして私達自身も思い出に残るような日にしましょう!』

……なんて、言っちゃったりしてさ。

「……私、もうすっかり別人だなあ」

電気を消した自室のベッドの上で、私は布団に入って今日のことを思い出す。思い出すというか……強制的に思い出される、というか。

創設祭も、気がつけばもう明日。私は明日の、わずか数時間のお祭りのために……あんなに頑張ってきたのだ。

……つくづく、私が私でないような、そんな感じがする。

「ふふっ、これも全部詞のせい」

詞と接触してからの一ヶ月半。あまりにも、色々ありすぎた。



補習帰りに、ひよんなことから詞の仕事を手伝って一緒に帰ったこと。そこから、私と詞の関係は始まったんだっけ。それで、詞が過労で倒れたときにお見舞いに行つて……お返しに、お弁当をもらった。詞があまりにも食べなすぎたから、サラダを押し付けたのもしつかり覚えてる。

あの時、本当に何で詞の仕事を手伝おうと思つたのだろうか。今考えると、すごく不思議な行動だな、と私は思う。でも……それがないと、今の詞との特別な関係というのは存在しなくて。だから、多分……見えない力、運命の力みたいなものが私の気持ちをすり替えたのかもしれない、なんて……ファンタジーのような仮説を立ててみたりする。

今思い返せば、長い一ヶ月半だったとも思う。詞の二面性を知つて、シヨックを受けて……でも、何とかして詞をもっと深く知ることと繋ぎ留めようと思つて。あの時の私は、もう、悪あがきみたいな感じで。嫌だけど、立ち向かわなきゃ、みたいな。

おかげで、私は詞をたくさん知れて……詞を好きになれた。あ、好きつていうのはラブじゃなくて、ライクのこと……でもない気もしなくもない……。

「……あの時の感覚、まだ覚えてる」

私は自分の唇を人差し指で一つとなぞる。想いを言葉でぶつけて、それだけでは足りない詞が要求した……女の子同士のキス。

まるで夢のような感覚だけれど、確かに現実にあったこととして覚えていて……心のどこかで、もう一度詞としたい、なんて思っている私がいる。

でも、キスはやたらめつたらするものじゃなくて……もつとこう、特別でなければいけない、なんて思っている私もどこかにいて。いわば、特別な意味を持つ儀式みたいなもの。

確かに友達以上の関係かもしれないけれど、決して恋人同士じゃないし。

「……………や、やめよう、これを思い出すのは」

身体が何だか熱くなるのを感じて、私はその思い出を振り切るかのように左右に転がった。

心臓が高鳴る。何だか胸が苦しい。モヤモヤする……。

この状態をどうにかしたくって、私は枕を掴み、太ももに挟んでぎゅうつと抱きしめる。……ダメ、収まらない。感触が、温度が、詞じゃない。足りない……。

決して嫌じゃない感覚、だけど……辛い……。

「はあ……やっぱ、私おかしくなってる……」

目を拭うと、涙が溢れてて。暗くした部屋、自室のベッド、私一人。まるで、私が私じゃないみたいになつて……どうして？

詞……私、こんな感覚、わからないよ、怖いよ。

どうしたらいいんだろう、何すれば楽になるんだろう。この気持ち、この苦しき、一体……一体、何なの？

教えて、教えてよ……詞……っ。

—※—

創設祭当日。最終準備に、イベントの直前リハーサル。様々な仕事を委員長としてこなしていった。昨日抱いていた変な気持ちも、仕事をしているうちに気にならなくなってしまったし。

……あれ、ほんとに一体何だったんだろ……夢、なのかな。そう思うと、確かにあの時の記憶はおぼろげで、ぼーっとして、霧のように掴みどころがなくて……夢じやないってことは分かっているけど、それでも夢だと思える、みたいなの。すごく、すごく微妙な感じ。

そんなことを気にする間もなく、あっという間に日も傾き、お客さんも、TVカメラ

も入ってきて……。

「詞。私、行ってくるね」

「頑張つて」

私は詞に一言言つて、私達が手作りで作った創設祭特設ステージに向かう。こんな大勢の人前で話すのは初めてで、すごく緊張してるけど……詞が私のためにアドバイスしてくれたから、きつと、大丈夫。

胸に手を当て、深く吸つて、深く吐く。震える足を、呼吸を、どうにかして落ち着かせる。

「——続いて、創設祭実行委員長の挨拶です。橘純奈さん、お願いします」

出番だ！ 私は表舞台に立つ。こういう時、恥ずかしいからそそくさと早歩きで出るのはカッコ悪いと詞が言っていた。出来る限り堂々と、いつもどおりの歩きで……。

……うん。大丈夫だ。私、ちゃんと出来てる。ステージ上で転ぶなんてこともないし。……それにこういうのつて、やっぱ楽しんでるもの勝ちだよ、詞。

私はスイッチを切り替えて、笑顔を作ってマイクをギョツと両手で握った。

「皆さん、本日は第57回、輝日東高校創設祭にご来場いただき、誠にありがとうございます！」

——緊張していた。ものすごくしていた。大勢の人はもちろん、それに遠くにはTVカメラまであるから……事実、そのプレッシャーに私は押しつぶされそうだった。

けれど、会場をよくよく見たら見知った顔も多くて、それを見ると私はだいぶ気持ち楽になつて。

それに、詞がつきつきりで練習に付き合つてくれたから台本は間違えるはずもなく。何よりも、一度話し出すと案外つらつら出てくるものなんだ、つて話しながら思つて。

でも……今からやるこれは、ぶつつけ本番なんだけど。

「——それでは！ 今年も私達生徒がデザインから飾り付けまで、全て手作りで行ったクリスマスツリーの点灯のカウントダウンをしたいと思います。……詞！ こつち来てー！」

「えっ!？」

「いいから！ 皆、待つてるよー！」

私は、私の様子を観客席から見ていた詞を見つけて、手を振つた。ざわつく会場の調子の良い男子生徒が「お？ お？」なんて大声ではやし立てる。詞は戸惑いながらも前に来て、ステージ上に上がる。

「な、何してるのよ純奈」

「良いから良いから」

オフマイクでちよつと詞と喋ってから、私は再び会場に向けて話す。

「毎年恒例となつているクリスマスツリーですが、今年は少し色々あつて生徒主導のものではなくなるかもしれないという危機がありました。しかし、こちら私の隣に今立っている、前実行委員長である絢辻詞さんの活躍により、今年もツリーを私達の手で作ることが出来ました」

やっぱり、詞は表舞台にいてほしいし、ちゃんと報われてほしい。自分勝手かもしれないけれど、でも私は心からそう思っていて。

「というわけで、クリスマスツリー点灯のカウントダウンを、今年の実行委員長の私ではなく、絢辻さんにやつてもらおうと思います。……詞、お願いね？」

「あ、あたし？」

「嫌なんて言わせないよ？」

「も、もう……」

私は詞にマイクを渡す。拍手が自然と湧き上がる。さすが詞、前に出てマイクを握つたらすぐにスイッチが切り替わつた。

「皆様、こんばんは。前創設祭実行委員長の絢辻詞です。本日は輝日東高校創設祭にご

来場賜り、誠にありがとうございます」

まるで打ち合わせでもしていたかのように、つらつらと挨拶が出てくる詞。……やっぱり、出来る人というのはオーラが違う。

「——それでは皆様、準備はよろしいでしょうか。行きます！」

10、9、8……会場が一斉にカウントダウンを始める。詞の登場というサプライズもあつて、テンションは最高潮に達していた。

「……2、1、0！」

0の掛け声と同時に、私達が一生懸命作ったクリスマスツリーが鮮やかにライトアップされた。巻き上がる拍手が、大歓声が、詞の裏での頑張りを認めたのだ。

——※——

「純奈、大胆なことするのね」

「いいじゃん、お祭りなんだし」

「おかげであたし、今までで一番緊張しちゃったじゃない……」

「一番緊張してあの挨拶なんだ……」

詞の凄さの片鱗を垣間見つつ、私と詞は創設祭を回っていた。出場予定のミスサンタコンテストは創設祭の一番最後にあるのでそれまで時間もある。委員長の仕事は……ほら、創設祭のパトロールでこと。ね？

「あ、純ちゃん、詞ちゃん！」

私と詞が出店の通りを歩いていると、横から昔から聞き慣れた声。声の方を向くと、そこには。

「梨穂子！……うわ、すごく綺麗」

茶道部所属の梨穂子が、着物を着て手を振っていた。

私は梨穂子の着物姿に思わず見とれてしまふ。特に派手さはない、山吹色の着物。でも、シンプルだからこそ梨穂子の内面的な可愛さが出てくる、って言うか。

「そ、そうかな？」

「ええ。着物似合ってるじゃない」

「えへへ……詞ちゃんもありがとう」

褒められて、照れ笑いをする梨穂子。すぐに感情が外に出る梨穂子だから、ほんとに和む。

でも、ちよつと事情があるみたいで……。



「それで、二人もゆつくりして欲しい……って言いたいところなんだけど」  
「まさか、何か事件？」

梨穂子の表情が曇る。お祭りだもんな、舞い上がって変な人とか出てきちやうんだらうな……。

「そうなの。見たほうが早いかな」

「ああ……アレ、ね」

「そう、アレなんですよ……」

『やれやれ』といった感じの詞。そう言えば詞と梨穂子は去年も創設祭にそれぞれ参加してたんだけ。去年もあったのかな、こういうの。

「詞、何が起きてるのか知ってるの？」

「ええ、去年も茶道部であつたから……全く、世話が焼けるわ」

一体何が起こつてるんだらう。梨穂子の案内で茶道部の出店のところに向かう。

「うわあ……」

そこで見た光景に、私は軽く引いた。よくよく見知った大人の女の人が、酔つ払つて着物を着た女子生徒2人……茶道部の先輩に、面倒な絡みをしてるではないか。

「高橋先生、今年もダメだったよ……」

その女の人は、私のクラスである2—Aの担任であり、創設祭実行委員にも深く協

力してくれている高橋先生だった……。

「きよ、去年もこんなだったの……?」

「ええ……残念ながらね」

私が戸惑いながら詞に聞くと、詞はため息をついた。普段はちよつとだけ頼りないくらいで、結構美人で男子からも人気のある先生。そんなちよんと先生してる高橋先生だけど……イメージが……。

「絢辻さんごめんねー。去年の件があつたから一回甘酒出すの断つただけど、りほつちが断りきれなくつて出しちゃつたんだ」

「この始末」

「いえ、大丈夫ですよ」

茶道部の先輩2人が詞に助けを求める。ちなみに、私と先輩方との関係はたまにお話する程度。主に梨穂子の。

「あ、あはは……ごめんなさ〜い」

梨穂子は苦笑しながら手を合わせて詞に謝る。

「梨穂子はもうちよつと厳しさを身につけたらどうかしら。将来悪い人に騙されるわよ?」

「純ちゃんにも言われるよ、それ」

「もう、世話が焼けるわね……」

私も思う。梨穂子、将来がちよつと心配。悪い男に騙されなければいいのだが。

「悪いんだけど、今年もお願いできる?」

「秘密兵器」

「ええ、今年もぼつちりスタンバイしてありますよ」

先輩方2人の頼みを聞いた詞は、パチン、と指を一つ鳴らした。すると……。

「お呼びでしょうか、絢辻様」

……何かガタイのいい男子生徒が2人どこからともなく出てきた。まるで、漫画や

ゲームでよくある女王様の召喚のよう……。

「高橋先生を、保健室まで連れて行って」

「はっ」

すると、男子生徒2人は酔っ払った高橋先生の腕を掴み、子供のようにはぐれてわめく

高橋先生を全く意に介さず、引きずるようにして強制連行していった……。

「ありがとう。助かったよ!」

「感謝」

「お礼なら、彼らにあとで言ってお下さい」

「ああ、それもそうだったね。ちゃんと後でお茶菓子でも渡しとくよ」

茶道部の先輩方2人も、梨穂子も全く今の件にノーリアクション。……あれ？ この光景って普通のことなの？ 受け入れきれない私が変なだけ？

「ね、ねえ……さっきの2人って、誰……？」

「警備員役の実行委員よ？」

「それにしても、何か不気味なほどにしつけられてる気がするんだけど……」

「ふふっ。気のせいよ」

詞のこの黒い笑顔……絶対、何かあるよ……。

——※——

「こんなので酔う方がおかしいんだけどなあ……」

つくづく思う。何で子供も普通に飲める甘酒で酔う人が出てくるのだろうか。名前に酒ってあるから身体の勝手な思い込みで酔ってるんじゃないか、みたいな推察を立ててみる。

「ふうっ。ごちそうさま、梨穂子」

「ごちそうさまでした。美味しかったわよ」

「お粗末さまでした」

私と詞は茶道部の出店にて甘酒を頂いて、再び通りを歩く。厄介事は高橋先生くらい  
 のようで、それ以外は至って平和。友達のグループ、部活の先輩後輩にカップル。子ど  
 もたちに家族連れにお年寄り。みんながみんな、思い思いに創設祭を楽しんでくれてい  
 る。

「純奈」

「なに、つか、さ……」

暗がりには、出店の光で浮かび上がる詞の横顔。心を奪われるつて、こういうことを言  
 うのかもしれない。私ははっとして、思わず言葉を失ってしまう。

だって、すごく、綺麗だったんだもん。

「……純奈？　おーい」

「ふえ？　あつ、ううん。……それで？」

詞の手が私の目の前で上下に動かされて、やっと正気に戻る。……心臓が跳ねちやつ  
 た……。

「こうして作る側になってみて眺める創設祭、どう？」

詞は私に問いかける。私はお祭りの歩き方が分からなくて、何となくそういう催しは  
 避けていた。けれど、こうして今日久しぶりにお祭りの会場に来て……しかも、私が途  
 中からだけ実行委員長として中心的存在となって頑張った、そんなお祭りだ。

「……不思議な感じがする」

「不思議？」

「うん。何か……このイベントを作るのに私が関わったってこと、幻みたいで」

「純奈は、こういう経験するの初めてだもんね」

夢と表現するよりかは、幻と表現する方が何となくしっくりくる。何でかって言うのは……その、私の心の直感？ みたいなやつで。

「……でも、嬉しいよ。一歩ずつ歩きたびに、満足感というか、達成感が身体に貯まってくる、みたいな」

「独特な表現するのね」

「でも、実際そうだからねっ」

そうやってお話をしながら楽しく通りを歩いていくと、やけにすごくいい匂いに惹かれた。これは、多分おでん……かな。

私は詞を誘って、おでんを売っている出店に向かう。そこで店番をしていたのは……。

「あ、美也ちゃんのお姉さん。それに、絢辻先輩」

七咲逢ななさきあい。美也の友人で、水泳部所属。1年生にして県大会を優勝しているという、物

凄いい実力者だったりする。

「こんばんは、七咲さん。何か困ったことは起きてないかしら？」

「ええ、大丈夫ですよ先輩。備品を更新したおかげで、ちゃんと運営出来てます」

「そう言えば詞は前実行委員長だったから、詞がやった仕事もあるんだっけ。水泳部のおでんの備品を更新したなんて情報はたった今初めて聞いた。」

「七咲さんってことは……あ、そっか。水泳部は確かおでんを毎年やってるんだっけ」

「そうですよ？ もしかして、去年は創設祭に来てないんですか？」

「そうなんだよね。昔は私、今みたいに外に興味持てていなかったからさ」

「へえー、何だか意外ですね」

「そう？ ってまあ、七咲さんは去年の私を知らないからそりやそっか」

私と七咲さんはこんな会話を交わした。去年の私はこの時期、ずっと家だったからな……。

「そう言えば、お姉さんもミスサンタコンテストに出るんですね？」

「え？ 何で知ってるの？」

「美也ちゃんが言っていました」

「あ……」

やれやれ、なんて妹だ……。前に聞いた話だけど、美也は結構私の話を友人にするこ  
とが多いらしい。恥ずかしいったらありやしないんだから。

「まあ、確かに出るよ」

ちなみに、詞が出るということは極秘である。ミスサンタコンテストに出るキャラじゃない詞は、まさかまさかのサプライズ登場がうつつけた。

「本当だったんですね。お姉さんは綺麗ですから、すごく楽しみです」

「もう、七咲さん……お世辞にもほどがあるよ」

私が綺麗？ そんなこと、初めて言われた。梨穂子にも言われたことないし。……いや、付き合いが長い梨穂子だからこそ言われたいものもあるかも。

「いいえ、お世辞じゃありませんよ。もしかしたら、優勝まで行けるかもしれませんよ？」

「優勝は難しいと思うんだけどな……」

「どうしてですか？ ……あ、森島先輩か」

「そう。最初から勝ってるようなものでしょ、あの人」

森島先輩、実は当初は『受験生なのにこんなイベントに出て良いのか』って悩んでいた。でも、美也が出るとなったらやる気を出してくれたようで、結局今年も参加することになった。

「ふふ、そうですね。じゃあ2番目ですか」

「七咲さんは私のことを買いかぶりすぎだよ、もう」



でも、嬉しくないわけなくって。私は照れ笑いを隠せなかった。そんな様子を見ていた詞も、私に笑顔を向けて話してくれる。

「純奈。あたしもあなたの衣装、楽しみにしてるからね」

「詞もそんなこと直前になって言われると、恥ずかしいんだけど……」

「ふふつ。ごめんなさいね？」

もう。詞は絶対分かっててやってる。意地悪なんだから……。

「くすつ。お二人って、すごく仲が良いんですね」

「え？」

七咲さんから突然そんなこと言われたから、ちよつと驚く。でも、私がこういう質問をされたときは、決まって素直に答えるんだ。

「うん……まあね。それは胸張って言える」

やっぱり照れくささはあるんだけど、それでもちやんと言う。私と詞は、仲が良いんだってこと。

「純奈って、仲が良いことを謙遜しないわよね」

「だって、謙遜するとその友達にとって失礼だから。ね？」

友達は大事にする。どんなときも、困ったときに助けてくれるのは友達なんだ。梨穂子、柵町、そして詞。……みんなみんな、かけがえのない人たちだから。

「…………ふふっ、ありがとう」

詞の音が、私の鼓膜を心地よく震わせた。何でもないような詞の声なのに、何だかすごく甘い響きに聞こえて…………私の身体を、心を揺さぶる。

…………私、やつぱり…………おかしなことになってる…………。詞の隣にただで、身体に溜まっていく熱を自覚していく。そっか、そのせいで今日、あんまり寒くないのかな…………。

「…………お姉さん?」

「ふえっ?」

七咲さんの声に引つ張られて、私の思考は一気に戻される。そっか、おでん頼まない…………。

「あ…………ごめんね、そろそろ注文しよっかな。私は…………」

## 白と黒、光と影

茶道部の甘酒に、水泳部のおでん。他にも色々見て回りながら、たまに他の委員の子の手伝いをしたり、お客さんに案内をしたりして……私と詞の創設祭の時間は楽しく過ぎていった。

そして今、私は……体育館近くにある、ミスサンタコンテストの控室にいる。もちろん、ミスサンタコンテストに参加するためだ。

「やっぱり、真冬の夜にこんな格好は寒い……」

私は人生初のサンタ衣装に着替えていた。しかも、ミニスカサンタである。

定番の赤ではなく、白のサンタ衣装。上は長袖にモコモコで防寒対策はばっちりなんだけど、下はミニスカートで生脚露出させてるからホントに寒い。開催場所は屋外じゃなくて体育館なんだけど、大して気温は変わらないし……。

「まあ、でも私と詞で背伸びしてデザイン考えたんだから、文句も言ってもらえないか」

最初は柵町の意見を聞く、っていう案もあった。けれど、詞が『あたし達だけでやるの』と言ったため、完全に2人だけで衣装からポーズまで決めた。

誰もいない放課後の教室で、窓を鏡代わりにしてポーズを決めたこともあった。廊下

に人の気配を感じて慌ててごまかしたこともあったりしたつけ。今となっては、楽しい思い出。

「でも、いざ本番前に着るとなると、不安になってくる……」

我ながら攻めてるなあこの服……。まあ、羽目外して思い出作りたいっていうのが目的だし、詞は目的には一切妥協しないような人だから、こんな服になっちゃったわけで。

ちなみに、この控室にも詞はいない。共演者にも詞が出ることは極秘だ。

「あ、ねえね！」

「うっ」

見つかつた……。ミスサンタコンテストに出る羽目になつた元凶に見つかつた……。

美也も既に衣装に着替えていた。……。サンタ衣装じゃなくてシカスーツだけど。

「ちゃんと出てくれたんだね、にししし」

「う、うっさい……！」

ほんとコイツは子供っぽいんだから……。多分私をからかうのが目的でしょ！

「それにしてもねえね、普通に似合ってるね」

「え？　ほんと？」

……つて思つたら褒めてくれて、何か拍子抜け。良くも悪くも美也は素直で、今回は素直さが良い方向に出てくれたってところかな。

「ねえねの姿、からかうの楽しみにしてたんだけどな……まさかこんな似合ってたらみゃーも何も言えないよ」

前言撤回。悪い方向にもきつちり出てきました。とうか……

「やっぱりそれが目的だったか……」

「はっはっはっは」

本番前でも、彼女は彼女のまんまでした。コイツの思考が単純で分かりやすすぎて、ちよつと呆れる。まあ、緊張でテンション下がってる美也を見たらそれはそれですごく困るんだけど。

……で、美也の衣装にも突っ込んでおかないと。

「とうか、何で美也はサンタじゃなくて……シカなの？」

サンタのソリをひくのはシカじゃなくてトナカイだろ、なんてツツコミもしたいけど面倒だから別にいいや。

「そりゃあサンタさんはこっちにいますからー」

「きゃっー！」

美也は不自然に膨らんだカーテンの中から、誰かを無理やり引っ張りだした。私の前に現れた少女は……赤いミニスカサンタの衣装をまとっていた。しかもへそ出しとか攻めすぎてる。

「は、恥ずかしい……」

「な、中多さん……」

美也のクラスメイト、中多紗江<sup>さえ</sup>。美也の被害者筆頭。美也は引つ込み思案の特訓と称して色々やっているらしく、今回のミスサンタコンテスト参加もその一環らしい。

とはいえ、私は中多さんが自分から『出ます』っていう言葉を直接聞いているから、もう十分引つ込み思案じゃないんじゃないかなって思うんだよね……。

それはさておき、中多さんのサンタ衣装の感想を。

「何というか、その……すごく攻めてるけど、そこまでいやらしくなくて、むしろ普通に可愛いっていうか……綺麗？」

中多さん、あんな性格で身長も低めなんだけど、胸はかなり大きい。今のサンタ衣装はその胸の大きさが結構分かるような過激な衣装なんだけど……不思議といやらしい、なんて感想は持たなかった。

というか、中多さん本来の雰囲気がちやんと出ていて、育ちの良さがにじみ出るような、清楚な可愛さ？ って言えばいいのかな。……とにかく、普通に、可愛い。

「そ、そうですね……？」

「うん。……ごめんね？ ちよつと変なこと言って」

「い、いえ。変じゃありません、少し不安が消えましたから」

まだおどおどしている中多さんだけど、その表情がちよつと柔らかくなつたような気がする。緊張をほぐすお手伝いが出来たなら、それでいいや。

「ね？　可愛いでしょ？　これ、美也が選んだんだー」

「中多さんもよく着られたよね……」

美也の仕業か……。もつと、こう、配慮というものをだな……。

「あ、そうだ。七咲さんも出るんだよね？」

「逢ちゃん？　逢ちゃんはねー、こつち」

美也が指さした先に、さっきおでん屋台で店番をしてた七咲さんがいた。しつかり衣装に着替え済み、だが……。

「あ……」

……何で。

「……」

「……」

……何でペンギンスーツなんだ……。理解に苦しむ。いや、可愛いんだけど……。

そして、そんな七咲さんに忍び寄る一つの影が。

「あ、可愛いー！」

「ひゃあっ!?　も、森島先輩!?　急に抱きつかないで下さいよー！」

「いいじゃんいいじゃん、可愛いんだし」

「理由になつてません！」

ミスサンタコンテストの控室は何だかんだで楽しい空間でした。

—※—

「みんなー、ありがとうー！」

大歓声を浴びながら、森島先輩がステージから退場する。さすがミスサンタコンテスト2連覇の実績を持つ森島先輩。人気は根強く、そのパフォーマンスには安定感があった。

「……うわー、緊張してきた。自分から最後にしてもらったのに……」

いよいよラスト、私と詞の出演。委員長権限を使って、無理言つて私達は最後にしてもらった。反対意見もなくてすんなりトトリを任せられることになったけど、さすがに森島先輩の後にするのはプレッシャーが半端ない。

演出の関係で、詞は私の隣にいない。一人じゃないのは分かっているけど、やっぱり



心細い。……まあ、それを言うなら詞も同じだけどさ。

けれど、今までちゃんと練習してきたんだ。もちろん詞と一緒に。開会式のスピーチだつて、ばつちりだったじゃん。美也達も、素直に私の衣装を褒めてくれた。

何も怖いことなんてないんだ。あとは、楽しんでくるだけ！

「……では、ミスサンタコンテスト、いよいよ最後の出場者です！ 創設祭実行委員長がまさかの参戦！ エントリーNo. 9、2年A組。橘純奈！」

来た！ すっかり温まった観客からの大きな歓声を浴びながら、私は舞台袖からステージにゆつくり歩き出す。眩しいスポットライトに照らされながら、詞直伝の作り笑顔で観客に手を振りつつ、ステージの真ん中へ向かった。

やっぱり露出した足元が寒い！ けど、会場の熱気はひしひしと伝わってきて……楽しい！ 緊張で身体は震えているけど、作り笑顔はいつの間にか自然な笑みに変わって……こういうのも気持ちいいものだなって思つて。詞のアドバイス、無駄になつちやつたけど。

私が真ん中に立つまで、結構長く感じた。なにせ、こんな熱狂した雰囲気の中、たった一人で前に出るのは初めてだったから。初めての経験をしている時つて、時間は長く感じるんだよね。

まあ、もう間もなく2人になるわけだけど……！

真ん中にたどり着く。私は足元に視線を落とし、すつと手を上げる。ちよつと、腕が震えてるな、私……。

そして、会場が少し静かになるのを見計らって……目を閉じて、指パツチンの、フリをした。

バチン。会場が真っ暗になる。何だ何だ？ と、観客が一気にざわつき始める。そして、その間に体育館ステージの後ろにある幕から、詞が出てきて……私の真後ろに、背中合わせに立つ。

詞の体温を、背中からちゃんと感じる。後ろにちゃんと詞がいるっていう事実を、私の背中が感じてる。

誤魔化していた不安な心が、ぐつと補強された気がして……ちよつと浮足立ってた私を少し冷静にしてくれた。

「……ふふ、いい感じね」

「詞……私、頑張ったよ」

「よく頑張りました。……では、点けてもらいましょか」

詞が小声で私にささやく。詞の声色が、私の心に癒やしをもたらして……そして、この後の会場の反応に、私は期待を寄せた。

一体、どんなことになるんだろう……！

今度は詞が、フリではなくちゃんと指を鳴らす。すると、再び会場の照明が戻り、スポットライトが私達に当てられて……観客からは、私の後ろに何かいることに驚きどよめきが起こった。

「おい、誰かいるぞ」

「えっと、あれって……え？ 絢辻さん？」

「いやいや、嘘だろ……というか、橘の陰に隠れてよく見えないし」

しばらく背中合わせで立ったあと、詞がくるりと回って私の隣に立っての種明かし。私の色違い、黒のミニスカサンタ衣装を身にまとった詞が強気的笑みをたたえて姿を現す。

その瞬間、私は歓声で床が震えるのを足元伝いにすっかり感じた。驚きと興奮で会場はどっと沸き上がり、盛り上がりは最高潮に。

委員長の私が無茶を頼んで色々根回ししたんだよね、これ。どうしても詞の出場はサプライズにしたくって、じゃあどうやったたらそれを効果的に出来るかって考えたときに思いついたのがこの演出。どうせ出るんだったら大きな爪痕を残しておきたいと、詞も全面的に賛成してくれた。

とにかく、上手く行つて良かった。不安が完全に消え去って、溢れてくる楽しいという感情。

会場の凄まじい熱気に乗っかって、私と詞は左右反転の決めポーズを一緒に取った。

— ※ —

ミスサンタコンテスト控室。私と詞は一緒に制服へと再び着替えていた。

「……まさか失格って、笑っちゃうよね」

ミスサンタコンテストは結局森島先輩の3連覇で幕を閉じた。私と詞のペアは、色々やりすぎなのと委員長の権利の濫用で不公平だからという審査員の先生の一声で、異例の失格扱いになってしまった。

……その時、会場から笑いの渦が巻き起こったのを聞いて、私は『やってやった』みたいな感じで内心ガッツポーズしたけど。

「そうね。でも、あたしはやりたい放題出来て満足したわ」

詞が、何か悪いことをしてやったぞ、って感じで笑みを浮かべる。目の前にいる詞は、もう完璧な優等生でもなんでもなく、たった一人の等身大な女子高生だった。

「私も。失格も含めて、大きな爪痕残せたんじゃないかな」

「ええ。伝説になれるかしら」

「多分ね」

詞と冗談を言い合つて、笑う。ほんの1ヶ月半前には、全く考えられなかったこと。まさか私が苦手だと勝手に思つて、勝手に距離を置いていた詞と、こんな近い距離でいられるなんて。しかも、お互いサンタ衣装を着て……。

……そつか。もう、サンタ衣装の詞は見られないのか。というか、本番中詞のサンタ衣装を眺める余裕、全くなかつたな……。

そう思つてから、行動に出るまでは結構あつという間だった。詞という人間が近くに存在するということが、私の心の扉をゆるくしてしまうんだ。

「ね、ちよつと待つて」

「え？」

服を脱ぎかけている詞を、私は止める。詞は脱ぎかけた黒のサンタ服を自分の身体に戻す。……あ、今の仕草すごくいい、そそる。

「詞の衣装。最後にもうちよつと、見ておきたいなつて」

「はい……？」

まさかこんなことを私が言ってくるなんて詞も思つてなかつたようで、詞はぼかんとした表情になった。まあ、引かれても今更だよね、私と詞の関係だし。

「だって本番中、詞のサンタ服姿あんまり見られなかったから。それに、もう着ないんでしょっ。」

「……まあ、今日これっきりで着ないでしょうね」

「だから、見たくつて。ダメ？」

私はじーつと詞の目を見る。詞は少し目をそらし、そして。

「……純奈のも、充分に見せてね」

「はいはい。詞のためなら」

詞、ちよつと恥ずかしそうだな。可愛い。そんな、黒のミニスカサンタ服を身にまとっている詞を私はじつくりと眺める。

正式な許しが出たから、脳内で写真を撮る……というよりは、昔のカメラみたいに焼き付けるような感じで……細かいところも逃さず、記憶する。

「ちよ、ちよつと純奈、じろじろ見すぎ……」

「動かないでよ。ちゃんと記憶してるんだから」

「……し、仕方ないわね」

詞の色白めな肌に黒い服はすごく似合うな……。引き締まってる雰囲気の中に、黒い服が詞の白くて綺麗な肌を一層引き立たせて、ちよつとセクシー。特に、短いスカートから出ている生脚は、普段の清楚な詞の雰囲気からは、想像も出来ないような破壊力

を持ち合わせてる。こんな詞の姿を見た男子は、きつと瞬殺だったんじゃないかな。

私、こんな人の隣にいてポーズ取ってたんだ……比較されちゃってたら、敵わないや。やっぱり、詞はすごい人だ。

詞も私の姿を……ちゃんと見てくれているよね、うん。恥ずかしいけど、私の特別な姿をしつかり目に焼き付けようとしてくれて……嬉しい。胸が満たされる、みたいな。

「ねえ、目がやらしいんだけど」

仕方ないじゃん。私だってそんな目で見るよ。詞可愛いし綺麗だし普段そんな格好しないし。

「……詞」

「何よ」

だから、私は思いつき笑顔で詞にこう言ってやった。

「最っ高」

「……変態」

頬を膨らませた詞、顔がちよつと赤くなってる。……私も、かな。ちよつと身体の奥が熱いもん……。

「変態で結構」

でも、ばつちり変態の称号はありがたく頂いておく。

「もう……」

開き直った私に、詞は呆れ気味に肩をすくめた。殴って来ないのにちよつと物足りなさを感じる。……何で物足りなく思ったんだ、私？

まあ、それとは関係なく物足りない要素があるんだけど。私は、未だ私の心にくすぐる欲望を詞に解放する。

「あ、そうだ」

「純奈？」

「詞、ポーズ取ってみて。本番でやった、最後の決めポーズ」

「ええっ!？」

ステージに上がった後でテンションが上がった私はとても積極的になって……端的に言うとうと、暴走していた。

もういくら無茶をリクエストしても、詞にやら嫌われないという確信が何となくあるから。もう怖いものなんてない、って感じ。本番後で舞い上がってるのも原因の一つだけだ。

「皆の前でやったんでしょ？ 私の前でも当然出来るでしょ？」

怖いものなんてないから、ガンガン攻める。詞、案外押しに弱いから……。

「……な、なら、先に純奈がやってみせなさいよ」



ね？ この条件なら、全然痛くも痒くもない。

「お安い御用で。私、さっきの予熱でテンション高いまんまから楽勝だよ？」

それに……私にもう、恥なんて文字はない。本番以上の笑顔を作つて、ついでにウインクまでしちやつて、ビシツと……というか、キャピッと決めポーズを取る。

「えへへ、どう？」

詞が、何となく一瞬たじろいだような気がする。効いたかな、これ？

「か……可愛いわね。ええ」

詞は少し照れた様子で、でもごまかさずに素直に私のことを可愛いって言ってくれた。……あれ、私、もつと顔に熱が……！

「ま、待つて、面と向かつて言われると恥ずかしくなつてきたんだけど……！」

「ふ、ふっ」

私は慌てて作ったポーズを解いて素に戻つた。そんな様子を見た詞に笑われて……私も私で、まだまだ弱いなあ。

でも、そんな弱い私も詞に見られるのなら……ううん、というか見てほしい……。

……な、何思つてるんだ私。変だよ。変だよ、私……っ！

「こ、今度は詞の番だから。約束はちゃんと守つてよ？」

とりあえずこういうときは強引にねじ込むに限る。ボールの上にあるかのように不

安定に揺れる心を必死に隠して、私は詞にそう言った。

「……………わ、分かったわよ」

詞は大きく息を吐いて……………思いつきりはつちやけた感じで、私と同じようにウインクまでしてポーズを取ってくれた。

撃ち抜かれた。私の心臓。

詞っ、詞っ……………！ 心の中の私は詞の名前を連呼しながら、ゴロゴロ寝転んでジタバタのたうち回って悶え苦しんでる。

だってだって、呼吸をするのも忘れるほど、すごく、すごく可愛いんだもん……………っ！

「……………」

「な、何か言いなさいよ……………」

ポーズを取ったまま、詞が素に戻った。詞の顔、誰が見ても分かるくらい真っ赤。そんな詞に、私は……………

「あつ。ご、ごめんっ、とつても可愛くって見とれてた……………」

……………考えるよりも先に、こんなことを言ってしまったて。

「つ……………着替えるわよ、もうっ」

詞はサンタ衣装をぱつと脱ぎ捨て、制服に着替え始める。その様子はとにかく身体を動かすことで何かをごまかしているように感じて。

……私も、それは同じだったりして。高鳴る心臓、脳に焼き付いた詞のサンタ姿、詞の声、体温、匂い、唇の感触……今さつき体験したことも、それよりも前に体験したことも、詞に関することを一気に思い出してしまつて。

その詞の思い出達は、私の心をこれでもかというぐらい激しく揺すつて。苦しくて、辛くて……胸の奥から、何かが押し上げられるような……そんな感じがして。とにかく、私はおかしくなつてゐる。

詞に負けず劣らずのスピードで、私もサンタ衣装を脱いで制服にがつついた。まだ私の出番は終わつてないんだ、ちゃんと閉会式の挨拶もあるのに……私っ、私……！

やっぱり……私、変、だよ……っ！

## 今ここに、在るといふこと

閉会式も終わり、時刻は21時を回った。ツリーも消灯され……私は、創設祭当日にやる後片付けの指示を終えた。

夜遅くまで残るわけには行かないし、ちよつとした実行委員の打ち上げもこの後あるので、後片付けと言っても簡単なもの。食品を扱う出店の備品の清掃と回収……ぐらい、かな。ちゃんとした後片付けは明後日にあるし。

帰っていくお客さんの様子を目で見て、お祭りの喧騒が段々と小さくなっていくのを耳で感じる。すると、ほんのひとつまみの寂しさがじわりと心に広がっていくような……そんな感じがした。私が大きく変わるきっかけになったこの一ヶ月半が、とうとう終わるんだって実感が、心の奥底から浮き上がってくるような……そんな感じ。

始まりもあれば終わりもあるのは、漫画やアニメを深く愛する夢女子の私であれば重々承知しているのだが……いざ私自身が体験するとなると、抱く思いとかって全然違うんだな。寂しさの重みの質？ っていうのかな。それが、全然違う。

こう、身体の奥深くにずしりと存在する感じの、そんな重み。

そんな重い寂しさという気持ちも感じているけれど、それでもお祭りの予熱は

中々冷めなくって。興奮で火照った身体に当たる、冬の夜の冷たい空気。確かに寒くて震えてしまうけれど、その冷たさで冷ましてくれないと……私は私でいられなくなりそうだった。

……多分、お祭りとは違う熱も、あると思う……。

「おーい！ ぼーつとしてどうしたのよ！」

「ふえ……？」

聞き慣れた声だけど、まさかいるとは思っていなかった人。私はほかんとした。

「あたしよあたし。何びっくりしてるのよ」

「柵町だ。見かけないからバイトでないかと思った」

この創設祭の日でも、柵町の髪はちゃんともじやもじやしてた。……というか、こういう寒い日に柵町の髪はあつたかそう。イジられまくるのは嫌だけど、今日ばかりは柵町の髪が羨ましい。

「ちゃんといたわよ。お昼のシフト入って、夜は空けてもらったから」

納得した。今日は創設祭だから、お昼の授業はなかった。上手いこと使ってるな

……。

せつかく来てくれたんだから、私は実行委員長として今一番気になっていることを尋ねる。

「なるほどね。……創設祭、どうだった？」

「楽しかったわよ。準備も、本番も全部ひつくるめて」

「それなら良かった……」

柵町は楽しくないなら楽しくないと直球を投げてくるような人だ。だから、柵町に楽しいと言ってもらうのは、他の人に楽しいと言ってもらうよりもすごく価値のあること。とりあえず私は、胸をなでおろした。

「橘もお疲れ様。委員長、よく頑張ってたじゃない」

「うん、何とかなつたって感じ。ほんとに」

委員長として出来るようになったことは確かに増えたけれど、結局出来ない、上手く動けないことは最後まで残ってしまつて……詞と違って、周りに協力してくれる人がいなければ、私は委員長としての仕事を全う出来なかつたと思う。

「詞以上に働けて何とかなつたは謙遜しすぎよ」

え……？ 柵町も、私が詞以上つて言つちやうの……？

「で、でも、詞みたいは何でも出来ないし、余裕も全然なかつたし……」

嬉しいよりも、困惑。私は言い訳を並べて逃げ道を必死で作る。けれども……その逃げ道は、ある人物によって簡単に壊された。

「悔しいけれど、上に立つことに関しては既にあたしを超えたと思うわよ？」

「ふえ？ 詞……う？」

いつの間にか、詞がいた。普段と変わらない詞、だけど……何でだろ、私は詞の顔を直視出来ない気がする。

やっぱり、私はおかしい。昨日から今日にかけて、急におかしくなってる……。

「純奈が委員長になってからの方が、みんなが生き生きとしてたのよ」

「そ、そうなの？」

詞ですら、私を認めるなんて……そんな、私は。

「そう。人を観察することに絶対の自信があるあたしが言うんだから、認めなさい？」  
「う、うん。実感は、ないけれど……」

そうやって私が思わず逃げ道を作ろうとすると、詞はすぐに怖い顔になって。

「自信の無さすぎはかえって相手をイラつかせるわよ？」

こうやって、逃げ道を壊してしまう。

「(っ)めん詞」

「ふふっ」

すっかり私、詞に支配されちゃってるな。……でも、私はそうしてほしい。詞によって私が変わってしまうのならば、どんな変化でもきつと受け入れてしまうと思う。

だって、私……詞が大好きだから。

……あれ？ 詞が大好きって、今、私……自然に想ったの？

「それにしても、ミスサンタコンテスト。『今までで一番盛り上がった』つてもっぱら大評判だったわよ？」

「ふえ!？」

「ちよつとどうしたのよ。何か考えてた？」

「な、なんでもない。それで？」

棚町の言葉に私は現実に取り戻される。

「委員長直々に参戦して大暴れした挙げ句失格だなんて伝説よ伝説。ミスサンタコンテスト史においてこの先100年語り継がれるレベルの、ね」

……言葉にして言われると、私達相当はっちゃけてたんだな……。顔が熱くなってきたらきちゃう。

「あはは……。何か今になって恥ずかしくなってきたんだけど」

「純奈、爪痕を残すっていうのはこういうことよ？」

詞は恥ずかしがる素振りを全く見せず、むしろ得意げだった。今の素の詞に関して、感情に関してはとても素直だから……。ほんとに恥ずかしがってないらしい。



だから私はこんなことを聞く。

「詞は恥ずかしくないの？」

直球の質問。それでも、詞は当然と言った感じでこう言い放った。

「あたし、吹っ切れちゃってますから」

私に向けられた満面の笑み。作り笑顔なんかじゃなくって、心からの笑み。ダメだよ、詞……そんな笑顔、向けられたら私……。

詞と一緒にいるのが、怖くなっちゃうじゃん……。

——※——

「創設祭の成功を祝って……乾杯！」

空き教室にて、実行委員の打ち上げパーティーが始まった。お菓子とジュースを用意して、創設祭で起こったことや、逆に創設祭とは全く関係ないことだっておしゃべりしあつて楽しむ。

私はこういうイベントに今まで関わったことはないし、部活にも所属したことがないから、こういった打ち上げに参加するのは実は人生で初めてだったりする。

たった数時間のお祭りの終わり。予熱はまだみんな残っていて、委員たちもどこか浮かれている様子。私も私でその打ち上げの空気に乗せられて、ちよつと落ち着かない。……落ち着かないのは、他の原因もあるのだけど。

「橘先輩、お疲れ様でした！」

「ミスサンタコンテスト、すつごく可愛かったですよ？」

「もう、やめてよ。あれ、今になってちよつと恥ずかしくなってるもん」

後輩達とも話しながら、私は思わずちらりと詞の方を見やる。……大丈夫、詞の周りにもちゃんと人がいる。

もう、詞は孤独なんかじゃなかった。詞が社会に広く愛される目的でわざわざ仮面を被らなくても、詞という人間を見てくれる人が私の他にもちゃんといるんだ。私はそのことを心底嬉しく思ったけど……何でだろ、心の端っこがぴりりと痛むような感じが……。

え……？ 私、ヤキモチ妬いてる……？ ほんの一瞬間に思ったその気持ちは、すぐに確証に変わっていく。認めたくないけれど、『ヤキモチ』という4文字が浮かぶとあつという間に形をなして強固な気持ちのイメージへと変化した。

……私、どうしたいの？ 詞と、今の関係を……どうしたい、の……？ 詞から離れたいの？ 詞ともっと、近くなりたい？

何にせよ、今の距離のまままで詞といえるのは……もう、限界なのかもしれない。

ぼーっと他の子と談笑している詞を眺めていると、思わず目が合ってしまった。私の様子を見た詞が、私の心をまるで見透かしたかのようにくすつと笑う。どきりとした私は思わず目をそらし、窓の外を見る。

夜の学校の中庭に、お祭りの跡が点々と残っている。私達が飾り付けをしたクリスマスツリーももう役目を終え、静かに佇んでいる。そして、空は当然真っ暗で、大きな月がはつきりと見える。星も数個、浮かんでいて……詞に惑わされて、落ち着くことができない私に優しい光を届けてくれている。

がやがやとした空気の中、ただ一人こうして空を眺めるのも悪くない。というか、昔の私……人との関わりをあんまり持とうとしていなかった時の私は、休み時間とかよくこうしてたっけ。創設祭が終わって私は完全に変わってしまったと思っただけ、ちゃんと昔の私の残滓がまだ身体の端に残っているんだな。

今の私も、昔の私も……同じ、私のままなんだ。本質は、ちゃんと変わっていない。

「純奈」

「ふえああ?!」

「お、いい鳴き声」

ぼーっとしているところに声をかけられて、私は間拔けな声をあげてしまう。振り返ると、私の隣にいたのはやはり。

「つ、詞……いつの間にな？」

「今日の主役が物憂げに外を眺めてるんだから心配するでしょ？」

「そ、そうだよね……あはは……」

私は詞を直接見ないように、微妙に視線をずらす。今の私が詞を視界に入れてしまつたら、詞への想いで一杯になっている私がどうなるのか分からないから……。

「ねえ。今日の純奈、ちよつと変よ？」

「え……？」

凶星を突かれた。そりやそうだ、相手はあの絢辻詞だ。私ごときの隠し事なんて簡単にお見通し。

「挙動不審が隠しきれていないわよ。気づかれてない、なんて思ってたかしら」

「う……」

私は言葉に詰まる。だって、その挙動不審の原因は他ならぬ詞なんだから……! !

「……2人きりになる？」

「えっ？」

つ、詞……つ。それは、私がパンクしそうっ……！

「で、でも……今、じゃなくっても」

「今じゃないと嫌」

「わ、ちよつと、詞っ……！」

そう言うとき詞は私の手を強く固くぎゆうつと握り締めて、強引に教室の外へと連れ出した。

詞の手から感じる、詞の感触、体温、そしてこれから、打ち上げの喧騒から離れて詞と2人きりになるという未来……それらの事象が私の想いを押し上げて、心臓の鼓動を早くさせる。胸が苦しくって、苦しくって、どうにかなくなっちゃいそう……！

そんな私の想いを、詞は全く意に介していないかのように……私をただ、前へ前へと引っ張っていった。

— ※ —

色々な備品が置いてある、狭くて暗い学校の一室。私は詞にそこへ連れ込まれた。電気を付けることもなく、月の光が部屋の中をぼんやりと照らすのみ。

詞と2人きりで向かい合う。外から隔絶された空間。今の私を狂わせるには十分すぎるような、そんな環境。

「詞……………」

私は狂いそうな私を必死で抑えつける。目を閉じ、うつむいて、両手はぎゅつと握りこぶしを作って、なんとかして気をそらす。それでも私の心臓は私の身体を強く振動させていて、呼吸をするのもとても辛くなって……………。

ずい、つと何かが一気に近づく感覚。詞が一気に、私との距離を詰めてきたんだ……………！

これ以上、近づかれると、私……………やめて、やめて……………！

「詞、やめつ……………！」

「……………」

拒絶の言葉を発することは出来なかった。だって……………唇が、塞がれたから。

「んんつ……………ん……………っ！」

「ん……………」

びっくりして後ろに倒れそうになる私を詞は強く抱き寄せる。何で……どう、して……私の気持ち、もしかして分かつてるの……？

それでも私は怖くて目を閉じているから、詞の表情とか意図とか、そんなのは全く分からない。

「んうっ……はあ、はあっ……」

キスをされた時間はそう長くなかった。だけど、詞の唇が離れても、私は私が怖くて……目を開けることなんて、出来なかつた。ぎゅうつと強く目を閉じて……狂わないように、壊れないように一生懸命だった。

「……どうしたのよ、せっかくながらあしがキスしてあげたのに」

「っ……」

詞が私の頭を優しく撫でる。髪をかき分けながら、私は愛でられている。私の額に詞の手が触れてこすれるたびに、私の心にある詞への想いが増幅して……その想いをどう外に出せばいいのか分からない私は、戸惑って、怖くなって……。

「……ぐすっ……」

「えっ？　ちよ、ちよつと何で泣くのよ……！」

温もりが消えて、すぐに冷たい空気が流れ込む。私が急に泣き出したことに詞が驚いて、思わず距離を取ったから。

「嫌……だった？」

「違う、嫌じゃないっ」

「じゃ、じゃあ……どうして……？」

「わかんない……わかんないの、詞……っ」

想いに押しつぶされた私は、その想いをどうにかしたいとしやがみこんで俯いた。涙を堪えようとすするけれど、そう思えば思うほど止まらないもの。

「ハンカチ貸すから」

「ありがと……」

詞のハンカチでとめどなく溢れる涙を拭く。それでも身体が勝手にぶるぶると震えて、全く落ち着くことが出来ない。

でも……溢れ出した涙は、私が知らず知らずのうちに蓋していた心をこじ開けてくれたみたいで。

「詞……私ね、変になっちゃったの」

一度心からこぼれ出した想いは、もうせき止めることは出来ない。目を瞑ったまま、俯いたまま……私は昨日の夜からずっと抱いていた、言葉じゃ上手く表すことができないような、はちきれそうな想いを告白する。

「詞のことを考えると、私……胸が辛くなって、息も苦しくなって、身体が熱くなって





ただただ恐怖に狂う。こんな私でも、詞に嫌われたくない。詞と離れ離れになりたくない。

だって、私、もう……！

……後ろからすぐく温かい感触。得体の知れない恐怖に支配された私の心を、優しく包んで励ましてくれるような……そんな、温もり。

「……純奈。大丈夫よ、あたしはここにいます」

耳元から聞こえる、柔和で透き通った声。

「つか……さ……」

詞がいる。たったその一つの事実が、不安を、恐怖を、一瞬にして全て消し飛ばした。

「純奈」

私の名前を、優しく呼んでくれた。私はちゃんと、詞に認められているんだ。……そんな当たり前のようなことを、強く再認識できた私は……

「つかさ……詞っ……！」

「きゃっ!？」

……振り向いて、衝動のままに詞を押し倒して。

「うわあああ……ああっ……！」

思い切り抱きつき、その胸の中で声を上げて泣いてしまった。

※

私と詞は、壁に寄りかかって立っていた。もちろん、隣同士寄り添いながら……。

落ち着いた私は、もう詞の近くにいっても壊れることはない。ただ、ほんの少しだけ心臓が早くなっているだけ。

「詞。怒ってない……よね」

「当たり前でしょ。あたしだって情緒不安定になるとあんな感じになっちゃうこともあるから……」

「ありがとう……」

詞の優しさが私の心を満たす。苦しさもあるけれど、今の私にはその苦しさが逆に幸福感にも感じられるようになっていた。

「……全ての人に、等しく幸せを」

ふと、詞が呟いた言葉。落ちていた詞の手帳を覗いた時に、創設祭の日の欄に書いて

あつた言葉。

あの時私はその言葉の理由を尋ねたけれど、有耶無耶にされてしまっていた。

「え？」

「理由、今日教えるって言ってたわよね」

「……そう言えば」

創設祭の日まで、内緒。あの時の詞は、そんなことを言っていた。そんなことを今更  
思い出した私は、少しぼーっとした感じでリアクションをしてしまった。

「微妙な反応ね。聞きたくないの？」

詞の機嫌が少し悪くなる。私は慌ててフォローを入れる。

「う、ううん。聞きたい。だって私、その言葉をずっと胸に委員長を頑張ってきたから」  
実行委員の活動で、ちよつと辛かったり、苦しかったりした時とか……とにかく何か  
あれば私は、その詞の言葉を取り出して嘸み締めてた。真意を量りかねないままでも、  
素敵な響きのする言葉だなんて私は感じていて……実際私は、その言葉に勇気をもらえ  
ていた。

「……嬉しいけれど、少し恥ずかしいわね」

詞、照れてる。可愛い。

「ふふっ。……教えて？」

「もう……」

詞は少し息をつくくと、窓の向こうを眺めながらつぶやいた。

「……純奈。サンタさんを信じなくなった日のこと、純奈は覚えてる？」

教えてって言ったなら、いきなり質問をされた。しかも、詞の口から『サンタさん』なんて単語が出てくるなんて……。

「ふえっ？ ……何でそんなこと、聞くの？」

「何でも。いいから答える」

私は曖昧な記憶をたどる。……うん、確か、こういうことがあった気がする。

「えっと……うん。小学校4年生くらいの時、サンタさんの話をしたら『いつまでいるって信じてるの』って友達に馬鹿にされたんだっけ」

私の人生において、どちらかといえばどうでもいい寄りの小さな小さなエピソード。それでも、あらすじ程度ではあるけれど覚えているんだなってつくづく思う。

「そっか。よくある話ね」

そんなどうでもいいエピソードは詞に簡単に片付けられた。……まあ、別にどうでもいいんだけど……。

「じゃあ、詞は……っ？」

「あたしはもつと酷かったわよ？ 言わないけど」

「言わないんだ……」

「うん、言わない」

私にだけ言わせておいて自分は言わないあたり、詞だよねって思う。……でも、もつと酷かった、か……多分、話してしまった途端、話の本筋がそちにそれちやう位の出来事なんだろうな。

「でも……それがきつかけなの」

「きつかけ？」

酷い出来事がきつかけ……？

詞の視線は、窓の外から私へと向けられる。まっすぐに見つめられたけれど、私は目をそらせなかった。

詞の唇が動く。

「ええ。その日をきつかけにあたしは決心したの。『あたしがサンタさんになるんだ』って」

詞が、サンタさん？

「……え？ 詞が？」

「うるさいわね、黙って聞く！」

「ごめんごめん」

だって、サンタさんとは一番無縁そうな人だったから……なんて言うのと確実に殴られるので黙っておく。

「当然その時のあたしも、サンタさんになることは出来ないって分かった。だから、サンタさんみたいなことをやりたかったの」

「サンタさんみたいなこと……例えば？」

「例えば、か……そうね」

詞は少し考え込んでから、思い出話をする。

「小学5年生だったかしら。クラスメイトを公園に集めて、それぞれの長所を書いた紙を一人ひとりに配ってたわね。結構喜んでもらったのだけど……」

何だろう。すごく容易に想像が出来る。小さい詞が紙を渡して、喜ぶクラスメイトを見てちよつと得意げになっている風景。

「……何というか、詞らしいね」

「正直黒歴史ね、今となっては……」

「まあ、小学生の頃なんてみんなそんなもんだよ」

「……そっか」

私が小学生の頃は……うーん、思い出すと嫌な気がしてきたからやめとこ。

閑話休題。

「とにかくそれが今でも残ってて、全ての人に等しく幸せを、って書いたんだ」

「そう。言ってみれば創設祭の実行委員長を務めるのは、小学生の頃からの夢って言うてもいいのかもしれないわね。……残念ながら、途中でその夢を諦めざるを得ない事態になってしまったけれど」

詞は寂しく笑った。でも、その笑みには後悔とかそういうのはなくって、むしろちよつと爽やかにも思えた。

……何となく、私に委員長を頼んだ理由が分かった気がした。

「……じゃあ、私は詞の夢を背負ってたんだね」

「そういうことになるわね」

委員長という肩書き自体すごく重いのに、私は大切な人の夢まで背負って創設祭の準備をしてきたんだ。薄々気がついてはいたけれど、詞の口から直接語られるとその重みがより感じられた。

創設祭の前にこのことを知っていたら、私、その重みで潰されてたかもしれない。

私は手を胸に置いて、今思い浮かんだ、質問しなくてはいけないことを詞に不安げに尋ねる。

「上手く、出来てた?」

ついさつき仕事ぶりを認めてくれたはずだけど、詞と2人きりのこの空間で改めて私



は聞いておきたかった。

じつと詞を見て、その答えを待つ。といつても、全然待たずに答えは返ってきたけれど。

「もちろん。あたしは満足したわ。純奈に任せて、良かった」

純奈に任せて良かった。不思議だ、詞の言葉はまるで私が求めていた救いのようである……すつと私の隅々まで行き渡って、落ち着いていた私の感情を呼び起こして。

「ありがと……ぐすっ」

なんだか、熱いものがこみ上げてきて……やだ、私ってそんなに泣き虫だったっけ……。

「こ、こら！　また泣かないの！」

「だって……詞に、私に任せて良かったって言われて……」

「もう、仕方ないわね。はい、ハンカチ」

「んっ……」

詞のハンカチ。さっきの私の涙でちよつと濡れてる。少し、悪いな……。

「ごめんね、ハンカチぐしょぐしょにしちゃって」

「いいわよ。ハンカチは汚すためにあるようなものでしょ？」

「ありがと……」

今日はたくさん詞の優しさに触れてるなあ……。心がすごく、あったかい。

でも、何だろ……。涙を流してしまうと、浮ついていた感情も一緒に流れてしまって……。急に冷静になって、心に空気が出来て。そしてその空気を、何も無いもので埋めてしまつて。寂しくなつて……。

「終わっちゃつたね、創設祭」

「どうしたの、急に？」

「……なんだか、夢だつたのかなつて」

ふと、そう思つてしまった。

「こうして一生懸命、人のために頑張れてさ。みんなをまとめ上げたり、色々相談を受けたり、大勢の前で挨拶したり……。まるで、私が私じゃなかつた感じがして」

詞と出会つてから、私の生活は一変した。繰り返しの退屈な学校生活が、たくさん表情を見せて私に関わってくる。忙しくもあり、大変だつたけれど、決して退屈はしなくつて……。今思うと、あんなに充実した一ヶ月なんて今まで経験したことがなかつた。

だから、今思い返すと、現実味がない出来事が連続してたな、なんて……。そう、思つてしまふ。

そして、今も……。まるで夢。

「それに、今こうして詞の近くににいるのも、ひよつとしたら夢なのかもなつて思つちやつ

たりしてさ。そんなはず、ないんだけど……」

あの、私が圧倒的な劣等感を抱いていた、完璧な優等生。今まで避け続けていたコンプレックス。それが、詞だったのだ。

今となつてはそんなこと、全く思わないんだけど……でも、そういう人とここまで接近出来ているのは、やっぱり奇跡なんじゃないのかなつて。

少しその事実を指でつつけば、あつという間にもろく崩れ去りそうな気がするくらいの……そんな、おぼろげなイメージ。

「ごめんね、変なこと言っちゃつて」

ちよつと詞に失礼だったかもしれない。今、私が詞の隣にいるのはまごうことなき事実なんだから……。

そんな私の慌てた言葉が届いていないかのように、詞は上を向いてぼそりと呟いた。

「……あたしも」

「え？」

詞、も……？ まさか、詞が私と同じような想いを持つているだなんて。ぽかんとする私をよそに、詞は続けた。

「あたしも、純奈がいるつていうことが……まるで、夢みたいだなんて思うことがあるの」

「私が……?」

「そう。こんなあたしにも、純奈のような全てをさらけ出せるような人が近くにいるっていうことが……」

月の光に照らされた、詞の顔。寂しさと、幸せとが混ざりあつたようなその表情が、私にはやけに美しく見えた。

急に、私は詞が愛おしくなって……詞の身体を、ぎゅつと抱き寄せる。

「でも、夢じゃないよ。……私は、ここににいるから」

それは、私自身に言い聞かせるような言葉。おぼろげなイメージを補強するような、そんな言葉。そして、身体全体の感触で……今ここにある詞は現実なんだって、強く、強く……私の心に染み込ませる。

「……ええ、夢じゃないわ。わたしもちゃんと、純奈の隣にいるから」

詞の雰囲気がかすこく柔らかくなった。柔らかかなその詞の言葉と、私の身体に回された詞の華奢な腕が……ついさつきまでおぼろげだった私のイメージを優しく包み込んで、より強固にさせた。

もう、夢みたいなんて思わない。指でつついたって、その事実が崩れたりなんかしない。……私は、詞は……ここに、いるんだ。

お互いにお互いを確かめ合うように抱き合う。そこにある感触、そこにある体温、そ

ここにある匂い……全部夢なんかじゃなくって、今、確かに存在する現実。ちゃんと、ある。ちゃんと、いる。……今、ここに、しっかりと。

でも。……もつと、そのイメージを強くしたい。まだ私は不安だった。欲張りかもしれないけれども……心から強く欲しいと、そう思ってしまったから。

「……ねえ」

「ん？」

私は詞にお願いをした。……あの時の詞の、言葉を借りて。

「……私に、『証明』を下さい」

## エピローグ：わたしの隣に

『証明』を交わした、あの創設祭から数年が経った。

わたし、絢辻詞は生徒会長になった後に高校を卒業。今では国立大学に通っている。そして、わたしの大切な人……橘純奈は、わたしの指名で生徒会の副会長となった。高校を卒業してからは就職し、イベントの企画のお仕事をやっている。創設祭の経験を活かしたかったからこの進路を選んだとのこと。

このように別々の進路を選んだわたし達だけど……帰る場所は、一緒。  
「ただいまー、詞……今日も疲れたよー」

スーツ姿で帰宅する純奈。この仕事は休日がまばらな上、帰る時間も遅いことが多い。純奈に聞けば、大体この業界はこんな感じだから大丈夫、って言っているけれど……正直、わたしは心配。

「お疲れ様、純奈。ご飯あるわよ？」

「ありがとー……詞の手料理が毎日の楽しみだよ」

「毎日って言っている割には結構食べて帰ってくることも多いわよね」

「仕方ないじゃん、それも仕事の一環みたいなどこあるし……」

まるで、純奈が夫でわたしが妻みたい。だけど、わたし達2人の関係が恋人に変わった……っていうことではなくって。お互いがお互いの安心出来る居場所を求めた結果、わたし達は共同生活を始めたというだけ。

わたし達の関係は、わたしが持ち合わせてる語彙じや言葉に出来ない……というかわたしが簡単に表現できないようにさせている。友達でもなくって、かといって恋人でもない。あえて言うならば……すごく特別な関係、とでも。

……確かにキスはしたし、今もするし……実はその先のことも経験済みだったりする。でも、それは、お互いの居場所を確認しあって認め合う、いわば儀式みたいなもの。一応、純奈から恋人になろうっていう提案……ううん、告白をされたこともあった。でも、わたしは『恋人』という枠にわたし達の関係を移動することを拒んだ。

純奈への愛しさもあるにはあるし、純奈に愛されることがわたしにとつてすごく幸せでもある。だけど……純奈への気持ちを恋という言葉で、純奈との関係を恋人という言葉で簡単に表現してしまうのは、きつと間違っている気がするって思ってしまったから。

けれど……。

「まあいいのだけれど……純奈、勝手にどこかに行かないですよ？　純奈はもう、あたしのものなのだから」

「ええっ!? 　いつ詞のものに……って、とつくのとうに詞のものか、私は」

「ふふっ。……大好きよ、純奈」

「私も。詞、大好き」

わたしは純奈のことが好きで、純奈もわたしのことが好き。そのことは間違っていないし、揺らがない事実。

その『好き』という言葉の意味が、果たしてライクなのかラブなのかというのは……どっちも合ってるって、今は言っておこうかな。

わたし、絢辻詞は……すごく、幸せです。